
殲滅の時

黒夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殲滅の時

【Nコード】

N5343T

【作者名】

黒夢

【あらすじ】

* 自分のHPに載せていたSSの転載です。HPの閉鎖に伴い此方に投稿しました*

異端狩りの彼等の下に、一つの情報が舞い込む。

それは稀代の吸血鬼『闇の福音』の所在を示すものだった
平穏の時は終わりを告げ、此処に狩猟笛が鳴り響く。

全ては

殲滅の愉悦の中へ……

闘争、開幕

時刻は零時。

闇夜が最も色濃く香り、月光が最も良く見栄える魔性の刻限。
窓際に立つ大柄な男は、窓越しに淡く輝く月光を見上げて、「ほう」と短く感嘆の吐息を漏らした。

男の風貌は、およそ二十代後半であろうか。

宵闇のような黒髪はざつくばらんに揃えられ、丸いサングラスの奥に見え隠れする瞳は禍々しい紅彩を帯びている。鮮血で染色したかのように色鮮やかな真紅のコートは、何処か血生臭い男にマツチしていた。

男は、クツクツと喉を競り上げる愉悦を紛らわすかのように傍らのグラスを手にとると、貴族のような優雅さでソレを喉に流し込む。

「いい夜だ。こんな夜は、いい気分で血を飲める」

舌の上で広がる濃厚な甘味は深淵のように奥深い。

喉を通り過ぎる際に鼻腔を擦る香りは、夜風のように芳ばしかった。

紅い液体は男にとって生命の通貨であり糧だ。

とても愛しそくに最後の一滴まで飲み干すと、法悦に浸りながら嘔く。

「ああ 本当に。本当に、いい夜だ」

見上げる月は、完全な形で其処にある。

いつものように矮小な星々を隷属させて、自らを引き立てる傀儡

にしながら。

真ん丸の満月は、雲一つ無い夜空を我が物顔で席卷していた。

「お前は、私すら見下す。私をも、下に置く。実に面白く、憎らしいヤツだ」

男は、徐に月へと手を伸ばした。

決して届かないと知りながらも、郷愁の念のようなものがそうさせる。

空を泳ぐ手は月を捕まえようと躍起になるが、指の隙間から零れ落ちるばかりで一向に捕まってくれない。

「……………ふッ」

暫らくすると、男は手を引つ込めて嗤った。

らしくもない不毛な行動を嘲るように。

「今日の月は、いつにも増して私を惑わす。やはり、似ているからか？ あの夜に」

静かで重苦しい声色は確かな喜悦を夜の闇に溶け込ませ、ひっそりと消えていった。男は高揚する心根を自覚して、だからこそ幾分か残念そうに肩を竦める。

「これ程までに私は貴様に思いを馳せているというのに、そんな貴様はいつたいてどこで何をしている？ いったいどこで、意地汚く人間に縋り付いているのだろうか」

丸いサングラスの奥。爛々と輝く真紅の瞳は、此処にはいない誰かを捉え、嘲る様に笑っていた。不意に。歴史ある木製のドアが、

ギイツと軋みを上げて開かれる。

「此処にいたか、アーカード。ずいぶんと捜し歩いたぞ」

「ウォルターか」

真紅の男　アーカードは振り返りもせず訪問者の名を呼んだ。
執事服を隙無く着こなす初老の男　ウォルターはやれやれと軽く首を振ってみせる。

「インテグラ様がお呼びだ。君を捜すのに手間取ったからな。急いでくれ」

「ほう？　今日は喜ばしいことに仕事が無いのではなかったのか？」

「休みさ、君は。小物の起こす騒動など、イチイチ君が対処するに値しない」

意味深いウォルターの言い様に、アーカードはニンマリと口先を歪ませる。

「なるほど。どうりで婦警と傭兵の姿が見えんと思っていたが、そういうことが。」

小物は小物同士で。鬭争に生きるモノは鬭争に生きるモノ同士でと。

つまりはそういうことなのだな『ウォルター死神』」

振り返ると共にアーカードはパンツと軽快に手を叩く。

まるで1+1の答えが分かった幼稚園児のように、分かりきった答えに満足して。

「ああ、そうだ。そうだと。それも格別な獲物だ。特に私と、君にとってはな」

紳士の顔付きからゴミ処理係のソレへと。

ウォルターは皺くちやの頬を持ち上げ、活力に満ち満ちた瞳でアーカードを一瞥する。それだけで、アーカードは理解した。

「っ！？ まさか！！」

「そのまさかだ。ヤツが遂に見つかったらしい。急げよ、私と待ちきれないのだ」

念を入れてそう言い残すとウォルターは優美に扉を閉める。

閉められた部屋 其処には既に、アーカードの姿は無かった。

ロンドン郊外。

都市の喧騒からは無縁の平地に、一軒の豪邸が物静かに居を構えていた。貴族の城館を思わせる壮麗な造りは、観る者を感嘆させる歴史と品格を秘めている。数十に連なる窓の殆どは暗闇に覆われ、光点が燈る箇所は隣り合わせの一角のみ。

そうして光が燈る一帯。其処は改装を施しさえすれば盛大なパーティーを開ける程に広大な一室であった。天井と床は黒と白のチェツクの柄で塗装され、さながら巨大なチェス盤のようだ。

そんな美しくも気味が悪い黒白の世界には、三人の人影があつた。

アーカードとウォルター、そして木造の事務机と椅子を陣取る妙齡な女性だ。

腰まで靡く金砂の髪は窓から差し込む月光に好く冴え、整つた顔立ちは貴族の令嬢の如き気品を宿している。しかし、メガネの奥に隠された瞳は他者を隷属させるかのように鮮烈で、可憐な姫君には程遠い。むしろ、尋常ならざる気配を撒き散らす男二人を臆さず見据えるその姿は、女傑という形容が相応しかつた。

カチ。コチ。カチ。コチ。カチ。コチ。カチ。コチ。

静寂が満ちる室内に、時計の秒針の音がヤケに大きく反響する。静寂の最中。口火を切つたのはアーカードだつた。

「ヤツを見つけたというのは本当か？ マイ・マスター」

ゆつくりと、それでいて抑え切れない狂喜に貌を綻ばせながらアーカードは自身を従える唯一の存在に尋ねた。その問い掛けの意味さえも極上のワインのように飲み干しながら、口の端に鋭い犬牙を覗かせ、嘗てのソレを脳裏に思い描く。

そんな頼もしい親愛なる下僕を前にして、女は思わず喜悅に喉を鳴らした。

「クツ……貴様は、貴様のマスターの言葉が信じられないとでもい

うつもりか？

そうなのか？ バンパイア 吸血鬼」

「そうではない。そうではないさ。

我が主が見つけたと言っているのだ。ならばそれは絶対の真実だろつ。

私が聞きたいのは、そんなわかりきった当たり前のことではない。ヤツがいつたいたいどこにいるのか。私は、そう聞いているのだよ」

吸血鬼 人々の空想の中でのみ登場する不死の化物。

その名で呼ばれたバケモノは、言葉遊びのようにそう返した。

子供が玩具を強請るように、バケモノは抑え切れない興奮を言葉で誤魔化しているのだ。それでも、欲しいという欲求は抑え切れない。抑え切れるわけが無かった。

「インテグラ様……あまり、焦らさないくださいませ。

アーカードも、私も。ヤツには浅からぬ縁がございます。

この老いた脳にすら、ヤツの姿は今なお色濃く焼き付いているのです」

それはウォルターとて同じことだ。

否。ひよっとしたら、この紳士然とした老人の方が欲求は大きいのかもしれない。

インテグラと呼ばれた女はウォルターのオネダリを受けて満足そうに微笑むと、見るからに高級そうな葉巻を口に銜える。

「ウォルター」

短く、名を呼ぶ。それだけで十年來の従者は澱み無く動いた。

その意を汲み取ると懐より年代物のライターを取り出して、瑞々

しい唇に銜えられた葉巻の先端に火をつける。

広い室内。その一角に紫煙が舞った。インテグラは二、三度浅く吸うと、まだ大分残った葉巻を灰皿に押し付ける。そうしてグリグリと必要に葉巻を押し潰しながら、ようやく重い口を開いた。

「日本だ」

ただ一言。インテグラはそう言った。

けれど、ウォルターとアーカードにはそれだけで十分に過ぎた。

「なるほど。宗教に無縁のあの地なら、奴が隠れるには打って付けですな」

「しかし、妙でもある。あの国は宗教にまるで興味が無い。

だからこそ、我々は既にあの国をしらみつぶしに探したはずだぞ。それなのになぜ今更になって、ヤツがあ国にいるとわかった？」

先進国にとっては珍しく、宗教の浸透に縁遠いあの国はコチラ側にとって中立地帯のような場所でもある。そのためか、宗教の弾圧を恐れる化け物や異端者が集りやすい。彼等にしても、あの国での搜索は十年以上前から行っている。

けれど。搜索から十数年。今までヤツの足跡すら見つけれなかったというのに、今頃になって何故、発見できたのだろうか。

「日本の古都、京都でヤツの姿を目撃したという情報があった。

そこから広範囲に情報網を広げた結果……」

そこまで言って、何故かインテグラは言いよどむ。

「結果、なんだ？」

先を促すアーカードにインテグラは胡乱な一瞥をくれると、半ばヤケクソ気味に続けた。

「……ヤツは、日本における魔法使いどもの巢である麻帆良学園に……『生徒』として、在籍している事がわかった」

「……………」

「……………」

何とも言えない沈黙が場を満たした。

インテグラの背など、微妙に煤けている様にも見える。

尤も、積年の怨敵が暢気に青春を謳歌しているとすれば、無理も無いかもしれないが。

「……それは、また。灯台下暗しですな」

数秒の沈黙の後、気を取り直したウォルターは乾いた笑みのまま日本の諺を冗談交じりに口にした。

確かに麻帆良学園は関東魔法協会の拠点として有名であり、化生を受け入れる余地は少なからずある。だが、まさか長年捜し求めていた宿敵がそんな所に、そんな立場でいると誰が予想できるだろうか。そもそも人一倍プライドの高いアレが、何故そんな屈辱とも言える立場に甘んじているのか理解できない。

微妙な場の空気を嫌ったのだろう。インテグラは頭を振って気分を入れ替えると、元の雰囲気再び繕うために指を組み、神妙な顔付きに戻った。

「……すでにヴァチカンも動いている。ヤツ相手だ。恐らく、出て

それは、ある満月の夜に起こった昔の話。

いや、この身にとっては昔と言うほどでも無いか。たかだか三十年前の話だ。

ある日、突如として襲い掛かってきた真紅を纏う同属狩りの吸血鬼と、ゴミ処理係を名乗る妙齡の男。いつになっても変わらなかつた殺し殺される日常の中でも、あの日だけは鮮明な記憶として残っている。なにせ近代に入ってから是最も追い詰められ、最も内心を見透かされた時であるから。

同属は遊ぶように殺し合いを演じながら、唐突に訊いてきた。

『エヴァンジェリン……最強を名乗る同属よ。貴様は何のために生きています？』

貴様はすでに何の目的も無く、すでに何の拠り所も無い。時間の波に流されるだけの存在だ。

ただ生きて、ただ殺して、ただ流れる。

貴様は実につまらない、ただそれだけを為すためだけの存在に成り下がってしまったっている。私にはわからない。貴様は何のために、見限ったはずのこの世界に縋っているのだ？』

戯言を、と。普段なら、そう切り捨てた。

だが、満月の夜は私の気を昂らせ、気紛れに答えさせる。自慢の爪で同属の左肩から右脇腹を斜めに引き裂き、湧き出る鮮血に微笑みを深め、腹の底から力を入れて。

「生きたいから生きているのだ！」と。

一瞬の迷いも無く、誇りすら持って答えてやった。それは何の脚色も無い真実の叫び。何処の世界に勝手に吸血鬼にされて、勝手に追い回されて、勝手に殺されるなどという運命を許容できる者がいるというのか。

少なくとも、エヴァンジェリンという人間だったモノはそんな結末を認めない。

認めてなるものか。

意地でも生き抜いてやる。

そのために力をつけた。

そのために 『闇の福音《本当のバケモノ》』 となった。

だが、同属は言う。

あまりにも滅茶苦茶で、真祖よりも特異で、取り分け異質な吸血鬼は体躯より吹き出る己の鮮血すら気にも留めずに『つまらない』と。

そう言いながら、奴は私に背を向けた。

『本当につまらない。それは人間こそが言うべきものだ。

私たちのような化け物のための言葉ではない。

よくわかった。貴様は世界に縋っているのではない。人間に縋っているのだ。

そんなつまらない貴様など、今は殺すに値しない。貴様と私は必ずもう一度出会うだろう。その時に、もう一度だけ聞いてやる。貴

様は何のために生きているのかと』

一方的に言い残して、奴は本当に去っていった。
その後、残された者同士、妙齡の男と戦った。

男の戦闘方法は鋼糸。

魔法に最たる超常の力には一切頼らず、己の身一つで挑んできた。
その錬度は限界まで磨き上げられたナイフのようで、過酷な研鑽の一端を垣間見せた。満月の夜でなければ、腕の一本でも落とされ
ていたかもしれない。

だが、逆に言えば、その程度の損傷を視野に入れていれば倒せない相手でもなかった。それなのに、倒すことが出来なかった。結局は痛み分けに終わってしまった。

あの時から、時々考えることがある。人間としての思考ではなく、吸血鬼としての思考で。

自分は いったい何のために生きているのかと。

「……くだらない。私の答えは、あの時から変わってなどいない」

「え？ 何か言いましたか、^{マスター}師匠？」

不意に。子ども特有の高い声がすぐ近くから聞こえてきた。

昔の情景に浸り、すっかりこのぼーや、ネギ・スプリングフィールドの修行に付き合っていた事を失念していた。

「……なんでもないよ」

そう。なんでもない。

こんな感慨など、ただ今日が満月だったから思い出しただけだ。現に、この学園で生徒をやらされてから今日まで一度も思い出した事は無かった。

明日になれば、またいつも通りのクダライナイ日常に戻る。

だというのに 嫌な胸騒ぎが止まらない。

茶々丸との組み手に精を出す弟子を遠目に眺めながら、何とも為しに夜空の満月を見上げる。

淡く光り輝く真ん丸の月は、血に濡れているかのように紅く見えた。

これは、真紅の吸血鬼が戯れに月へと手を伸ばした数日後の話である。

闘争、開幕（後書き）

『小説家になろう』のシステムに慣れる為、投稿は一日に1〜2話を想定しています。

HPに載せていた頃より手元の話は進んでいるので、以前に拝見して頂いている方には申し訳ないのですが、少々お待ちください。

狂信者

爛々と麻帆良の地を照らす陽光。

暖かな日差しは程好い温もりを道行く人々に提供し、心成しか吹き抜ける微風さえも普段より優しく肌を撫で上げていく。まるで過ぎ去った春がひよっこりと戻って来たかのような、そんな清々しい一日だった。

学校の授業が軒並み終わった放課後。

煩わしい束縛から解放された生徒たちは各々で行動を開始する。

真っ直ぐ寮へ帰る者や、どこかへ出掛ける者。部活動に勤しむ者とそのパターンは豊富だ。麻帆良学園には巨大な規模に比例して多種多彩の部活が存在している。

それこそ活動内容はもちろん、部活名からしてマトモじゃないものも含めてだ。

一例として、図書館探検部という部活がある。

元々は麻帆良大学の提唱で発足されたこの部活は、世界最大規模の巨大図書館、図書館島の全貌を調査するためだけに存在している。何も知らない第三者にとってはただの愛読家の集いのようにしか聞こえないだろう。しかし、その実態は様々な危険が隣り合わせの部活として麻帆良でも相応に有名である。

大袈裟ではなく、下手をすれば命を失いかねない程に危険なものだ。とはいっても、これは本当に特異な例で、大部分の部活は他校と殆ど変わらない。

逆に安全な部活としての例を挙げるならば

「う〜ん！ 今日はお日様がぽかぽかで気持ち良いですーっ！」

「ホント！ 絶好の散歩日和だね！」

「にんにん」

この少女らの部活が、正に筆頭であろう。

傍目からは見分けがつかない双子の少女。

そしてモデルと見間違わんばかりのスタイルを誇る長身の少女。恐らく、何の前情報も無しに彼女らが十四歳で、同じ年だと気づく者はいないだろう。双子の少女はどう見てもランドセルを背負っている方が似合っているし、長身の少女は並の大学生よりも大人びている。

そんなアンバランスな少女達は散歩部という部活に所属していた。活動内容は そのまんまである。

「あ〜あ〜。どうせだったらネギ先生も誘えば良かったなー。そしたらもっと楽しかったのに」

「そうですねー。ちょっと残念です」

双子の少女、姉の鳴滝風香と妹の鳴滝史香は気がついたら消えていた子供先生の姿を思い浮かべ、ひまわりのような笑顔をほんの僅かに曇らせた。ちなみに姉の風香はツインテールに吊り目の活発な性格で、妹の史香は左右で結んだおだんご頭と垂れ目が特徴的な人しい性格をしている。

よく双子の性格は似ないと言われるが、この二人はその典型例である。

尤も、度を越えたいたずら好きという点は二人の共通事項である訳だが。

「まあ、ネギ坊主もネギ坊主で色々忙しいのでござろう。
あまり無理強いするのもいかんでござるよ」

時代錯誤な口調で二人をやんわりと宥めるのは、ポニーテールを左右に揺らすのほほんとした糸目の少女、長瀬楓だ。風香は物言いたげにプクーツと頬を膨らませると、後ろを歩く楓を肩越しに見上げた。

「でもさあ、この頃ネギ先生っていつつも明日菜とかと一緒にいるじゃん！

私だって遊びたいのにーっ！ ふこうへいだあー!!」

これには史香も同意のようで、言葉こそ無いがコクコクと必死に首を縦に振ってアピールしていた。

(うーむ。どう言ったものか)

ネギの実情を少なからず知る楓はともかく、事情を知らない二人には現状が不満なのは仕方が無い。二人を納得させる何か旨い言い回しはないかと楓が人知れず思案していると。

(ん?)

不意に、目の前の交差点を誰かが曲がって来ることに気がついた。どうやら傍らの二人は気づいていないようで、特に風香などは未だに余所見を続けている。このままでは危ない。だから、楓は風香に向けてこう言った。

「風香殿。危ないでござるよ」

「え? って、わあ!？」

ちょっとだけ忠告が遅かったらしく、風香は曲がってきた誰かと見事にぶつかってしまった。そのまま体勢を崩して尻餅をつく。さらに悪いことに、どうやら倒れた時の打ち所が悪かったらしく、若干涙目になっていた。

「お、お姉ちゃん! 大丈夫ですか!？」

「大丈夫じゃないよ! ……痣になっちゃうかも」

心配そうに駆け寄る史香に風香は力無くぼやいた。

直後、風香の体をすっぽりと覆うほどの影が差して、眼前に大きく無骨な手が差し伸べられる。

「怪我はありませんか? お嬢さん。」

私の不注意から痛い思いをさせてしまって、本当に申し訳ありません」

同時に、聞き慣れない野太い声が頭上から掛けられた。

「あ……」

風香が見上げると、其処には人の良さそうな笑みを浮かべる大柄な老齢の男性がいた。一目で日本人では無いとわかる彫りの深さと、鼻が高い顔立ち。

男性は首から銀光りする十字架を掛け、長身の楓でも引き摺ってしまいそうなロングコートをあっさり着こなしている。

麻帆良には留学生などの外人も数多く在籍しているため、宗教に入っている者も多くは無いが確かにいる。特に風香たちのクラスには外人が多く、いつも十字架を身に着けているクラスメイトもいるので驚きはなかった。

だから、風香の眼を惹いたのは別の要因。

男性の左頬に刻まれた、深い一線上の傷跡だった。

風香の視線が頬に釘付けになっていくのに気づいたのか、男性は苦笑を零しつつ左手で傷跡を隠す。

「ああ、すみません。怖がらせてしまいましたか。

こんな怖い顔をしています。私はあなたに危害を加える意思はありませんよ」

その言葉にハッと風香は気を取り直すと、大慌てでアタフタと手をバタつかせた。

「ち、違うよ！ じゃなくって違いますってば！

えーと、その、なんと云うか……か、カッコいいなーって思っ
て……あう〜」

自分でも言っている事が無茶苦茶だと思ったのだろう。

最後の方は声が小さくなり、羞恥に頬を真っ赤にして頂垂れてしま
った。

そんな中、不意に風香は虚空を泳ぐ手を取られた。未だ気恥ずか
しさが頬の赤みとして残る中で上目遣いに見やると、大きな手が優
しく、けれども力強く風香の手を包み込んでいる。

「そう言ってもらえると私も嬉しい。ありがとう、可愛いお嬢さん」

そう言いながら、男性は風香の手を引いて立たせた。

次いで、傍らの史香を見やる。

「君達は、双子ですか？」

「あ、はい！」

「そうですー」

風香は元より、史香も一連の流れで男性が良い人だと伝わったた
めか、何の気負いも無く答えた。すると男性は温かい微笑みを深め、
二人の目線に合わせるために膝を折る。そしてポンツと。二人の頭
に軽く手を置いた。

「いいですか？ 君達は同時に生を受けた。それは生まれた瞬間に
良き友人と良き理解者を得たということです。お互いにとって、君
達は神様からの大切な贈り物です。いつまでも、仲良く元気良く過

「ごしてください」

男性の口から紡がれる言葉は優しく、慈愛に満ちている。

二人は終始ぼーっと惚けながら、コクコクと頷く事しか出来なかった。

その素直な反応に男性は満足すると、最後に優しく二人の頭を撫で上げてから、ゆっくりと手をどけて立ち上がる。

そして、先程から無言で佇む楓の方へと向き直った。

「君は……この子らのお姉さんですか？」

「……いえ、拙者らは同じ年でござるよ。ちなみに十四歳でござる」

「同年？ それに、十四歳……？」

語尾の特異さは特に気にしない男性だったが、流石にその内容は食いついた。

言われて男性は足元の二人と、自らの肩辺りに視線がある楓を交互に見やる。

暫しの沈黙が辺りを包む。

「……そうですか」

男性は一言、感慨深げにそう言った。

結局、深くは触れない事にしたらしい。

しかし、その露骨な態度は風香と史香の小さなハートにピキリッと蜘蛛の巣状の亀裂を穿つ。

「ふーんだ。どーせ私達はちっちゃいよーだ。

というか周りがおかしいんだよ！ 特にかえで姉とか！！」

「龍宮さん達も中学生のスタイルじゃないよね……」

改めて二人はクラスメイトの異常な発育の良さに懐疑的になる。

普段は体型など気にもせず、笑い飛ばせる風香も、流石に楓のよ
うな規格外と比べられるのは心外らしい。尤も、男性からしたら苦
笑を浮かべる以外に対処のしようがないわけだが。

「ははは……さて、私は先を急ぐ身ですので、これで失礼しますね
では」

男性は最後に軽く頭を下げてから三人の横を通り過ぎていく。

風香と史香はその背中に手を振って見送りながら、今の男性につ
いて言葉を交わした。

「良い人だったねー。タイプのには高畑先生に似てるけど、なんだ
かすっごく紳士っぽい」

「十字架を掛けていましたし、もしかしたら神父さんかもしれませ
んね」

「かえで姉はどう思った？」

「ん？ そっでござるなー……」

急な問い掛けに楓は顎に手を当てて考え込む。

そして若干の沈黙を挟み、

「……ただ者ではないでござるな」

万感の思いを込めて、そう言った。

「だよねー！ あの傷も絶対に何かあるよね！
たとえば特殊な所に所属してて任務中に負傷したとか！」

「お姉ちゃん……昨日見た映画じゃないんですから」

瞳をキラキラ輝かせて夢想する風香に、どこか疲れた様子で史香が突っ込む。

楓はそんな二人を横目に、男性が歩き去った方向をいつまでも見つめていた。

(……あの御仁)

一目見た瞬間から感じていた違和感。

人の良い笑みの裏側に見え隠れするナニか。

そして何より。忍としての嗅覚が捉えた 鼻腔を攪る醜悪な臭い。

(アレは……血の臭い。一人や二人では到底足りぬほどの血を浴び続けなければ、あそこまでの名残は残らないはず。風香殿たちがいた手前もあつて下手な行動は取らなかつたでござるが 果たして一人の時に相対して、拙者はあの御仁の前に立つ覚悟があつたでござろうか?)

ツウト。額から流れ落ちる汗にも気づかず、楓は人知れず自問した。

三人と別れた男は人気の無い方へ無い方へと歩み続け、とある狭い路地裏に辿り着くと足を止めた。コートの内側に手を伸ばして、機能よりも頑丈さ、持ち運びやすさを重視したかのようなゴツイ携帯を取り出すと何処かへ掛ける。

通話は、まるで相手が今か今かと待ち侘びていたかのように、一瞬で繋がった。

『首尾はどうなっている？』

小さな携帯から響く、取り付く暇も無い声は高圧的で、若い男のものだった。

気にもせず、男は抑揚に答える。

「上々ですよ。既に見るべき所は見終わりました。ヤツの所在も確認済みです」

『魔法使いどもの動向はどうだ？ どうなっている？』

「問題ないですね。初日こそ四六時中べったり張り付いていたが、二日目で疎らに。

今日に至っては一時間に一度か二度の確認に来るだけです。幼稚園以下の連中ですよ。我々はおるか、これではヘルシングに

すら遙かに劣る」

『ふん！ 本当の闘争を知らない平和主義者どもに期待するだけ無駄だ。』

だから汚らわしい吸血鬼などを十五年にも亘って匿う』

通話口の向こうの男は嫌悪に吐いて捨てる。

男からしたら世のため人のためとだか言う魔法使いの戯言は本当の闘争を、本当の狂信を、本当の殲滅を。そして本当の本当の本当の殺意を知らない赤ん坊が喚き散らしているのと何ら変わりない。

『……ノロマなヘルシングもようやく動き出した。』

我々が掴んだ情報に寄れば派兵はただ一人。いや、一匹！』

「っ！！ アーカード。ヤツが来る」

男性は嬉しそうに己の宿敵の名を呼び、口先を大きく裂いて晒う。その獰猛な気配を察したのか、通話口の向こうの男もまた大きく晒った。

『麻帆良で最も厄介なタカミチ・Ｔ・高畑はあらかじめ起こしておいた紛争地域へ予想通り向かった。いま、お前の進行を！ 否！ 信仰を妨げるクソ異端は其処にはいない！！』

そして 告げる。

『第13課イスカリオテ機関アレクサンド・アンデルセン神父！』

同機関長エンリコ・マクスウェルが命じるぞ！』

法王猊下より神託は下った！ よって待機命令は即時撤回！』

今夜だ！ 今夜中にあのクソ忌々しいクソ吸血鬼を！ あの『闇の福音』を！

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルを 塵芥に返せ！！』

真祖の魔王エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。

近年最大級の大物吸血鬼。

幾度と無くカトリックの追撃を躲し、粉碎し、殲滅した正真正銘のバケモノ。

数多の人形を操る『人形使い《ドールマスター》』にして、強力な魔法を駆使する『不死の魔法使い《マガ・ノスフェラトウ》』の異名の持ち主。

噂ではヘルシングの『死神』ウォルターすら真っ向から退けてみせたという。

『第一目標はエヴァンジェリン！ 第二目標はその他全て！！ 全ての行動をお前に一任する。必要があればアーカードも、魔法使いも、異端の全てを薙ぎ殺せ！！』

「言われるまでもありませんよ。私は、最初からそのつもりです」

アンデルセンの忍耐は当の昔に限界を超えていた。

法皇の勅命とあって渋々三日もの潜伏を受け入れたが、コソコソと付け回す魔法使いを何度血祭りに上げたいと思っただことか。もし、手元に愛用の銃剣があったなら、アンデルセンは間違いなく、躊躇も無く、嬉々として魔法使いの解体ショーを始めていただろう。

『いいか、アンデルセン。』

間違っても。そう間違っても。ヘルシングの犬畜生に遅れを取るんじゃないぞ』

マクスウエルは最後にそう念を入れて通話を切った。
用の終えた携帯を懐にしまい直すとアンデルセンは動き出す。

「夜へ。夜へ。夜へと。」

闘争の深遠に染まる夜へと向けて。

異端を狩る刃が隠された場所へと向かって歩き出す。

「どいつもこいつも浮かれてやがる。化け物がいるとも知らずに
化け物がいるとも知っていて。どいつもこいつも浮かれ舞い上がっ
てやがる」

喧騒から外れた路地裏に響く規則正しい足音。

それは疑う余地の無い 殲滅への序曲。

「だが、それもいい。足掻け。叫べ。喚け 宴は既に開かれた」

今この時を以って、麻帆良の地は狂信者の狩場となる。

ユダ

ほら。耳を澄ませば聞こえてくる。

カッ、カッ、カッ、カッ、と規則正しい足音を響かせて歩み寄ってくる。

我らが神を信じ、救いを求める者には救済を。

我らが神を信じず、救いを求める者には絶望を。

唯一絶対の神の代理人にして神罰の地上代行者。

地上に巢食う化け物を滅ぼし尽くす人間が。

アレクサンド・アンデルセンが、神罰を背負ってやってくる。

麻帆良学園中央に位置する世界樹前広場。

麻帆良のシンボルでもある雄大な世界樹のお膝元は、麻帆良学生にとつて憩いの場の一つであった。昼時や放課後ともなれば大勢の生徒で賑わいを見せ、友人と談笑する生徒や独り安らぐ者などがチラホラと見受けられる。

中には有り余る若さを原動力に世界樹登りを敢行する果敢な双子の女子生徒もいたが、付き添いの長身の少女によってやんわりと窘められていた。

そんな広場も陽が沈み、夜が更け込むに連れて人気は疎らになっていく。

双子と長身の少女たちも、街灯が灯る頃には帰路に着いていた。時計の針が午後十時を回れば、辺りには誰もいなくなる。

後に残るのは、ざわざわと轟めく仄暗い闇と、見守る対象を欠いた世界樹だけ。

今日も今日とて静寂と共に終わりを告げる　はずだった。

「はぁッ!!」

不意に。連々と連なる階段の最下。

赤茶色のレンガで地面を舗装された広場から裂帛の咆哮が響く。

次いで鋭い風切り音が轟き、大気の膜が唸る拳によって引き裂かれた。

切り裂かれた大気は周囲の風を引き寄せ、瞬時に傷を癒そうとするが、それよりも早く、なお疾い拳が同様の箇所を抉り取る。

ドオンと。硬質な何かが激しくぶつかり合う鈍い音が広場に大きく木霊した。

それを起こした当人達は気にも留めず、四肢を、体躯の全てを駆使して間断無く眼前の相手に挑み掛かる。

「……以前よりは増しになったか」

ポツリと。傍から激闘を見守る、ゴスロリファッション風の衣服を身に纏った異国の美少女 エヴァンジェリンはつまらなそうに、そんな評価を下した。

現在、エヴァの眼前では従者である絡繰茶々丸と弟子であるネギが修行という名の真剣勝負に勤しんでいる。かつて弟子にしてくれと頼み込んできた時と比べて、ネギは格段に強くなった。

エヴァの戦闘理論は元より、教え子である古菲から学ぶ中国拳法も中々に様になっている。以前は疎かであった防御もキチンと形が定まり、幾分か手加減されているとはいえ茶々丸相手にネギは接近戦で良い勝負を繰り返していた。

尤も『良い勝負』ぐらいで満足するエヴァではないが。

「なんだあ、今の腑抜けた攻撃は!？」

もつと相手の懐へ飛び込め! 小さな躰を最大限に活用しろ! それから攻撃と防御は連動して行え! 人間の武術とは元々そういう風に出てきている。それを劣化させてどうするのだ! 馬鹿者!」

「は、はい! ^{マスター} 師匠!」

戦いの狭間の指示も余さず吸収して、ネギは次の動作を更に洗練させていく。

実際にネギの成長は常軌を逸した速度であった。英雄として誉れ高い父親譲りの才能は魔法のみならず、武術にまで及んでいる。加えて父とは違い頭脳も最高水準なのだから、常人は世の不公平と不条理を嘆くしかない。

そんなネギ、エヴァ、茶々丸の修行風景を遠巻きに見つめる者達
がいた。

神楽坂明日菜、近衛木乃香、犬上小太郎、そしてカモの三人と一
匹である。

容赦の無い叱責をガンガン飛ばすエヴァに明日菜は思わず苦笑し
た。

「相変わらず、エヴァちゃんは厳しいわねー」

「そうでもないで？ アドバイスも的確やし、何だかんだで良い師
匠やわ」

「ウチには速すぎてようわからんなー」

『オレツちも正直わかんねー』

極東一の魔力を宿しているとはいっても、基本的に木乃香は一般
人の域を出ていない。木乃香の肩に乗るオコジョ妖精のカモにして
も戦術眼は中々のものだが、それが戦闘能力に直結するわけではな
いので二人の戦闘を追い切れないのは当然であった。

現在、この広場にはエヴァが簡易な結界を張っているため、一般
人は近づけないようになっていた。この後、所用で遅れてくる刹那
と合流しだい、時空間を弄くってあるエヴァの別荘に移動する予定
だ。

「おーい！ ネギー！ アッチに行ったら俺とも戦ろーな！っ！」

「あ、うんー！」

仕切り直しとばかりに距離を離して茶々丸と相對していたネギは、不意に聞こえてきた小太郎の呼び掛けに殆ど反射的に答える。

その隙を、虎視眈々と攻め入る機会を窺っていた茶々丸は見逃さなかった。

「失礼します」

「っ！？ しまっ」

たと。言い切る暇すら茶々丸は与えなかった。瞬く間に距離を詰めた茶々丸はネギの腕を掴むと軸足を払い、合気の要領で横軸に放り投げる。

グルンと。ネギの視界が上下反転した。

投げられた勢いで風車のように半回転させられたのだ。

頭を地面に足先を夜空に。逆さになった躰は碌に自由が利かず、思い通りの動きが出来ない。そこに茶々丸の長い足が撓り、猛烈な勢いで迫ってきた。

「くっ！」

咄嗟にネギは両腕を十字にクロスさせて受け止めるが、所詮は苦し紛れの悪足掻きに過ぎない。急所への直撃こそ避けたものの勢いまでは殺せず、成す術も無く吹き飛ばされ、街灯の土台に激突した。

「が、は……っ！」

如何に身体能力向上の魔法を掛けていようと、硬い土台に亀裂が

走る程の衝撃だ。

打ち付けられた躰は強制的に肺から酸素を排出させ、軽い眩暈を起こさせる。

だが、茶々丸の攻撃は止まらない。

修行を始める前にエヴァから与えられた命令は容赦無用。

それを忠実に守り、茶々丸は地に片膝をついたネギへと即座に追撃を掛けた。

「!?!」

しかし、ネギとて半端な修行をしていない。

ネギは断続的な痛みを訴える躰を歳に見合わぬ精神力で黙らせる。そうして逃げる訳でもなく、ただ腰を僅かに浮かして強引に一步を踏み込んだ。

「……ッ!」

絶妙のタイミングで巧く胸元に潜り込まれ、茶々丸は思わず瞠目する。

追撃の機を崩された。それを悟った茶々丸が咄嗟に拳を引き絞ると、ネギが拳を振り上げるのは殆ど同時だった。

「はぁ!?!」

「……っ!?!」

ネギも。茶々丸も。互いに退かず、打ち下ろす拳と振り上げる拳が激突する。

甲高い、大太鼓でも叩いたかのような轟音が大気を震わせた。ついでにエヴァの怒声も大気を激しく震わせる。

「コオラあつー！！ 戦闘の最中に相手から意識を逸らすヤツがあるかあつー！！ その犬っころー！！ お前も余計な口出しをするな！！ 犬鍋にして食うぞっー！！」

「うっ……！！」

万人が眼を見張るほどの繊細な外見に反して、その身から瀑布の如く噴出する殺意と怒気は掛け値無しの本物だ。カモも「ありゃー本気だぜ」と己に向けられた過去の脅しを思い出してか、その小さな体躯をガクガクと震わせていた。

今にも火を噴きそうなエヴァを見かねてか、明日菜はやっぱりと口を挟む。

「まあまあ、エヴァちゃん。そんなに怒らなくてもいいじゃん。なんだかんだでネギもすっかり持ち直してるし」

「ふん！ それはただの結果に過ぎん。今、坊やは過程において致命的なミスを犯した。もしも今が強敵との戦闘中、それも、その犬っころとのチーム戦ならば、確実に二人とも死んでいたぞ」

「それは、まあそうかもしれないけど……」

戦闘のプロフェッショナルであるエヴァに死ぬとまで言われては素人の明日菜は引き下がるしかない。けれど、何か釈然としないものを感じてエヴァを注視する。傍らの木乃香も何か思うところがあるのか、頬に指を当てて何やら考え込んでいた。

「うーん……なあ、エヴァちゃん」

不意に木乃香はエヴァに声を掛けた。

「ん？　なんだ？」

先程の事もあってか、エヴァは若干不機嫌そうに木乃香へ視線をやる。

しかし、木乃香は気にする事も無く、思ったことをそのまま質問した。

「この前から少しおかしいけど、なんかあったん？」

ピクリと。エヴァの眉が微かに動いた。

それに気づかず明日菜も続く。

「そうそう。なんだか様子が変わだし、いつにも増して言葉に棘があるし、私もちよっと気になってたのよね」

「……………」

確かにエヴァは、先日は十数年振りにあの忌々しい同属のことを思い出していた。

そのせいか最近、普段よりも気が昂っていた事は認めよう。だが、まさかよりもよって、この二人に勘付かれるほど外面に出ているとはエヴァも終ぞ思わなかった。

「……………別に大したことじゃないさ。お前達には関係の無いことだよ」

若干の沈黙の後、エヴァはそう言った。
話して楽しい訳でもなく、むしろ一刻も早く忘れてすっきりした
類のものだ。

エヴァからしてみれば態々蒸し返す意味も無ければ必要もない。
普段は強引な明日菜も言葉の端に追及するなど込められているの
に気づくと、若干の不満を残しながらも素直に引き下がった。

(やれやれ……)

その不満が気遣いからだと思うと、エヴァとしては苦笑するしか
ない。

六百年もの時を生き、裏の世界では知らぬ者はいないと自負する
エヴァにとって、明日菜のような反応は新鮮というか、むず痒いも
のがあった。

エヴァの躰は幾人幾十幾百もの血に汚れている。それは永遠に変
わらない事実。

それこそ、こうしてエヴァが稽古をつけてやっているネギが、い
つか正義のために殺しに来ることがあるかもしれない。それは、あ
りえない異常な未来ではなく、あるかもしれない正常な未来。そう。
エヴァにとっては、今この時こそが異常なのだ。

こうして女子中学生に紛れ、宿敵となるかもしれない少年に稽古
をつけ、馬鹿みたいな話をする今こそが。

けれど。この異常を楽しんでいる自分がいることをエヴァ
は密かに自覚していた。

いつまでも続いて欲しいなどとは思わない。
誇りある悪として、そんな事は夢想しない。

だが、せめてこの関係が『終わり』を迎えるその時まで。

後少しの間だけならば、こういう生活も悪くは無いと思っていた。それは『闇の福音』としてのものではなく、『エヴァンジェリン』としてのもの。

だから。エヴァは気づけなかった。

たとえ学園長の計らいで情報が伝わっていないとも、本来のエヴァであれば気づけたはずだ。闘争から遠ざかる十五年もの月日は、エヴァにあったその感覚を確実に削ぎ落としていた。

「かつては『闇の福音』とまで呼ばれていた化け物が、ずいぶんとまあ可愛らしい子猫になったようじゃあないか。いつから、貴様は幼稚園の先生になったのだ？」

ゾクリと。その声は何処からか響いた瞬間。エヴァは爪先から頭の天辺まで、余す事無く満遍なく、身体中を無数の蟲が這い回るかのような悪寒を覚えた。

なんだ、とは思わなかった。思っ暇も無いし、思っ必要も無い。

この、殺意は。

存在の一片すら許さず。

存在の理由すら許さず。

存在の根拠すら許さない純粋な否定の殺意は、正にアレだ。

そう。アレが来たのだ。アレが来てしまったのだ。

かつての仇敵。

かつての殲滅集団。

かつての狂信者達。

吸血鬼にとつての最大最凶最悪の神の亡者どもが現れたのだ。

エヴァは身を翻し、心を翻し、全てを戻す。

かつての自分を取り戻す。アレはエヴァンジェリンでは倒せない。
だから、この身は真なる『闇の福音』へと回帰しなければならぬ。
ダーク・エヴァンジェル

「最後に殺り合つたのはサウザンド・マスターと出会う前。

思えば、二十年振りだったか？ 貴様らと再び、こうして出会うのは」

鋭く研ぎ澄まされた金色の双眼。

其れだけで敵対者を突き刺すナイフの如き眼光の先には、老齡の大柄な男がいた。

連々と連なる階段の天辺を陣取る大男は足元まである大きなロングコートを身に纏い、月光を浴びるメガネが異質な輝きを見せている。

だが、真に眼を見張るべきは首に掛けられた十字架。

自らを神へと献上する印。

間違いない。間違いない。間違いない。

奴は。奴は！ 奴こそは！！

「ローマカトリック、ヴァチカン法王庁特務第13課」

エヴァは詠う様に。 貶す様に。 侮辱する様に。

「異端殲滅機関イスカリオテ。 狂信者の巣窟め」

過去幾度と無く渡り合ったユダの手先を嘲笑った。

従僕

闇を見る。その奥に光る真紅の双眼を。

耳で聞け。絶望を引き摺る足音を。

鼻で嗅げ。錆びた鉄のように鼻腔を刺す血の臭いを。

舌で味わえ。口に入り込む血風が乾く味を。

肌で感じる。身を震わせる圧倒的なまでの威圧感を。

直感で気づけ。それと相対した時点で、全ての未来は闇に包まれる事を。

『不死の王』ノスフェラトゥアーカードが、狂気を引き連れ遣って来る。

階上の地上代行者と階下の吸血鬼が互いを見下ろし、見上げた瞬

間。其処は異界に変貌した。場景なんて生易しいモノではない。世界を取り巻く空気そのものが、だ。これまでの世界を犯し、蹴り、蹂躪し尽して新たな世界を再構築する。

産声を上げる世界の名は、暴虐。

一切の甘えを許さぬ、怒気と殺意と狂気と不条理を無茶苦茶に融け合わせたかのような、最悪の領域。草花に隠れる蟲や木々で眠る野鳥も本能でこの場に居座り続ける危機を察したのだろう。我先にと羽を、翼を以って逃げ出し始めた。

それは何ら後ろめたくも無い、生命として至極当然の判断。

ここにいる二つのナニかを前にして、一目散に逃げ出すのは自然と共存する物には当たり前のことであった。しかし、自然から別離し、外敵が消えた人間の本能は彼等に比べてあまりに鈍過ぎる。

故に。この変異に気づけたのは人間以外、半妖の少年と妖精の類だけであった。

(なんや……吸い込む空気が粗い。口ん中が乾く。

はっ。ただの睨み合いでこれかい)

小太郎は未だ嘗て味わった事の無い強烈なプレッシャーに肌をざわつかせ、人知れず戦慄していた。自然、階上に佇む大男を睨む眼光が鋭くなる。

(真祖の警戒の仕方は普通やない。状況はよおわからんけど、とりあえず……)

(お、俺っちの毛並みが逆立ちやがる！ そ、それに俺っちの聞き

間違いか!?

いま、エヴァの姉貴、アイツのことをイスカリオテ機関って呼んでいやがった!!

もし、もし本当にアイツがそうなら……)

それぞれ胸に浮かべる考えは異なりながらも、小太郎と力モは同時に思う。

あの男は

((アイツはヤバイ!!))

危険すぎると。

「……ねーちゃんら、今から俺の言うことよく聞くんや」

小太郎は悟られない程度の動きで躰を若干沈め、前頭姿勢を取った。

それはさながら獣が獲物に飛び掛る寸前にも似ていて、何とも言えない緊張感が小太郎の小さな体軀から滲み出ている。

「え? なんやー、小太郎君」

「どうしたのよ? アンタまで急に改まっちゃって」

現状の危うさにまったく気づいていない木乃香。そして場の異様な変質には何となく気づいているが、イマイチ状況を掴みきれない明日菜は不可解そうに小太郎を見やる。だが、小太郎には悠長

に説明している時間も無ければ余裕も無かった。

「俺が動いたら、全速でここを離れるんや。全速やで。振り返るのも無しや」

「はあ？ ちょっと、あんたいきなり何言って……」

唐突な物言いに明日菜は思わず聞き返すが、それを遮ってカモが告げる。

『いや、ここはそいつの言うとおりにした方が良いぜ、姐さん。できれば兄貴も拾ってさっさと離れた方が良い』

眼前のネギは啞然と、茶々丸はどう対応したものかと思い悩むようにエヴァと大男を交互に見ている。茶々丸はどうか知らないが、少なくともネギが状況の不味さに気づいているとは思えない。

「あんたまで……エヴァちゃんもそうだけど、いったいどうしちゃったのよ？」

「悪いけど、話しとる暇は無いんや。」

あのおっさんがこっちに注意を向ける前に……」

出鼻を挫く！！

瞬間、小太郎は動いた。

低く。低く。低く。地を這うように二足歩行の獣が駆ける。

獣染みた、ではない。正しく獣そのものの敏捷性で階段を平地の如く駆け抜けていった。階段の半ばまで差し掛かると大男も小太郎に気づいたのか、軽く一瞥をくれるが、構えを取る気配は無い。

侮っているのか。はたまた他の思惑でもあるのか。

どちらにせよ、小太郎のすることに変わりはない。

動いてから三秒と掛からずに大男との距離が十メートルを切る。

下からではよく見えなかった顔立ちもここまで近づけば鮮明に映った。

大男の貌を見て、小太郎が第一に抱いた感想は 恐怖だ。

嘲笑うかのように微笑む醜悪な表情の中にあつて、なお際立つその瞳。

妖しい光りを燈す瞳の先には小太郎の姿など映っていない。それは愚直なまでに、正確に、小太郎という存在に内包された獣のみを射抜いていた。

(……………ッ！ 怯むなっ！！)

たじろぎかける己を叱責することで奮い立たせ、駆ける足に気を込める。

そして次の一步。大男の五メートル手前での踏み込みで、それを一気に解放する。

ドンッ！ と。爆発にも似た轟音をその場に残して小太郎の姿が掻き消えた。

「!?!」

悠然と構えていた大男も唐突な小太郎の消失には眼を見開き、喜悅から驚愕へと表情を一転させる。瞬間術クイックムーブ。それが小太郎の用いた技の名だ。

気、あるいは魔力を足裏に集中させ、一息に解き放つ事で瞬間移

動さながらの速力を生み出す高速移動術。未熟な小太郎では精々三〜七メートル程度の距離しか移動できないが、既にその圏内には捉えていた。

刹那の間に大男の背後へと回り込んだ小太郎は両の手の狭間に気を練り上げる。

夜空よりも尚暗い漆黒の気は膨張、収束して一つの技の域にまで昇華されていく。

大男も数瞬遅れて小太郎に気づくが　あまりにも遅い。

我流・犬上流　狼牙双掌打。

大男の背中に打ち付けられた掌底は漆黒の気と相俟って強大な破壊力を生み出す。

それこそ、常人ならば上半身と下半身が永遠にオサラバしても何らおかしくはない威力だ。大男はそこまで悲惨な結果にこそならなかったが、海老反りに体を曲げたままピクリとも動かなかった。

(よっしゃ！　完つ壁に極まったわ！！)

小太郎は掌から腕、肩へと伝わる確かな手応えに獣さながらの獰猛な笑みを浮かべた。しかし、それも階下から聞こえてきた複数の声によつて掻き消える。

「こ、コラー……っ！！」

あ、あんた人様になんてことしてんのよ……っ！？」

「こ、コタローくん！？　いきなりなんで！？　そ、その人は大丈夫なの！？」

「ウチが治療を……！」

明日菜、ネギ、木乃香の三人は大慌てで階段を上って来ようとする。

見れば、唯一小太郎に賛同していたカモは明日菜に握り締められ、身動きが取れなくなっていた。その光景を見据えて小太郎は歯噛みする。

次いで有らん限りの音量を以って三人へと声を張り上げた。

「アホ！　なんでまだおるんやつ！？　こいつはまだ　！」

言い切る前に、鋭い怒声が飛んだ。

「馬鹿者っ！　避ける……！」

「え？　……ッ！？」

その声がエヴァのものであると理解するよりも早く、生に縋り付く本能が小太郎を動かした。ほんの一瞬の後、その場から後方へ飛び退く小太郎の視界に一筋の閃光が走る。それが何であり、どんな物であったのか。小太郎はすぐに知る事になった。

文字通り、その身を以って。

「ぐっ！？　がああああああー……っ……！」

小太郎は右手で左腕を押さえ、苦痛に貌を歪めながら絶叫する。

左腕の半ば。ちょうど二の腕の部分。そこには小太郎の小さな腕の肉と骨を突き破り、深々と根元まで差し込まれている白銀の細剣があった。

月光を浴びて白光りする剣先を伝わる鮮血が、地面を紅く染め上げていく。

駆け寄ろうとしていた三人の足も、思わぬ展開に凍りついた。

「なっ!?!」

「コタローくん!?!」

「え?」

「やべえ!」

あまりにも現実味の無い光景に木乃香は啞然とした面持ちで立ち尽くす。

けれどネギと明日菜は違った。すぐに現状を受け入れると先程よりも疾く小太郎の下へと疾走する。ネギ達と小太郎、双方を見てエヴァは苛々しげに舌打ちを毀す。

「チツ! 茶々丸!」

「っ!?!」

主の意向を受け、術者たる茶々丸は即座に動いた。そしてエヴァも動く。

茶々丸は小太郎の下へ。エヴァはネギ達の下へと。

エヴァは走りながら懐に手に入れると、何らかの液体が入った数本の試験管を取り出した。それを躊躇無くネギ達の前方に向かって思い切り投げつける。

「『ウイス・カース
氷爆』!?!」

ガシャンツと。空中で衝突して割れた試験管は周辺に魔法薬を撒き散らす。それは魔力を封じられたエヴァの呪文を形にする媒体だ。短い呪文の後、現れたのは大量の氷。生み出された氷と凍気は爆風を伴ってネギと明日菜を元来た方へと押し戻した。

「きゃ！？」

「くっ！？ 師匠！？ なんで……！？」

突然の横槍にネギは若干の苛立ちを込めてエヴァに噛み付くが、返って来たのは激しい叱責であった。

「状況を考えろっ！ あの犬っころよりも下のぼーや達がノコノコ出て行ったところで、足手纏いを増やすだけだ！！」

「……ッ！！」

痛烈な物言いにネギは歯噛みするが、エヴァの言っている事は苛立ちが募るくらいに正論である。確かにネギは麻帆良に来る前に比べて格段に強くなった。しかし、それでも総合的な戦闘能力では一日の長のある小太郎に譲らざるを得ない。尤も、理解するのと湧き上がる感情は別物だ。明日菜は声を荒げ、エヴァに言い放つ。

「でも、それじゃあアイツがっ！！」

「アホが。何のために茶々丸を向かわせたと思っている」

エヴァがそう吐き捨てた直後、ネギ達とエヴァの間に何かが降り立つ。

小太郎を胸に抱いた茶々丸だ。見向きもせずにエヴァは訊く。

「損傷は？」

「左腕稼働部に損壊。腹部にも斬撃を受けましたが、中枢には達していませんので通常戦闘に支障はありません」

機械的に報告する茶々丸の左腕には大きな裂傷が刻まれ、腹部には装甲が欠けるほどの亀裂が走っていた。もしも機械の身でなければ、間違いなく致命傷となりえる。その姿をネギと明日菜は自身に重ね合わせ、今更ながらエヴァの言葉の意味を真に理解した。

「その犬はどうだ？」

「非常に危険な状態です。早急に必要な処置を施す必要があります」

茶々丸の表情は心成しか険しく見えた。

それが小太郎の容態を如実に物語っている。

ネギ達も茶々丸に抱かれた小太郎の下へと駆け寄るが、傷口から止め処無く溢れ出る鮮血を確認すると一様に蒼褪めた。しかし、エヴァだけは小太郎の容態など気にも留めず、その左腕に突き刺さった細身の剣を無表情に観察している。

「…………ふん」

ほんの五秒ほどの思案を経て、エヴァもまた茶々丸の方へと歩み寄る。

そして情け無い声を上げるネギ達を強引に掻き分けると、小太郎の左腕に刺さる剣の柄を指先で撫でた。

「師匠？」

「エヴァちゃん？」

「どつするんや？」

三人はエヴァを一様に見据えて訊くが、真祖の吸血鬼は答えない。ただ一方的に告げる。

「神楽坂明日菜、近衛木乃香。お前らは眼を閉じている」

「「え？」」

『あんだ、まさか……』

唐突な忠告に二人は呆けた声を漏らす。唯一その真意を察したカモは信じられないと言いたげにエヴァを凝視する。エヴァは優しく触れる程度だった剣の柄をしっかりと掴み直すと、無表情のまま小太郎の耳元で囁く。

「聞こえているな、犬　歯を食い縛れ」

瞬間。エヴァは一気に剣を引き抜いた。

「……ッ！？　ぐう、があ……！」

小太郎の呻き声が広場に木霊する。

左腕からは噴水の如く血飛沫が舞い散り、エヴァの頬を微かに汚した。

気にせずエヴァは普段から茶々丸に持たされている純白のハンカ

手を取り出すと、小太郎の肩先をきつく縛って止血する。

「近衛木乃香。お前のアーティフィクトで治癒してやれ」

「あ……う、うん、わかった！」

放心状態にあった木乃香はエヴァの声で気を取り直すと、慌ててスカートのポケットからパクティオーカードを取り出した。

「来れ《アデアット》！」

短い呪文を唱えると、光と共に木乃香の服装が日本の伝統舞踊のそれに変わる。

両の手には、一對の簡素な白色扇が広げられていた。

これこそが近衛木乃香の持つアーティフィクト。

『コチノヒオウギ《フラーベルム・エウリー》』

『ハエノスエヒロ《フラーベルム・アウストラレ》』

能力は三分以内ならばどんな傷をも治す治癒能力。

肉を破り、骨をも砕いた貫通傷すら、この装具の前では掠り傷に等しい。

間も無く小太郎の傷は完治した。しかし、どうやら剣を引き抜かれた際の激痛で意識を失っているらしく、起きる気配はない。小太郎の治癒の完了を見て取ると、すかさずエヴァは次の指示を飛ばす。

「おい、ぼーや。神楽坂明日菜に身体能力強化だ。十分でいい。

強化後、神楽坂明日菜はこの犬と近衛木乃香を連れてこの場を離

れ、近辺の魔法先生か魔法生徒に合流しろ。そうすれば、とりあえずの安全は確保できる」

「待つてよ！ 私、まだ全然わかってないのよ！？
せめて説明して！！ あいつは何者なの！？」

「……殺し屋だよ。カトリック教徒以外の全てを殺しつくす狂気の権化。」

そして 私が大嫌いな奴等。お前も今のを見てわかったと思うが、奴は今までお前が戦ってきた相手とはまるで違う。殺しても良い程度じゃなく、殺すためにこそ、向かってくるぞ」

「っ！？」

「わかつたらさっさと行け。」

お前らのような足手纏いを抱えながら戦えるほど、奴は甘い相手じゃないんだ。

ぼーやの事なら心配するな。私の名に懸けて、殺させてやるつもりは微塵も無い」

エヴァはそう締め括ると明日菜から視線を外して最後に小太郎を見やった。

「本来なら、お前の行動は無謀以下の蛮行だ。
あのまま死んでいようが一片の憐れみすらもってやれん」

他の三人の安全を考慮しての行動だったのだから、実力が未知数の相手の懐に飛び込むなど自殺行為も甚だしい。その点については、エヴァもはつきりと糾弾した。

ら嘲笑う。

何を当たり前のことを言っているのだと馬鹿にするかのように、大口を上げて笑い続ける。

「くくくつ、何を考えているのかだと？」

よりにもよって我々に！ イスカリオテにそれを問うとは！ 十五年にも亘る怠惰な安寧は貴様から我々という存在を削ぎ落としたか？ 貴様から失わせたか！？

ならば答えよう！！ 我々は！ ヴァチカンは！！ イスカリオテは！！

化け物を駆逐する事を考えているのだ」

両手に強く握り締めた審判の象徴たる銃剣を神への祈りの為に十字へ交差させ。

『パラディン
聖堂騎士』

『エンジェル・ダスト
天使の塵』

『パヨネット
銃剣』

『首斬判事』

『殺し屋』

数多の異名を持つヴァチカンの裏。

イスカリオテ機関の『切り札』たるアンデルセン神父は絶望を以って答えた。

その堂々たる姿にもエヴァは何ら感慨を見せず、弄んでいた銃剣を抛り捨てる。

「……行け、神楽坂明日菜。さつさと二人を連れて行け。相手は最悪だ。」

凶悪さ、容赦の無さ、オーバーキル殺害過量という点では全盛期の私すら超越するバケモノだ。もし戦いが始まれば、生憎と安全に送り出してやれる自信は無い」

「!? ……わかったわ」

明日菜としては、この場に残りたかった。

けれど、非戦闘員である木乃香と気絶している小太郎をそのままにしておけないのも理解している。何より、いつどんな時でも自信満々なエヴァが弱気とも取れる言動をしているのが、これ以上の追求を明日菜にさせなかった。

「ネギ、お願い」

「は、はい！ 『杖よ《メア・ウィルガ》』！」

ネギは広場の端に立て掛けて置いた杖を引き寄せ、掴むと同時に詠唱を紡ぐ。

「『シス・メア・ハルス契約執行』 神楽坂明日菜！」

この魔法により、ただでさえ常人離れた身体能力を誇る明日菜は並の吸血鬼に匹敵する怪力を得る。明日菜は木乃香を右腕に抱き、茶々丸に受け渡された小太郎を左腕で慎重に支えながら背負った。

「付近の魔法関係者と接触した後はそいつの指示に従え。間違っても、此処には戻ってくるなよ。お前達が、少しでも私を信用してい

るならな」

「……わかった。気いつけてな！」

「無理すんじゃないわよ！ 絶対だからね！」

最後にそう言い残すと明日菜は階段とは真逆の方向へ全速力で駆け出した。

追撃を懸念してエヴァ達は身構えるが、当のアンデルセンは走り去る明日菜を一瞥しただけで直ぐに視線をエヴァへと戻す。

まるでエヴァ以外は眼中に無いと、言外に語っているかのようであった。

「……茶番は終わったか？」

幼稚園の先生は大変だな。下手なお遊戯に付き合わされる」

「そうでもないさ。何千年と進歩しない赤ん坊の相手をするよりは遙かにマシだよ」

他愛の無い戯言を口にしながらアンデルセンは階段を下り始める。浮かべる表情はこれから切り刻むエヴァの断末魔を想像してか狂気一色に塗り固められ、見る者全てに根源的な恐怖を与える。ネギもその例外ではなく、思わず躰が震え、無意識の内に脚が一步、後ろへと下がった。

怖い。怖い！ 怖い！！

その視線が己に向けられているわけではないと分かっているにもかかわらず、恐怖に精神が圧迫される。

かつてネギは幼少の頃、悪魔に殺されかけた。
かつてネギはエヴァに死ぬまで血液を吸われかけた。
かつてネギは白い少年やヘルマンに石にされかけた。

だが、そのいずれもが明確な殺意を持っていたわけではない。

悪魔は呼び出した何者かの意思に従って行動しただけ。

エヴァは己にかけられた呪いを解くためにネギの血を必要としただけ。

白い少年やヘルマンはそもそも殺意すら無かった。

こうまで完璧に命だけを狙う敵と出会ったのはネギにとって初めての経験だ。

何より、未熟と言えど相応の実力を誇るネギには分かっていた。

先の小太郎への攻撃。アレは、エヴァが叱責の声を上げていなければ間違いなく、小太郎の心臓を突き破っていた。茶々丸への攻撃にしてもそうだ。人間ならば、確実に死んでいる。

(もしかしたら、僕は……)

ここで死んじやうかもしれない。

ある種、究極の諦めが脳裏を掠め、ネギは絶望に心を挫け掛けた。

『しっかりしろ！ 兄貴!!』

けれど。不意に足元から響いた友達の声に、ハッと気を取り直す。

「え、あ、か、カモ君!? どうしてここに!?

アスナさん達と一緒に行ったんじゃない?」

『へっ！ 兄貴が逃げねーのに舎弟の俺っちが逃げるわけにはいかねーよ！』

そう漢気溢れる科白を述べてカモはネギの肩まで駆け上がる。

「カモ君……」

肩に掛かる馴染み深い微かな重みは、ネギの胸中を占めていた恐怖を一気に払拭した。グツと力強く杖を握り直す。外面も。内面も。ようやく臨戦態勢に移行させた。

『兄貴。今から俺っちの言うことをよく聞いてくれ。』

見たところ、あの野郎は完全に近距離タイプだ。

しかもスピードよりもパワーで押す類のな。

ああいう奴は近づかせちまうと厄介だが、中距離や遠距離でバンバン魔法を打ちまくれば問題ねえ。いつそのこと「雷の暴風」で吹き飛ばしちまえ！』

「で、でもそんなの使ったら世界樹も巻き込んだじゃうよ！？」

広範囲攻撃魔法に分類される『雷の暴風』は、ネギの使える魔法の中でも屈指の威力を誇るのだ。もしアンデルセンへ向けて放てば、射線上にある世界樹までも損壊させかけない。だが、そんなネギの杞憂をエヴァは鼻で笑い飛ばす。

「ふん。冗談を言うな。アレは仮にも神木だぞ？」

「ぼーや如きの魔法でどうにかなるほど柔じゃないさ」

『それなら話かはえーっ！』

兄貴が牽制してそっちで仕留める！ これっきゃねーぜ！！」

「……確かに、それも一つの手だな。」

だが、私はぼーやに手出しさせる気など元からない」

あっさりとは。何でもないことのようにエヴァの口から思いがけない言葉が飛び出した。

「え？」

すっかりやる気になっていただけにネギの目が点になる。

『ど、どーいうことだよ！？ それじゃあ兄貴を残した意味がねーじゃねーか！？』

「意味ならあるさ。師匠の戦いを弟子に見届けさせる。見るのも修行の一環だ。」

特に 狂った奴への対処法は、今後ぼーやの役に立つだろう」

言いながら、エヴァは死地へと進み出た。

「行くぞ、茶々丸。生憎と、無理をするなどは言ってやれん」

エヴァの両手の指には魔法薬の入った小瓶や試験管が挟まれ。

「了解しました。無理をして目標を鎮圧します」

その後ろに控える茶々丸は損傷した左腕の駆動チェックをしていく。

「神罰の時は来た。AMEN！」

階段を下り終えたアンデルセンは両の手を胸元まで持ち上げ、白銀煌く刃をエヴァに向けた。

一触即発。

ネギとカモは、その場に満ちるプレッシャーに身動きすらできなかった。そして自ずと悟った。そもそも援護などできるはずが無いのだ。戦いの中心にいないにも関わらず、動く事すら儘ならない体たらくでは、同じ舞台に立てるはずも無かったと。

この舞台に上がる事ができるのは、選ばれた者のみ。

アンデルセンのような狂気を宿し、エヴァのような誇りを宿し、茶々丸のような無垢を体現する存在でなければならぬ。

ああ、なーんだ。

「無粋だな。その料理は私の方が三十年も前から予約している。横取りするなよ、アンデルセン！」

コレは、全てを満たしているじゃあないか。

宿命

突如として響いた声は闇夜にしっかりと浸透した。

その声音だけで広場に満ちていた緊張を懐柔し、調教し、服従させ、瞬く間に己の支配下へと置く。その有り様は、舞台上で観客を魅了する演者のようでもあった。

声の出所はアンデルセンの背後。エヴァ達から見て左手側の屋根の上だ。

闇夜に冴える紅き人影は月光をバツクに悠然と佇んでいる。暗がりの隙間から微かに覗く口元は、堪えられぬ喜色に歪められていた。けれど何より特徴的なのは、闇でさえ掻き消し切れぬ紅い瞳。爛々と輝くソレは地を這う下々の全てを見下している。否。その場に
いるただ二人だけを見下ろしていた。

「この、声は……!？」

思わず漏れ出た声は、エヴァ自身が驚くほどに擦れていた。

覚えている。この声を。

忘れられない。絶対に。

衝動に駆られ、敵対する狂信者が眼前にいるにも構わず、エヴァは見上げた。

裏切られて欲しいという幾許かの希望を秘めて、その屋根の上に立つ紅い人影を。

そして 現実を前に身を硬くした。

暗がりに隠れ、ぼんやりと見える顔立ち。

口が裂けて広がり、切っ先が露出する犬歯。

真紅の双眼に燈る無限の狂気。

疑う余地は無かった。

否定する隙も無かった。

それは真祖の吸血鬼『闇の福音』と同様に、最強と称される同属。それは首を刎ねようと絶対零度の氷に閉じ込めようと幾度と無く蘇る不滅の同属。

それは英国王立国境騎士団、通称HELLSING機関に飼われる吸血鬼殺しの同属。

出会いたくない部類に含まれる、嫌悪すべき同属であった。

ニタアと。アンデルセンは、心成しかエヴァとの会合を果たした時よりも嬉しげに口先を裂いて、ソレの方へと向き直る。そこにエヴァに対する警戒は無かった。

アンデルセンは、まるで旧知の友人へ話し掛けるかのように告げる。

「今日は遅れて来ないのだな？」

ベイドリックの時のように遅れては来ないのだな？」

「当然だ。あの時とは食事の質がまるで違う。食い気の無い三流ランチ程度ならいくらでも譲ってやるが、極上のディナーを譲ってやる気は無いよ。そしてお前はデザートだ。メインディッシュを喰らうてからたっぷりと相手をしてやる。」

だからそこで石のようにじっとしている　神父アンデルセン！
「！」

「立ちっぱなしの奴が吼えるな。座れる席はただ一つ。
どうしても食事にありつきたいんなら俺を椅子から蹴落としてみるよ。」

ええ！？　吸血鬼アークード！！」

今宵の乱入者達は互いを見据え、獰猛に喉を震わせながら神聖の狂喜と魔性の狂喜を激突させる。辺りは瞬く間に、一切の正常を欠く異界と化した。

辺りに満ち満ちる狂気。

狂気、狂気、狂気狂気狂気狂気狂気狂気狂気狂気狂気狂気狂気狂気狂気狂気狂気。

常軌を逸する狂人達の瘴気は、容易く人の心を犯していく。その侵食は、如何に優秀であろうと所詮は十歳の子供に過ぎないネギに抗い切れるものではなかった。

「い、いったい何なんですか……何なんですかつ！？　この人達は
！？」

ワケのわからない者達によるワケのわからない恐怖に切迫させてネギは叫ぶ。

そうする事でしか恐怖を払拭できないから。

そうしなければ心が折れてしまいそうだから。

ネギは自衛の為に、混乱と困惑と混雑を混ぜ合わせた悲鳴を上げた。

それを叱責する者は誰もいない。

誰も彼もが自分の事で精一杯であるが故に、ネギを気遣う余裕は無かった。

常日頃からネギの舎弟を公言するカモも、この時ばかりは己の思考を優先させた。

あの紅い男の名に、何か引つ掛かるものがあつたから。

『アーカード……それに吸血鬼だつて？ 確か、エヴァの姉貴をまほネットで調べてた時にそんな名前が出てきたような気が……』

辿るのは麻帆良で最も古い記憶の一つ。

ネギの為に調べ上げたエヴァンジェリンの情報。その際に見掛けた一つの名前。

記憶の海に沈んだソレを何とか掬い上げようとカモは小さな頭脳をフル回転させ、必死に潜水を続けていく。もっと深く。もっと深く。もっと深く。

『あつ！？』

砂に塗れた記憶の海底。ソレはようやく網に掛かった。

『お、思い出したっ！ アーカード！！ イギリス最強の吸血鬼っ
！！』

「え？ イギリスって……？」

唐突なカモの大声にネギは驚き、次いで紡がれた自らの母国の名に再度驚愕した。

カモは若干興奮した様子で力強く語り始める。

『間違いねースよ！ 詳しい情報は流石に覚えてねーけど、現存する危険な吸血鬼の筆頭として名前が挙がっていた奴だ！！ 何でも化物専門の殲滅機関、あの刹那の姐さんが入っていたみてーなのに所属してるらしいっスよ！！』

「……………っ!？」

殲滅機関。聞くからに怪しげな雰囲気漂う言葉にネギは瞠目した。

何よりエヴァが出会い頭にアンデルセンへと吐き付けた中に同様の言葉があった事を思い出したのだ。ならば。あの狂気そのモノもエヴァを狙って現れたというのか。

「クソッ……………!」

ネギの心配を他所に、エヴァは人知れず悪態を吐いていた。流石のエヴァも往年の宿敵が同時に現れた事態には動揺しているのか、常日頃の余裕が褪せている。

「次から次へと……………そもそも結界に反応しないとどういう事だ！？ 貴様ら、一体どうやって麻帆良の地へ侵入した!？」

麻帆良学園には土地全体を覆うようにして侵入者感知の結果が張られている。その精度はオコジヨ妖精一匹の侵入すら漏れなく把握する程だ。魔力を極限まで封じられているエヴァは麻帆良学園の警備員として結界とリンクしている。仮にアンデルセンとアーカードが侵入すれば、その時点でエヴァには分かるはずだった。

だからこそエヴァは、今にも勝手に殺し合いを始めそうな二匹の獣に怒声を以って詰問した。すると二人は視線だけエヴァへと向けて、実に気楽そうに言い放つ。

「んー？　なんだ？　知らないのか？　私は、表から、堂々と入ってきたぞ」

「私は扉を叩かずに扉を潜り抜けさせてもらった。この地を囲む結界は優秀だが、優秀すぎる。地を這い回る虫けらの一匹までをも選別するようでは、害意の無い蟲けらが入ってきてても紛れてしまつて気づけない」

飄々とした態度で二人はそれだけ答えると、再び互いへと視線を戻した。

眼中に無い。簡潔に述べるなら、正にそんな状態だった。本来の標的を置き去りにして行われる視線の攻防にエヴァはビキリと米神をひくつかせる。プライドが人一倍高いエヴァにとって、蔑ろにされる現状は憤懣遣る方無いものであった。

けれど。それを爆発させる軽拳な真似はしない。此方に注意を払わないのは好都合だ。エヴァは沸騰しかける思考に飛び切り冷え切った氷水を浴びせると、虫の囁きのような小声で後方に控える茶々丸へと指示を送る。

(茶々丸。私が合図を送るまでは何があっても動くな。送ったら私とぼーやを抱えてこの場を離脱しろ。流石に、今の状態でアイツら二人を相手にするのは厳し過ぎる)

(了解しました。しかし、マスターとネギ先生を抱えて逃走する場合、私の性能では途中で追いつかれる可能性があります)

(安心しろ。どうせ連中同士で殺り合っただけには追って来れん。それに さっきからこっちへ合図を送っている奴もいるしな)

チラツと。エヴァは右側の建物の影を一瞥する。

その一瞬。ほんの少しだけアンデルセンとアーカードから意識を逸らした一瞬。

「余所見とはずいぶん余裕じゃないか、同胞よ。私がナンデあるかを忘れたか？」

蝙蝠の羽ばたきと聞きたくも無い声が、エヴァの傍らから響いた。

「なにっ!?!」

驚愕も一瞬。咄嗟にエヴァは魔法薬を抛ろうと躰を動かすが、絶望的に遅い。

伸ばされた腕はエヴァの華奢な手首を掴み上げ、軽々と小さな躰を宙に浮かした。

「くっ………貴様!?!」

「師匠!？」

考えるよりも先にネギは動いていた。立ち尽くす茶々丸を追い越して、ただ無心にエヴァを捕らえる吸血鬼に拳を打ち付ける。渾身の拳はアーカードの脇腹を精確に捉え、深く埋まる手応えが手先から届いた。ネギにとっては快心と呼べる一撃。常人ならば血反吐を撒き散らしてのた打ち回る程の威力だ。尤も、この吸血鬼が相手では些かの効果すら得られない。ゆっくりと、アーカードは真紅の瞳をネギに向ける。

「あ……」

殺される。ただ見られただけで、ネギはそう思った。

それでも無様だけは晒さないようネギは震えそうになる躰を意地で抑え付け、有りつ丈の勇気を込めてアーカードを見返す。そのネギの気丈な姿に何を思ったのか、アーカードは何処か愉快そうに表情を歪めた。

「良い眼をしているな、人間^{ヒューマン}」

「え?」

思いも寄らない賞賛にネギは呆けた声を漏らすが、アーカードは気にせず続ける。

「お前のその眼は絶望を知るほどに強く輝き、苦悩を味わうほどに熟成するそれだ。」

今はまだまだ輝きも弱く未成熟だが、時が来れば私とも闘争の美酒に酔える。

そう確信させるだけの輝きが、お前の眼にはある」

「僕の……眼？」

「ああ、そうだとも。きつとお前は」

ドツと。アーカードが言葉を紡ぎ終える前に嫌な音が響いた。ネギの視界にはアーカードの額があつて 其処から一本の銃剣が生えている。

「……っ!？」

言葉にならない悲鳴を上げてネギはその場に尻餅をついた。ホラー映画でも十分に怖いシーンがリアルで起こったのだ。失禁もせず、気を失わなかったネギの精神力は相当と言える。

だが、もっと恐ろしいのは。

「横槍とは、相変わらず我慢の利かない神父だな。食い意地ばかり張っている」

それを何でも無いかのように済ませてしまふ、この化け物。

「ほざけ。この俺を素通りして行くなどという暴挙を行いながら何を言うか!？」

アンデルセンは猛り狂いながら進撃を開始する。アーカードもまた、冗談のように巨大な漆黒の対化物戦闘用13mm拳銃『ジャッカル』を懐から抜き放ち、迎撃の意思を顕にした。完全に敵意を向けるべき相手を見定めた狂人達。

それこそが。エヴァの狙っていた、またと無い好機。

「いまだ！ ぼーや！！」

アーカードに捕らわれたままのエヴァは大声でネギへと叫んだ。

「！！？」

虚を突かれたアーカードとアンデルセンはヒュツと即座にネギを見やる。

「え？」

けれど。当のネギは、キョトンとした顔で呆けているだけ。

二人の注意がネギへと一心に向けられた正にその瞬間。

ザンツ！ と。何かが断ち切られる、流麗な斬撃音が虚空の闇を震わせた。

音の出所を探れば、エヴァを捕らえるアーカードの腕が肩口からバツサリと斬り離されている。

「……っ！？」

アーカードは痛む素振りさえ見せず、寧ろ嬉しそうにそれを成し遂げた者を探す。

それは存外簡単に見つかった。ちょうどネギが尻餅をついていた足元。

目を白黒させるネギを小脇に抱え、長い野太刀を携える少女が其処にいた。

「茶々丸!！」

「はい、マスター」

エヴァは、それだけになったアーカードの腕を虚空に投げ捨てる
とバックステップで己の従者の下まで退避し、合図を送る。沈黙を
守っていた従者はその合図と同時に主を抱え、全速力で離脱し始め
た。アーカードの腕を切り落とした少女もネギを抱えて即座に続く
常軌を逸した速度で駆ける鋼鉄の少女と野太刀の少女の姿は、三秒
と掛からずに薄暗い夜道に溶け込んだ。

残された一人と一匹の狂人達は少女達が走り去った先を見つめて
いる。

此処に至り、彼等の浮かべる表情は明確に隔たれた。
アンデルセンは隠し切れぬ落胆に。アーカードは抑え切れぬ喜色
に。

「……つもらん。アクビが出るほどにつもらん狩りだ。

俺は、あんなウサギを狩るためにこんな国へ出向いたわけじゃな
い。

真正の化物を狩るために、この国へ出向いたのだ」

イスカリオテ機関長マクスウェルから今回の仕事を任された時な
どは、期待に胸を膨らませたものだ。数百年に亘りヴァチカンの追
撃を躲してきた『闇の福音』をこの手で殲滅する。異端廃絶を絶対
とするアンデルセンにとって、それは高揚するに足る目的であった。
だからこそ、三日間にも及ぶ屈辱の待機命令にも従った。

けれど、蓋を開けてみればどうだ。

まったく以って取るに足らぬ小物ではないか。
まるで巷で絶賛されていた映画が物凄くつまらなかった時のよう
な心境である。

アンデルセンの激情を交えた不満の言葉にアーカードは短く笑っ
た。

「確かに、どういうわけか奴の力は極端に抑えこめられているらし
い。

なるほど。この街を覆う結界は本来そのためのものか。

今の奴はそこらの魔法使いと同レベル程度だろう。だが……」

鋭い犬歯が愉悦に震え、カチカチと音を立てる。

アーカードはととても嬉しそうに、声を潜めて笑い続けてい
た。

「確かに化物としてはどうしようも無いぐらいに弱くなったが、人
間としては十分に強くなった。私には過去の奴よりも、今の奴が強
敵に映る。それこそ 貴様にも見劣りしない極上の敵にな」

「……ふん」

アンデルセンは化物の戯言を鼻で笑い飛ばす。

まるで、あんな矮小な存在と同格に扱われたのが不満であるかの
ように。その荒々しい嫌気を心地良さに受け入れながら、アーカ
ードはようやく本題に入った。

「それで？ 取り残された貴様と私はこの後どう動く？

人間と化物が。狂信者と吸血鬼が。イスカリオテとヘルシングが。
こうして相對しているぞ。この事実を踏まえて、貴様は一体どうす
るのだ？」

それは明らかな誘いであった。

この身の準備は当に出来ていると言外に告げている。

闘争という美酒を注ぐためのグラスをアンデルセンに傾けながら、アーカードはいきり立ちそうな自身を制止させる。果たして相手がグラスを合わせるのをアーカードは今か今かと心待ちしていた。

「
」

だが、しかし。アーカードの期待とは裏腹にアンデルセンは無言のまま、グラス代わりの銃剣をいとも容易く懐に納めてしまった。

「興が覚めた。貴様の処刑は後に回す」

そう吐き捨てるアンデルセンは仇敵に一瞥すらせず、本当に広場から歩き去ってしまった。取り残されたアーカードは微かに身を震わせている。それは折角の誘いを無下に断ったアンデルセンへの怒りの為か。

否。断じて否。

アーカードは、単純に。ただただ単純に、抑えきれぬ愉悦に震えているのだ。

ついには堪え切れず、声を張り上げて笑い出す。

「クツ、ククツ、クハハハハ！ ハハハハハハハハハハハハッ！！
そうか！ やはりお前もか！？ お前も、結局はエヴァンジェリンに惹かれているか！ この私と同じように、どうしようもないくらい惹かれているというのか！？」

でなければ、あの殺戮神父がこの身を捨て置くはずがない。

知ってか知らずか、アンデルセンは確実にエヴァを優先させている。

本当にどうしようもないぐらい吸血鬼を体現しているアーカードよりも、あんな人間を残す中途半端な吸血鬼を。

真紅のコートを翻し、溢れる喜悦を耐えながらアーカードは世界樹へと続く階段を上る。孤高の王者のような風格と、万民を見下す暴君のような威厳を以って。玉座に見立てた世界樹に軽く手を触れながら、アーカードは夜風に乗せるように紡ぐ。

「人間のような吸血鬼。貴様の答えは出たのかな？」

楽しそうに。嬉しそうに。期待に胸を膨らませて。

アーカードは世界樹に背を預ける。

その場で、開幕のベルが鳴るのを待ち続けるために。

闇の福音

「 どうやら、撒けたようだな 」

ありとあらゆる経路。それこそ街灯に照らされた歩道のみならず、薄暗い路地裏や闇夜が色濃く生える森林の狭間すら駆け抜けること十数分。

ようやく安全だと確信したエヴァは厳しい顔付きのまま、安堵に喉を震わせた。

「 もういいぞ、茶々丸 」

「 はい、マスター 」

茶々丸は森林の出入り口付近で立ち止まると、腕に抱えたエヴァを地面にそつと降ろした。エヴァは一息つくと傍らに視線を投げかける。

「 助かったぞ。正直、お前がいなければ殺られていたかもしれん 」

「 いえ、無事で何よりでした 」

抱きかかえたネギを降ろしながら少女 桜咲刹那はホッと胸を撫で下ろす。

あの時、一瞬の隙を突いてアーカードの腕を斬り落とし、エヴァ達の窮地を救ったのは他ならぬ刹那であった。

「 あ、ありがとうございます 」

ネギは震える声で謝礼を述べる。顔面は蒼白で、血の気は失せていた。

無理も無いだろう。如何に魔法使いの英雄の息子であろうと、その実態は十歳の子供に過ぎない。世界最狂に値する人でなしどもの狂気を耐えるには、世界というものを知らなすぎた。

刹那はネギの焦燥した様子を受けて心配そうに見やるが、それも僅かな時間だけ。こんな事で折れるほどネギの心が弱くないと知っている。だからこそ、あえて刹那は話を先に進めた。

「……エヴァンジェリンさん、お嬢様達はどこに？」

刹那が広場に着いたのはアーカードが登場した少し後の為、それまでの経緯を知らない。彼女にとっての最優先事項は木乃香の安全である。あんなバケモノが現れた以上、姿が見えないのは不安を煽った。そんな刹那にエヴァは軽く告げる。

「先に逃がしたよ。犬が腕を串刺しにされてな。」

近衛木乃香に治療させた後、神楽坂明日菜に託した」

「っ!？」

その言葉は、刹那の頭をガツンと叩いた。木乃香が無事だったのは素直に喜ばしいが、代わりに小太郎が傷を負った。しかも戦線を離脱せざるを得ないほどの重傷。

小太郎の実力を知る刹那だからこそ、その現実は否応もなく事態の深刻さを知らしめた。思わず、刹那は苦渋に顔を歪ませる。

「やはり、学園長の危惧は当たりましたか」

不意な刹那の呟きにエヴァは耳聡く反応する。

「じじいの？ ……なるほど。お前の用事とはそれか。
チツ！ まったく、いつもいつも肝心な時には対応の遅い奴だ。
それで？ じじいはどこまで搦んでいるのだ？」

「招き入れた教会の人物が退魔師らしいという事は聞きましたが、
それ以上は……」

「ふん！ まあ、教会が相手となれば、そこに自力で至れただけマ
シカ」

エヴァは思案気に眉を顰めると直ぐに踵を返して歩き出す。
その小さな背に刹那は戸惑いがちに声をかけた。

「エヴァさん？」

「じじいに会いに行くぞ。

このまま奴らを放っておけば 最悪、麻帆良は壊滅する」

さらりと告げられたあまりにも突飛な発言に、刹那は瞠目して息
を呑んだ。

「い、いくらなんでもそれは……」

「無いとでも言つつもりか？ ハッ！ これだから極東の島国は…
…。

教会のしつこさと容赦の無さをまるでわかっていない。いいか、
刹那。貴様も退魔師の端くれならば覚えておけ。この世界で最も異

端を殺してきたのは間違はなく教会だ。奴らには見境というものがない。そこに異端がいるのなら、奴らは自らの信仰の名の下に町すら平気で焼き払うぞ」

ニヤリと。エヴァが浮かべる微笑は凄惨で、隠す気もない彼らへの侮蔑が溢れ出ていた。

場所は変わって麻帆良女子中等部エリアにある学園長室。

其処には難しい顔つきで一枚の書類を睨むように見つめる老人がいた。その後頭部は平均よりも異常に長く、目を覆うほどの白い眉毛と胸元に達する白い顎鬚と併せて、まるで絵に描いた仙人のような風貌であった。

「まさか……いや、しかし……」

ブツブツと独り言を零すこの人物の名は近衛近右衛門。広大な麻帆良学園を治める理事長であり、関東魔法協会の理事も勤める麻帆良最強の魔法使いだ。

「むう……」

そんな卓越した魔法使いが、たかが一枚の書類に表情を歪め冷や汗すら浮かべている。そうして唸ること数分。不意に扉がノックも無く蹴り開けられた。礼儀作法など露ほども持ち合わせない無礼な行為に、けれど学園長は其処に佇む小柄な人影を認めると思わず安堵に声を張り上げた。

「エヴァンジェリン！ ほっ、無事じゃったか」

ようやく学園長は厳しい表情を崩して肩の力を抜く。

エヴァはエヴァで唇の端を吊り上げ、不敵な笑みを形作った。

「当たり前だ。私を誰だと思っている」

「そうじゃな……しかし相手が相手じゃ。万が一の心配をするのは当然じゃろって」

「ほお。ようやく確認したのか？ あの神の亡者を」

エヴァの痛烈な皮肉に学園長は心成しか縮こまる。

「……返す言葉も無いわい。いくら教会に圧力を掛けられたとはいえ、迂闊過ぎじゃった。まさか、奴のような危険人物を懐に招き入れてしまつとはのう」

学園を護る者として失格じゃなど。

学園長は胸中で苦々しく呟き、エヴァの背後に控える刹那を見やっただ。

「ご苦労じゃったな、刹那くん。もう寮に帰って、ゆっくり休むと
いい」

「え？」

気楽に告げられた学園長の言葉の意味を理解できず、刹那は戸惑いの声を上げた。

現状、麻帆良を襲う事態は過去最悪と断じて間違いあるまい。未だに生徒の身とはいえ、刹那は魔を払う神鳴流を担う実力者だ。この危急の状況に於いて動員されぬはずが無いと刹那は予想していた。だからこそ戸惑い。いったい学園長は何を考えているのだろうか。刹那の疑念に應えるように学園長は薄っすらと瞳を開けて続ける。

「ここから先は大人の領分じゃ。見たところネギ先生も疲れておるようじゃし。今日の事は忘れてゆっくりと休むんじゃ。すでに木乃香達は寮に帰しておる。小太郎くんも、こちらで用意した部屋で休んでもらっておるよ」

「し、しかし……！」

「刹那くん」

なおも言い募ろうとする刹那に、無常にも学園長は厳しく告げる。

「君の役目はこれで終わりじゃ。これ以上 やってもらうことなど何もない」

「……っ！」

薄い瞳と目が合った瞬間、刹那はゾクリと総毛立った。額と言わず、全身から冷や汗が吹き出る。普段は孝行爺としての貌が前面に出ている為に忘れがちだが、眼前にいる人物は数多の魔法使いを纏

め上げる強大無比の魔法使い。その実力は、刹那ですら遠く及ばない。黙った刹那を一瞥して、次いで学園長はネギに視線を移した。

「ネギ先生。聞いていたとおりじゃ。君も、今日はもう休んでくれていいぞい」

「……………」

学園長の労わるような言葉にもネギは俯いたまま何の反応も示さない。

それがショックによるものと判断して、学園長は刹那に視線を戻した。

「刹那くん。すまんが、ネギ先生を頼めるかの？」

「え……………あ、は、はい！」

その学園長の言葉に刹那はようやく気を持ち直した。言われるがままにネギを連れ出そうと控え目に肩を引く。

「……………？ ネギ先生？」

けれど。ネギは動かなかった。

訝しげに刹那は更に力を籠めて引くが、どんなに力を籠めても結果は変わらない。

「……………ません」

不意に。今まで一言も発さなかったネギの小さな口が、か細い言葉を紡いだ。

「ん？ なんじゃ、ネギ先生」

聞き取れず、学園長は聞き返した。

恐らく、それが切っ掛けになったのだろう。

ネギは俯かせていた顔を力強く持ち上げ、真っ直ぐに学園長を射抜く。

「このまま帰るなんて、絶対にできません！！」

あらん限りの意思を込めて、ネギは咆哮した。

「ネギ先生……」

『兄貴……』

茶々丸とカモはネギの氣勢に驚き、刹那も声こそ上げないが啞然とネギを見つめている。一方の学園長は「ふう」と、小さく胡乱げに溜め息を吐いた。

「……ネギ先生。いや、ネギくん。君は、まだ十歳の子供じゃ。コチラ側に関わるにはあまりにも若く、経験がない。遠回しな言い方で伝わらんのなら、はっきり言わせてもらうぞ。ワシはな 足手纏いはいらんと言っておるのじゃ」

ゴウト。学園長の体躯から夥しい魔力が吹き出した。

老体に似合わない 否。熟練の魔法使いだからこそ持ち得る、一種の完成された魔力の波動に刹那とカモは顔を蒼白に染め上げ、思わず生唾を飲み込む。

(これが、学園最強の魔法使いの魔力……桁が、違う)

(やっぱり、伊達に関東魔法協会の理事をやってねえって事か……)

この魔力は相対した者を威嚇する為の虚仮威しではない。闘える者が纏える正しく闘気そのものだ。神鳴流剣士である刹那ですら萎縮する中で、それでもネギは動じなかった。ただ、胸中の決意を言葉に直し、ぶつけていく。

「僕だって、自分が役に立てるなんて思っていない。さっきだって怖くて、恐ろしくて、まったく動けなかった。でも……でも！あの人はコタローくんを傷つけて、茶々丸さんを傷つけて、師匠を殺そうとしているんです！！

僕は……麻帆良学園の先生です。生徒であるエヴァンジェリンさんが危ない目にあっているのに、黙って見ているなんて、できません……！」

普段の聡明さとは掛け離れた我武者羅な姿勢。責務よりも。義務よりも。胸に燦る熱い想いに背中を押されて、ネギは学園最強の魔法使いに食い下がった。

「

エヴァは振り返らず、ただ背後で捲くし立てるネギの言葉を聴いていた。

無心になって、弟子の言葉を聞き届ける。

「……君の気持ちはよくわかった。しかし、これは麻帆良学園長としての命令じゃ。」

これ以上駄々を捏ねるのなら 最悪、学園を辞めてもらうこと

になるぞい」

「っー！」

学園長の無情な言葉にネギは唇を噛み締める。

何故なら、それはネギの抱く『立派な魔法使い』《マギステル・マギ》への夢を断たれるという事に他ならないのだから。かつて村を襲った悪魔から助けにくれた父の後姿に憧れ、一心に目指してきた夢。きつと、それはネギの根本を占める重大な決意だ。諦める事なんて、ましてや捨てる事なんて出来るわけがない。

けれど。

けれど、それでも。

「構いません」

夢を捨ててでも護りたいと。そうネギは言った。

「僕の目指す『立派な魔法使い』は、誰かを助けられる人です。

困っている人を。助けを求める人を。大切な人を。分け隔てなく救える魔法使いなんです。きつと、ここで何もしなかったら僕は一生後悔します。たとえ『立派な魔法使い』になれたとしても、ずっと後悔し続けると思うんです」

「……………」

静かなネギの決意表明に学園長は口を挟まない。

ネギの瞳を一心に覗きながら聞き入っている。

「さっきの人は、確かに怖いです。怖くて怖くて仕方ないです。け

ど、それ以上に。このまま僕が何もしないで師匠に何かあったら
って思う方が ずっと、ずっと怖いんです」

怖いと言う瞳に、恐れは無かった。

いや、無いと言うわけではない。

ただ、それを上回る『護り抜く』という決意に覆われているだけ
だ。

けれど。そんな決意だからこそ、何よりも堅く、折れない。

「クッ」

短く、エヴァは嗤った。

あまりにも子どもらしい甘い言葉を嘲笑った。

ネギは知らない。

本当の意味で、この麻帆良に送り込まれた二人がどれほどの規格
外なのかを。

もし知っていれば、軽々しく首を突っ込む愚考は犯さない。

何も知らないが故に、無謀に走れるのだ。

(まったく、我が弟子ながら、とんだ大馬鹿者だよ)

呆れ果てて、エヴァは嘆息する。

そうして次に漏れ出た声は。

「私に似て、な」

隠し切れぬ喜悦に染められていた。

「え？ 師匠？」

不意なエヴァの咳きをネギは訝しむが、それに対する返答はなかった。

エヴァは学園長を見据えて、未だ喜悦に揺れる喉を次の言葉で震わせる。

「諦める、じじい。こうなったら梃子でも動かんぞ」

「むう、しかし……」

学園長とて、本当にネギを辞めさせようとは思っていない。

さっきのはただの揺さぶりのつもりだったのだが、どうやら吹っ切れる手助けをしてみましたらしい。エヴァは一向に首を縦に振らず、なおも渋る学園長をつまらなそうに見やりながら、億劫そうに語りかける。

「まったく、情に溺れて状況を見誤るなよ。

アイツ等を引き寄せたのは私だが、私がこんなところにいるのはナギのせいだ。

なら、その尻拭いを息子にさせるのは当然だろう？」

「いくらなんでもそりゃ暴論じゃと思うがのう……ん？」

あいつ等？ 聖堂騎士の他に何者が潜入しておるのか！？」

「なんだ。気づいていなかったのか？」

まあ、私でさえ姿を見せるまで気づかなかったからな。当然といえば当然か」

言ってからエヴァは舌打ちをして、この世界で最も吸血鬼らしい

同属に静かな憎悪を募らせる。本当は口にするのも嫌な名だが、仕方が無いので口にする。

「貴様も聞いたことぐらいはあるだろう？」

私を差し置いて最強の名を冠する不屈き者。

人間の狗に成り下がったヘルシングの吸血鬼　アーカード」

「なんとっ！ 『不死の王』ノー・ライフキングまでもがこの学園に！？」

ガタンツと。学園長は驚愕に慄きながら椅子を倒して立ち上がる。ネギ達は突然の学園長の狼狽に驚くが、当の本人はそんな事を気にしている余裕はなかった。

「むう。タカミチの海外派遣は教会の仕業だとしても、まさかヘルシング機関までもが動くとは……同調したわけではないのじゃろうが、タイミングが悪すぎる」

唸る学園長の脳裏には様々な対応策が浮かんでは消えていく。両組織の残虐さは魔法界にすら轟いているのだ。下手な対応は、致命傷に為りかねない。だが、これといった方策は無く、自然に一つの結論に達した。

（やはり、ここは……）

「やめておけ、じじい」

密かな方策はしかし、エヴァの言葉に遮られた。

「貴様の事だ。どうせ自らが動くつとこのだろう？ それこそ愚策だ。」

関東魔法協会の理事が動いたとなれば、教会の連中は勝手な言い分を喚き散らしながら大挙して押し寄せてくるぞ　貴様の生死に関係なく、な」

「え？」

「学園長？」

「……………」

ネギと刹那の呼び掛けに学園長は何も言わない。それに代わってエヴァはジト目で睨みながら述べていく。

「ふん！　　いつたい何年貴様の道楽に付き合っていると思っっている。大方アイツ等を道連れに死ぬ気だったのだろうが、まったく見通しが甘いと言えないな」

エヴァから語られる学園長の思惑にネギや刹那、カモに茶々丸は瞠目して学園長を凝視する。

「……………」

学園長は何も言葉を発さない。

黙して語らぬその沈黙こそが、他ならぬ肯定の証であった。

「ある意味、タカミチがいなかったのは不幸中の幸いだったかもしれん。

あの馬鹿なら本当に命と引き換えにしかねないからな」

『でもよー。それじゃあ、アイツらに手なんて出せねえんじや

なーか？

倒しても後に控えてんじゃキリがねえぜ！』

「倒す相手にもよる。」

じじいやタカミチは名が知られ過ぎているから難癖を付け易い。そこで、だ」

エヴァは邪悪な微笑を浮かべ、ようやくネギへと振り返った。

「ぼーやが狂信者……アレクサンド・アンデルセンの相手をしろ」

「え？」

「ちょ、ちょっと待ってください！ いくら何でも無茶です！

ネギ先生一人である男の相手なんて……！！」

「誰が一人でと言った」

困惑する刹那を尻目に、エヴァの本意を悟ったカモはピーンと尻尾を逆立てる。

『なーるほど。つまり、兄貴を筆頭にしてパーティー戦に持ち込むってわけか』

「そつだ。ぼーやはナギの息子だが、ぼーや個人の実績は無い。いくら面の皮が厚い教会の奴らも、まさか英雄の息子にやられたからなんて理由で追撃隊は出せん。メンバーは……面倒だ。貴様が決める、小動物。ただし、宮崎のどかだけは呼ぶなよ。あんな狂信者の思考を覗かせてみる。一生のトラウマだ」

『了解！ 最強最高のオールスターチームを結成してやるぜ！
……ん？ けどよお、もう一人の相手はどうすんだ？』

「私がするに決まっているだろう」

あっさりとは。何を当たり前の事を聞いているんだというぐらいの気軽さに、その場にいる全員が言葉を失った。それに構わずエヴァはさっさと踵を返してドアへと向かう。その途中、茶々丸の横を通り過ぎる間にエヴァは一つの命令を下した。

「茶々丸。お前はぼーやのサポートに回れ」

「しかし、マスター。それでは」

茶々丸は声に抗議の念を込める。

エヴァのパートナーとして、一人で死地に向かわせるなど出来るはずがない。

しかし、当のエヴァが浮かべるのは 嘲笑にも似た、自尊心。

「茶々丸、お前は私を誰だと思っている？ 最強の魔法使いにして不死の魔法使い」

歌うように。謡うように。謳うように。

エヴァは氷のように冷たい闇のコートをその身に纏う。

その姿は魔法使いの間に語られる血を吸う怪物。

親が子に言い聞かせる伝説への回帰だった。

「 『闇の福音』 エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだぞ。」

あんな狂鬼、物の数じゃないさ」

溢れんばかりの威厳を以って、遙かな時を生きる吸血鬼はそう断じた。

答え

ベルは鳴った。

無邪気に。喧しく。清々しく。

麻帆良の地に鳴り響くベルは今宵の役者が出揃った事を告げていた。

舞台の俳優は自らの役割を演じる為に決められた立ち位置へと歩みを進める。

それは、彼女とて例外ではない。

「……………」

独り。夜の麻帆良学園をエヴァは歩いていた。

その小さな体躯を覆うのは、闇夜に於いて尚も際立つ漆黒の衣。

何時かのネギとの決戦で羽織っていたのと同じものだ。

不意に妙な感慨がエヴァの胸を過ぎった。

あの時は本気でネギの身なんてどうでもいいと思っていたのに、気がついたら師弟関係にまでなっている。

それだけじゃない。エヴァを取り巻く環境にも大きな変化が起きた。

例年通りつまらないはずの学園生活が、ヤケに騒がしく様変わりしてしまった。

(それも全て、ぼーやに関わってからか)

人知れず、エヴァは満更でも無さそうな微笑を浮かべる。父親に似てか、ネギには人を惹きつけるカリスマ性がある。尤も、そのせいで女性関係のトラブルとは生涯を通して縁深そうだが、不思議と浮かぶのは凄惨なものでない。どちらかというところメデイのようなドタバタ騒ぎだ。

(まあ、苦難の道にあるのは間違いないか)

クツクツと嗤うエヴァの表情は小悪魔というより悪魔そのもので、それをネタにからかい続けようという魂胆がはつきりと窺い知れた。けれど。不意に、その笑みに影が差す。

「生涯、か」

エヴァは普段の彼女を知る者なら驚くぐらいか細く、力無く呟いた。

エヴァンジェリンの生涯は、既に終わっている。終わっているのだ。

あの日。望まずに吸血鬼にされたその日に。

この身は死人だ。

吸血鬼という名の肉ある亡霊。

現世に縋り付き、生者の血を啜り、日陰を歩く者。

『貴様は、なんのために生きているのか』

脳裏に嘗て投げ掛けられた同属の言葉が過ぎる。

あの時の答えを、エヴァは覆すつもりなんてない。

けれど　本当にそれが正しいのか。何故だか確証を持ってなかった。

「……………」

臭いが、強くなってきた。

鼻を突くヘドロのように醜悪な臭い。

過去に幾度も幾度も嗅ぎ続けたそれは　闘争の、臭い。

「　　チッ」

不愉快そうに、エヴァは舌を打つ。

このまま進んで辿り着く場所にいるソイツは、予想以上の化け物らしい。

辺りに充満　いや、ここまでくれば侵食か。

漂う空気は血の滑りのようにネバついていて、一種の異界と化している。この先にいるソイツは何の魔力も、気も介さず、ただの存在感だけで世界を変質させていた。

「……………」

怖くないと言えば、嘘になるだろう。

事実、今のエヴァは封印によって常人と何ら変わらない。

無意識のうちに震える指先は、人の根底に根付いた化け物への恐れのためか。

それでも歩みを止めないのは、自分の信念の為。誇れる自分であ

り続ける為。

虚偽と虚勢で包み込んだプライド。

それをこれからも守り抜くためにも。

今この時だけは、エヴァは決して逃げるわけにはいかない。

「……………」

幾つ目かの角を曲がると、開けた広場に出た。

ついさっきまでいた世界樹の広場だ。そこには誰もいない。夜中、
というのもあるのだろうか、辺り一体を覆う狂気が人を含めた動物
を遠ざけている。

この場に人気はまったくなかった。

なにせ、この場にいるのは化物だけだ。

だからこそ。世界樹の木の下に悠然と佇むソレも、もちろん人で
はない。

「……………答えは用意したか、エヴァンジェリン」

眼下のエヴァに親愛の情すら込めて、誰よりも吸血鬼らしい吸血
鬼であるアーカードは語り掛ける。

「独りか。それもいい。あの小僧なら十分に私を楽しませてくれた
だろうが、熟成させた方がより美味しく飲み干せる。それに元々、
こんな極東の島国に出向いたのは貴様のためだ。愛しい愛しい同胞
よ」

カッと、アーカードは歩を進める。

眼下に佇むエヴァは無言で、無表情で、無反応だ。

それを狂おしいぐらいの凶笑で迎えて、アーカードは対化物、対アンデルセン拳銃であるジャツカルを懐から引き抜く。小さなエヴァの躰など一撃で粉々に吹き飛ばす化け物のための拳銃は、果たして化け物に銃口を向けた。
エヴァンジェリン

「約束だ。約束どおりに私は訊くぞ。三十年前の約束どおりに、私は貴様に詰問するぞ。エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。貴様の生きる目的とは何だ。私は闘争に生きている。他者を斃し、殺し、蹂躪し、血液を啜り、魂を私の脳裏に刻み付けて生きている。何故なら私はそうあるべきだからだ。そうある事が当たり前だからだ」

幾百幾千あるいは幾万の命すら一身に抱え込んだ哀れな吸血鬼は、常に纏っていた一切の狂気を消して、涼しげに言葉を紡ぐ。

ただ一心に、自己の全てを広げるかのように。

「貴様の存在理由はなんだ　貴様は、なんのために生きている」

それは既に質問ですらなかった。

アーカードにとって、これはただの確認事項。

先延ばしにしていた回答を聞いているだけに過ぎない。

「……ふ」

その姿を、突き付けられた銃口を見据え、何故かエヴァは穏やかな笑みを零した。

ネギ達には強がつて見せたが、やはり対峙する吸血鬼はどうしようもないぐらい強大。そもそも全盛期の時ですら斃し切れなかった相手。出鱈目というカテゴリーではサウザンドマスターすら凌ぐ最

悪にして最狂。

「……ふはは」

だというのに、エヴァは笑っている。

胸中を占めていた恐怖が一気に薄らいでいく。それが吹っ切れた為なのか、それとも単に開き直っているだけなのかはエヴァ自身ですら判別できなかった。

ただ一つだけ確かなのは、アーカードの答えを酷くバカバカしく思えた事だけ。

闘争に生きている？

他者を斃し、殺し、蹂躪し、血液を啜り、魂を脳裏に刻み付けて生きている？

それが 当たり前だと？

「ふはははははっ！！」

ついにエヴァは耐え切れず、大声で笑った。嗤ってやった。

くだらない。実にクダラナイ。あまりにも吸血鬼らしくて、逆にエヴァは拍子抜けしてしまった。そんなどうしようもないぐらいクダラナイ事を自慢げに語るアーカードが、可笑しくて可笑しくて仕方なかった。

「あはははは！ ふふっ、吸血鬼しか知らない吸血鬼が。なんだ。貴様の方がよっぽどつまらないじゃないか」

エヴァは胸を張って一步を踏み込む。

最早こんな吸血鬼など恐れるに値しなかった。

エヴァにとつてはこんなちつとも変わり映えのない吸血鬼などよりも日々移り変わる日常の方がよっぽど恐ろしい。ああ、気づいてみれば簡単だった。

「何のために生きているのかだと？」

何を今更。私は三十年前に、あの満月の夜に確りと答えたはずだぞ。

私は生きたいから生きているのだ。それ以外に、答えなどありえん！」

力強く、はつきりと。

エヴァは真紅の吸血鬼に向かって咆哮する。

胸中と思う。

そくだ。自分は死ねない。今の自分はその時とは違う。無念も、遣り残した事も出来てしまった。それを叶えずして、どうして死ぬ事が出来るだろうか。

「私がお前に殺されるんじゃない。お前が私に殺されるんだ！」

全力を出す事ができず、『魔法使いの術者』もない。それでもエヴァの瞳は壮絶な輝きと共に物語る。

最強の吸血鬼を　この脆弱な身を以って打倒すると。

「　素晴らしい」

その無謀な宣言を前にアーカードは怒るわけでもなく、むしろ心より歓迎するかのように口元を喜悦に歪めた。そして、アーカードもまた、優しげに返す。

「人間でも、吸血鬼でも、あの婦警のような半端者でもない。完成され、洗練され、私すら認めるバケモノの貴様が、人間の心で私を斃すというか!？」

「ハッ！ 論点を移し変えるな。」

この私が。貴様を。殺す。ただそれだけの事だろうか?」

「くくっ、そうだな！ ああ、その通りだともエヴァンジェリン！ならば始めよう！ 貴様の望む！ 私の望む！ 心踊り肉踊る！ 楽しい楽しい闘争を!!」

「ああ、存分に楽しめ！ 貴様にとっては最後の殺し合いだ！ せいぜい無念を残さぬことだな!!」

獰猛な笑みを浮べ合う二匹の鬼の闘争は 銃火を以って、開幕した。

幼き決意

二匹の血を吸う鬼の対峙より、時刻は十五分ほど遡る。

点々と備えられた西洋風の街灯の仄かな明かりで照らされた歩道。季節が春ならば見応えのある華やかな桜が悠然と芽吹き、桜通りの名に恥じぬ風情を醸し出すであろう。しかし、春の季節が過ぎ去った今となつては桜の花など一輪とてあるうはずもなく、ただ宵闇に黒ずむ葉々が時折の風に揺れるだけ。

何処となく不気味で、底知れぬ不安を悪戯に煽り立てる歩道。

其処には現在、一つの規則正しい足音がヤケに大きく響いていた。コンクリートで舗装されている深夜の歩道を歩くのは、一人の大人柄な男。

足元まで悠々と覆い隠せる大きなコートを身に纏い、その下には黒い神父服を着込んでいる。黒の衣の上で跳ねる銀のロザリオは月光と街灯を受けて鈍く輝き、ささやかながらも存在感を主張していた。

男の名はアレクサンド・アンデルセン。

世界最大宗派、キリスト教の暗部中の暗部。

ヴァチカンが誇る異端殲滅機関イスカリオテに於いて最強のジョーカーと称される存在だ。アンデルセンは黙々と歩みを続け、木々の狭間を颯爽と通り過ぎて行く。

「こちら、瀬流彦。目標は桜通りを歩行中です」

不意に。桜通りから遙か遠方にある建物の屋上で緊張を孕んだ声が響いた。

麻帆良学園に在籍する魔法先生の一人。優しげな顔立ちと性格で生徒からの信望を集める瀬流彦は、双眼鏡と通信端末を片手に学園長へ連絡を取る。

返事は即座に返ってきた。

『うむ。引き続き監視を頼むぞ。ただし、危険を感じたらすぐに逃げるように』

「ははは……言われなくても無理はしませんよ。」

学園長がここまで危険視する相手に油断するほど、自惚れてはいませんから」

『……損な役回りを押し付けてすまんおう。』

増援の警戒のため、他の魔法先生には広範囲に散らばってもらっておるのじゃ。

非番じゃった君に最も危険な役を割り当てるのは、本当にすまんと思うとる』

「そんな、気にしないでください。それでも状況はわかっているつもりです。」

それに　ネギ君達に比べたら、こんなの危険のうちにも入りませんよ」

『……………』

心苦しそくに齒軋りする瀬流彦に対して、学園長は返す言葉もな

い。
学園長は静かに、エヴァが部屋を出て行った後の遣り取りを思い返していた

自信に満ち満ちた足取りで悠然と部屋を後にするエヴァの後ろ姿を見送ると、学園長は皺だらけの目尻をほんの少しだけ持ち上げた。仙人染みた頭の中では次々に打つべき方策が浮かんでは消えていき、神妙な面持ちで腰を下ろす。

「む？」

しかし、いくら腰を沈めても、あるはずの感触がない。

そこでようやく、学園長は椅子を倒してしまったことを思い出す。簡素な魔法を用いて椅子を起き上がらせると、改めて腰を落ち着かせた。

馴染み深い感触に背中を任せて、学園長はポツリと呟く。

「……相変わらず、頑固じやのう」

強がりおって。

学園長は胸中でやれやれとでも言いたげに吐き捨て、表情を厳と

引き締める。

方策は、既に固まっていた。

「この際じゃ。ヘルシングはエヴァンジェリンに一任する」

「っ！？ 本気ですか、学園長！？」

アレは、一人でどうにかできる相手ではありません！

ましてや、今のエヴァンジェリンさんは魔力が封じられているんですよ！？」

「彼奴が望んだ事じゃ」

「しかし！」

なおも食い下がる刹那を学園長は鋭く射抜く。

その眼光は非情な冷たさを帯びて、一刀の下に刹那の甘言を切り捨てた。

「目的を履き違えるではないぞ。

今、ワシらがすべきは麻帆良の防衛。それ以上でもそれ以下でもない」

「っ！！」

「既に魔法先生には増援を警戒して麻帆良の周りを固めてもらっておる。現在、自由に動き回れるのは極少数じゃ。君達はすぐにでもパーティーを結成し、アンデルセン神父を拘束、もしくは足止めしてもらいたい」

「……わかり、ました」

若干の沈黙を経て、刹那は呻くように答えた。
唇を噛み締め、愛刀である夕凧を手が真つ赤に充血する程に強く握り締める。

刹那は、傍目から見ても使命と私情の間で葛藤しているように見えた。

そんな刹那の悲痛そうな面持ちを見据えて、学園長は微かに苦笑する。

「そんな顔をするでない。

ワシとて、エヴァンジェリンを見捨てる気はないんじゃないぞ？」

「え？」

「えってなんじゃ、えって。これでもエヴァンジェリンとの付き合いは君らよりワシの方が遥かに長いんじゃない。こんなつまらない些事で茶のみ仲間を死なせるのは御免じゃよ。まあ、彼奴のことはワシに任せておきなさい」

「そ、そうですか。では、お願いします」

「うむ。君らはアンデルセンに集中するんじゃない。

ほれ、ネギ君を見てみい。もう やる気満々じゃぞ？」

言われて、刹那はようやく気づいた。

自らの頬を撫で上げる柔らかく温かな風に。

ピリピリと身を突き刺しながら、決して不快には感じない凝縮された闘気に。

「ネギ……先生？」

呟く刹那に、けれどネギは答えない。いや、恐らく聞こえていないのだろう。

グツと。胸の前で小さな、けれど力強い拳を握り締める姿には恐怖など一片も見られない。むしろ、メガネの奥に燦る眼光は眩いばかりの光に満ちて、託された使命を遣り遂げる決意に溢れていた。

「ふう」

刹那は嘆息して、不謹慎ながらも口元に笑みを浮かべる。

そして、思った。

ネギは、エヴァンジェリンの勝利をまったく疑っていない。だからこそ、やるべきことに全力で挑もうとしてしる。

それは何の根拠も無く、裏表も無く、ただ相手を信じているだけの無条件の信頼。

刹那は静かに、ネギの肩へと手を置いた。

「ネギ先生」

「へ？ あ、はい！ 何でしょうか？」

ハツと気を取り直したネギは少し慌てた様子で刹那の方へと向き直る。

今この時に於いて、長い口上など必要ない。

だから、刹那はただ一言だけ。簡潔に、明確に、短く告げた。

「勝ちましょう」

言葉にすれば、たったそれだけ。
けれど、挑む相手を省みれば、その言葉を口にするのにどれほどの勇気が必要か。

澄み渡る湖のように安らかな刹那の瞳は、真っ直ぐにネギを見据えている。

もう、刹那の胸中からは迷いが消えていた。だからこそネギも力強く。

「はいっ！！」

ただ短い決意を返した。

『よっしゃーっ！ そんじゃ最強チームの編成はオレっちに任せろい！！』

イスカリオテだかピスカリオテだか知らねえが、兄貴たちを敵に回したのを後悔させてやんぜ！！』

二人の遣り取りに感化でもされたのか。ネギの肩にしがみ付く力ももいつそう気合の咆哮を張り上げる。後方に控える茶々丸もまた、声こそ上げないが微笑ましそうにネギ達を見つめていた。

カツ、カツ、カツと。闇夜の桜通りに規則的な足音が響いている。アンデルセンの歩みには一切の迷いが無い。

ただ自らの定めた目的地を目指して淡々と歩き続ける。

遠方から見張る瀬流彦は、方向からアンデルセンの行き先を既に割り出していた。

「学園長。やはり、ターゲットは学園長室に向かっています」

『うむ。どうやら所在のはっきりしておるワシから片付けるつもり
のようじゃのう』

仮にも麻帆良を治めるトップを単身で討ち取るうなどと、正気の沙汰ではない。

だが、忘れるなかれ。向かい来るは狂気こそを苗床とする狂信者の尖兵。

普通や正気などという言葉は、彼等にとっては最も縁遠い。

『む？ どうやら、ネギ君達の準備が整ったようじゃ。』

君は予定通り、他の魔法先生と合流してくれ。よいか。ここからが正念場じゃぞ』

「分かっています。ネギ君や生徒を危険に晒すのは心苦しいですが、僕は僕にできることを精一杯やるつもりです」

瀬流彦は端末を耳から離すと、アンデルセンを苦々しく一瞥してからその場を離れる。

「……無理はするなよ、ネギ君」

最後に、小さな同僚に気遣いの言葉を残して。

一方のアンデルセンは歩くという動作をそのままに、僅かに視線だけ横合いに動かした。見つめる先は、今まで瀬流彦がいた建物だ。

(失せたか……頃合いだな)

アンデルセンは不意に道端で立ち止まると、周囲を舐めるようにして見渡した。

「そろそろ出てきたらどうだ、異教徒ども。さつきから鼻について仕方無いんだよ。」

薄汚い化け物もどきや小汚い魔法使いの臭いが、臭くて臭くて堪らない」

アンデルセンは侮蔑のみを込めながら吐き捨て、懐に手を伸ばす瞬間。黒光りする閃光が、闇夜に溶け込み飛来した。数十にも及ぶ閃光をアンデルセンは実に嬉しそうに見据えると、躲そうとも防ごうともせず、ただ自然体のままでその全てを受け入れる。

ドツドツドツと。肉を裂き骨に食い込む鈍い音が、夜の闇に木霊した。

アンデルセンの両腕には、手裏剣やクナイが幾つも深々と突き刺さっている。

「ほう……ニンジャ、とかいう奴か？」

「残念ながら、拙者は忍者ではないでござるよ」

呟きに、返答は右手側の樹木の枝辺りから届いた。一体いつからそこにいたのか。長瀬楓は飄々として樹木の枝に佇みながら、眼下のアンデルセンを見下ろしている。

アンデルセンは楓の姿を認めると、場違いなほど柔らかく微笑んで見せた。

「おやおや……誰かと思えば、昼間のお嬢さんではないですか。こんな夜更けに出歩くのは感心しませんね。化け物に襲われてしまいますよ?」

「心配は無用でござる。」

そちらの御仁は、拙者の友人が相手をしているでござるよ。拙者達の役目は」

ザッと、アンデルセンを取り囲むように木々の陰から数人の人影が現れる。

その数は四人。ネギ、刹那、明日菜、茶々丸だ。

四人はアンデルセンを油断無く見据えると、迅速に動けるように各々が最も動きやすい体勢を取る。ここに、闘争に必要な準備は全て整った。

「危険人物を捕らえることとござる」

口上が終わると楓は薄く瞳を開き、アンデルセンはニィと口の端を持ち上げる。

ここに、二つ目の闘いの火蓋は切って落とされた。

吸血鬼（前書き）

ここからバトルに突入です。

なお、両作品のパワーバランスは私の見解に即したものを適用していますので、あらかじめ御了承ください。

吸血鬼

瀬流彦との交信を終えた学園長は凝り固まった肩を軽く叩き、深々と息を吐いた。

次いで休む間も無く、机上の通信端末から他の魔法先生に連絡を取る。

「そちらはどうなっておりますかな？」

『こちらガンドルフィーニです。西地区に敵増援の姿は確認できません』

『葛葉です。東地区にも敵影はありません』

『南地区のシャーケティですが、こちらにも問題ないですね』

『北の神多羅木。いつも通り静かなものです』

魔法先生の中でも指折りの実力者達は学園外の見回り結果を順次報告する。

その内容に学園長はそれと分からない程度にホッと胸を撫で下ろした。

「わかりました。では、先生方は引き続き警戒を厳にお願いしますぞ。

何か異変があれば直ぐに知らせ、決して個人の判断で動かぬように」

必要ないとは思いながらも学園長は念の為に釘を刺す。

魔法先生は総じて正義感が強く、万が一という事も考えられるからだ。

「ふう……」

何はともあれ、増援が無いのなら目下最大の憂いの種は消えた事になる。

しかし、学園長に安堵の色は見られない。

皺だらけの目元に隠れた眼光は、未だに鋭く虚空を睨んでいた。

「……この麻帆良を相手に増援が無いとは。随分と舐められたものじゃ」

胸中に燻っていた憶測が確信に変わる。

思わず、学園長は普段の孝行爺の仮面を脱ぎ捨て不快感に吐き捨てた。

「ふん。自らの切り札に絶対の自信を持つとるわけか」

ヴァチカンの『聖堂騎士』アンデルセン。

ヘルシングの『不死の王』アーカード。

学園長は今の今まで彼等は先遣隊に過ぎず、本陣は別にいるものと考えていた。

如何に彼等が優れた手腕を誇ろうと、単身でこの麻帆良に攻め入るはずがないと。

常識で考えて、そう判断していた。

けれど、違う。

ここに至って学園長は己の間違いを悟った。

アーカードとアンデルセン。彼等は真実本当に殲滅者なのだ。個人とか集団とか組織とか、そんな窮屈な括りなど一切合財無視した、純粹なまでの絶対戦力。

ヴァチカンやヘルシングにとっては彼等を派遣した以上、目標の殲滅は当たり前。

それ以外の何かをわざわざ用意する必要なんてない。徒勞に終わるだけの準備など、そもそも意味は無いのだから。

そんな化物の一翼を、自ら懐に招き入れてしまった。

学園長の罪悪感は膨らむばかりである。

「不甲斐ない老いぼれの後始末を若者に託すとは……何とも情けない話じゃのう」

肩を落とす学園長は、おもむろに机上に散らばる書類の一枚を手にとった。

それは二日前、教会から送られてきた神父派遣の報告書。この報告書が届いてから僅か三時間後、アンデルセンは偽名を携えて麻帆良の地を踏んだ。

もし、この段階でアンデルセンの正体を暴けていればと思わずにはいられない。

しかし、いつまでも悔いているわけにはいかなかった。過ちは行動を以って雪ぐしかないのだから。

「さて、次は……」

学園長は募る心労を気にも留めずに各方面へ指示を飛ばそうと老脳を廻らせる。

ふと、その時、通信端末の光点がピカピカと点滅した。すぐさま学園長は端末に手を伸ばし、回線を開く。

「だれ……」

『学園長！ 大変です！！』

「……何事じゃ？」

学園長の言葉を遮り、荒げた声を出すのは魔法先生の一人である式集院光だ。

そのただならぬ様子に学園長も気を引き締める。しかし、次に式集院が発した言葉は学園長をして予測不可能なものであった。

『そ、それが、学園のシステムが何者かのハッキングを受けています！！』

思いも寄らぬ報告に学園長は目を剥く。

「なんじゃと！？ ヴァチカン……いや、ヘルシングか！？」

『わかりません！ ただ、ハッキングの発信元は学園内です！ 現在は詳しい位置情報の確認に尽力していますが、絶対的に人手が足りず、防戦一方です。このままだと相手を特定するよりも早くシステムの中枢を掌握されかねません！』

「なんと……」

学園の警備に動員可能な人手をギリギリまで回したことが完全に裏目に出た。

出なければ、こんなにも容易く麻帆良のシステムが陥落の危機に晒されるはずがない。

(相手は麻帆良の現状を知る者か！)

歯噛みするが、今はとにかく時間が惜しい。

学園長はすぐさま指示を飛ばす。

「……何人かの魔法先生をサポートに回そう。すまんが、それで何とか凌いでくれんか？」

『わかりました。やれるだけのことはやってみます！』

勇んで告げて、式集院は通信を切った。

次から次へと巻き起こる不測の事態。学園長は眩暈を堪えるかのよつに額に手を当てた。

「……もう、何が起こっても驚かんわい」

学園長は胸中に堆く積もる心労を吐露して、次の事態に備えるのだった。

銃声が、静寂を喰い荒らした。
撒き散らされた残響は闇夜に幾重にも反響して、鳴り止むことを知らない。

遙か悠久の時を馳せ、日々の営みを優しく、寛大に、慎ましく見守る世界樹。

その膝元に満ちる音は本来、子供達の無邪気な笑い声でなければならぬ。

けれど今この時。広場を席卷する音は平常と掛け離れている。

人喰い鮫より醜悪に。人喰い虎より獰猛に。より容易く。より確実に。

瞬きの間に命を奪い去る銃は、吼える声を収めようともしない。

一度、二度、三度　断続的に繰り返えされる銃声。

落雷にも似た轟音は、必要以上に弾幕のスクールを降らせ続ける。不意に。狂犬の叫びが、銃声に重なった。

「あはははははっ！！　どうした！？　いったいどうしたエヴァンジエリン！？

ずいぶんと消極的じゃあないか！　私を殺すのdarou！？　いつまで逃げ回る！？　いつまで私を焦らす！？　私はいつまでオアズケを喰らわねばならない！？」

右手に黒光りする自動拳銃「ジャツカル」を。

左手に銀色の光沢を放つ「454カスール」を。

常人が持つべき規格を逸した二挺拳銃を携えながらアーカードは咆哮する。

攻め立てる弾幕の向こう。射線から逃れる為に絶えず動き続ける小さな黒衣は不愉快そうに「フン」と鼻を鳴らした。

「まったく、煩い駄犬だ。メシすら待てずに喚くとは……余程、飼い主の躰がなっていないようだな。いや、こんな狂犬を進んで飼う物好きだ。それに飼い犬は飼い主に似るといふし　ああ、そうか。飼い主も、貴様のようなゴミなのか」

「ほう！　ゴミというか、我が主を！　威勢は買うが、聞き捨てならんな！」

「ハッ！　凶星を突かれて怒ったか？　駄犬といえど、忠誠心は立派だな！」

侮蔑と嘲笑を織り交ぜた挑発と同時に、エヴァは苛烈な弾幕から離脱する。

直後、一瞬前までいた地面に三つの弾痕が刻まれ、弾け飛んだ。そのまま転がり込むようにして世界樹の影に隠れたエヴァは、内心で悪態を喚きたてる。

（チッ！　予想はしていたが、大した威力の銃だ。

しかも、恐らく全ての銃弾が法儀礼済み。

今の私の魔法障壁では、防ぎ切れそうにないか）

エヴァの記憶に残る場景でもアーカードは銃を所持していたが、

あの時とは根本的に威力のケタが違う。特に、黒い銃は製作者の神経を疑う他なかった。

あんなもの、どこかの狂人が冗談で作ったとしか思えない。兎にも角にも、銃弾が四肢に掠るうものなら根元から吹き飛び、腹に当たれば五臓六腑を丸ごと持っていられない。正に鬼に金棒。最悪すぎて反吐が出る。

(人間の武器など振り回しおって……吸血鬼なら吸血鬼らしく、己の牙と爪で戦わんか！　せめて、魔法のような神秘に頼ってこそその化け物だろうに)

さり気無く自身を正当化しつつ、エヴァは状況の打開を模索する。いざ勇んで挑んだのは良いが、やはり彼我の戦力差は目を覆いたくなるほど絶望的であった。両者を隔てる圧倒的な身体能力の差は、この際どうでもいい。エヴァは最初から肉弾戦の選択肢を除外している。如何に百年の研鑽を積んだ合気道の技があるとはいえ、吸血鬼の怪力を御する確信などエヴァには無い。精々が攻撃を往なすのが限界だろうと早々に見切りを付けていた。かといって魔法使いの本領たる遠距離戦は封印による魔力不足で決め手に欠ける。

故に勝負を懸けるべきは中距離戦。近からず遠からずの距離を維持しながらの戦闘がエヴァにとつて唯一の勝機であったが、その思惑はアーカードの手に収まる二挺拳銃によつて早くも御破算の様相を見せ始めていた。下手な魔法よりも威力が高く、かつ連射性に優れた火器の存在はエヴァの行動を完全に押さえ込んでいる。アーカードは吸血鬼としての本領を發揮するまでも無く、人間の利器によつて戦局を支配していた。

(とにかく、あの銃があるうちは勝負にならん。

不愉快極まりないが、このまま逃げ続けて弾切れを待つのが妥当

か)

エヴァは憤る胸中を制して冷静に判断を下すと、懐から魔法薬の入った試験管を片手に二本ずつ取り出す。何はともあれ、やられっ放しというのはエヴァの性分に合わない。無駄弾を撃たせるにしても積極的攻勢の結果でなければ納得できないのだ。

世界樹の蔭に隠れながら、エヴァは気配と銃弾の射線のみでアーカードの立ち位置を確認する。弾幕が途切れた合間を狙い、右手の試験管を手首のスナップを利かせて投げつけ、すぐさま呪文を唱えた。

「『氷楯』！^{レフレクシオー}」

大気を凍らせ出現した氷の楯はエヴァの姿を覆い隠す。

それに紛れてエヴァは世界樹の影から飛び出した。このままアーカードに突撃して『武装解除』の魔法を唱えるのも選択肢としては有力だが、そもそも吸血鬼の本領は怪力だ。下手に距離を詰め、その猛威の圏内に身を晒さすのは危険すぎる。

だからこそエヴァは攪乱を選択したのが 浅慮を嘲笑うかのように幾つもの銃弾が氷の楯を突き破る。

「クツ！？」

エヴァは咄嗟に身を縮めるが、風に踊る金砂の髪の一束が銃弾に掠り飛散した。

其処に 碎ける氷塊を強引に押し退け、白銀の銃口が姿を現す。連射の熱で焼け焦げた火薬の臭いのするソレは、正確にエヴァの額を狙っていた。

ゾクリと。エヴァは全身の産毛が総毛立つのを自覚した。

理性で判断するよりも早く、経験と生に縋り付く本能が反応する。

「『ウイス・カースス
氷爆』!!!」

咄嗟に唱えた呪文が形を成すのと、引き金が絞られるのは殆ど同時であった。

銃声と、氷の砕ける音が二重に木霊する。

「が、ぐっ!」

呻き声を上げながら、エヴァの躰が吹き飛んだ。

超至近距離での魔法発動の余波を利用して何とか銃弾は躲せたが、その代償は大きい。本来、投げつけて用いるはずの魔法薬を手中で使用したのだ。魔法の起点となった左腕は砕けた氷によって無数の裂傷が刻まれ、青白い凍傷まで起こしている。

痛々しい、ではなく。無残と言うべき惨状であった。

「今のを躲すか。さすがだ。そうでなくてはいかん」

脳髄を焼かれるような激痛の中で、苦悶に美貌を歪めるエヴァ。

其処に耳障りな声が届く。冷やされた大気が白く染まり、砕けた氷がキラキラと漂う一帯。その向こうに佇むアークカードは、真紅の赤を強調するかのように歩み寄っていた。

緩やかな足取りでエヴァへと近づくとアークカードは楽しげに語る。

「今の貴様は生に縋り付く人間そのものだ。意地汚く、薄汚く、ド口に塗れて汚泥を嘍り、それでも生き残ろうともがき、足掻く。死が遠のくバケモノでは持ち得ない生への飽くなき執着。だが」

「つぐう!!」

ゴリツと。おもむろにアーカードはジャツカルの銃口をエヴァの額に押し当てた。

焼け付く銃口は焼き撥のようにエヴァの額を焦がし、肉が焼ける臭いが鼻を刺す。

「それだけでは私に勝てない。

純粋な人間であるならば、それだけでも私と渡り合えるだろう。

だが、貴様は何だ？ 貴様は何者だ？ 忘れるなよエヴァンジェリン。

貴様は否定しようのない完成されたバケモノだ。生に縋り付く。

それはいい。それは貴様の人間としての本能だ。だが、バケモノとしての本能はどうした？ どこに置き忘れた？ それが無ければ天秤は片側に傾き、ただの人間のようなものに成り果てて この場で終わる」

「っ!!」

痛みすら忘れてエヴァは息を呑んだ。

この位置。距離。体勢。

エヴァを構成する全ての経験が躲せないと結論付けた。

アーカードが撃たないなんて御伽噺のような選択肢は存在しない。それは、狂気に犯された紅い瞳が如実に物語っている。

キイト。引き金を引き絞る音がヤケにはつきりとエヴァの耳に届いた。

躲せない。躲せない。躲せない。絶対に躲せない。

躲せないから 撃たせない。

「……？」

不意に。アーカードの貌が喜悦から不可解そうなものへと変貌する。

何故だか、ジャツカルの引き金を引き絞る指がピクリとも動かなかった。

怪訝そうなアーカードの眼前に四つの試験管が舞い踊る。

「『レフレクシオー氷楯』！！！」

轟く声は、覇気に満ちていた。四つ分もの魔法薬によって生み出された氷の楯は、矛となってアーカードの右肩に深く食い込み、一息の間に両断する。切り分かれた肩口からはドス黒い鮮血が噴水のように噴き出した。

繋がりを失った右手はジャツカルを握り込んだまま虚空に投げ出され、あらぬ方向へと飛んでいく。しかし、如何なる不思議か。腕は空中で不自然にルートを変更すると、まるで引き寄せられるかのようにエヴァの右手に納まった。

エヴァは邪魔な右腕を即座に引き剥がすと、ジャツカルを両手で構え、お返しとばかりにアーカードの胸に押し当てる。一瞬にして、立場は逆転していた。

「見た目通りクソ重いな。支えるだけで精一杯だ」

そう吐き捨てるエヴァの両腕は小刻みに震え、無理に動かした左

腕からは鮮血が滴り落ちる。ジャツカルの重量は16キロ。とてもじゃないが、今のエヴァでは持ち続けるなど不可能だ。クツと。アーカードは片腕を失ったにも関わらず、痛む素振りすら見せずに笑う。

「糸、か。死神に感化でもされたか？」

「ふん。生憎と私の方が先駆者だよ。かれこれ百年、研鑽を積んでいる」

タネは簡単だ。

アーカードが引き金を引こうとしたあの瞬間。

エヴァは持ち前の糸を用いてアーカードの指の動きを封じたのだ。

「今の私では貴様の指一本を封じるので精一杯だが……さて。以前は試せなかったが、貴様は心臓を吹き飛ばされても生きていられるのかな？」

薄い冷笑を幼い容貌に刻み、エヴァは一切の躊躇無く引き金を引いた。

響き渡る凶悪な銃声と共にエヴァの矮躯が強烈な反動によって後方に吹き飛ぶ。

ジャツカルは弾丸を吐き出した時点でエヴァの手元から離れ、今度こそ彼方に飛んでいった。何とか受身を取り体勢を持ち直したエヴァであったが、ガクンと体躯が崩れ、片膝をつく。

「チツ……ここまで、とはな。危うく、腕が千切れ飛ぶところだ」

ダランと下げた両腕は、銃撃の反動によって完全に関節が外れていた。

下手をすれば、輝が入っているかもしれない。
激痛が脳髓を焼く。けれども眼光だけはそのままに眼前を見据えている。

其処には、胸に大穴を空けたアーカードが身動きもせずにとんでいた。

胸元から溢れ出る鮮血は滝のようで、足元に血の池を創っている。

完璧な致命傷。白木の杭の代わりに対化物拳銃の大口径、しかも特性の水銀弾頭を撃ち込まれたのだ。如何に不死身の吸血鬼であろうと、これで滅びぬはずがない。

そう、滅びぬ、はず、が

「なるほど。身を以て味わうのは初めてだが、大した威力だ。
たったの一発で、私の心臓はグチャグチャだ。

私以外の吸血鬼なら、当たり前のように滅びて塵に変えるだろう。
流石だウォルター。お前は相変わらず良い仕事をする」

アーカードは、変わらず其処にいた。塵にも還らず、痛む素振りすら見せず、風通しが良くなった胸をそのままにアーカードは一步、エヴァの方へと踏み出した。

流れ出た鮮血がビデオの巻き戻しのようにアーカードの肉体へと
回歸する。

ほんの数秒。それでアーカードは肉体を、ついでとばかりに衣服
をも再生させた。

カツと。甲高い足音がエヴァの眼前で止まる。

エヴァは動けない。いくら気力があるうと、壊れかけた躰は動い
てくれない。

「ハッ……」

掠れたような。呆れたような。そんな微笑を零す。
エヴァは改めて、万感の思いを込めて。

「化け物が……っ！」

この奇天烈な理不尽を、心底から罵倒した。

「その通りだ、同胞よ」

アーカードは笑みを深め、誇るように肯定する。
ゆっくりと。アーカードは緩慢に、エヴァへと腕を伸ばす。
ただの子供ですら逃げられる動作に今のエヴァは抗えない。
細長い指がエヴァの細首に絡まり、丹念に優しく撫で上げた。

「さあ、エヴァンジェリン。」

『闇の福音』よ。人間の心を宿す化け物よ。貴様はこの状況をどう
する？」

「……………」

エヴァは、答えない。

アーカードは、構わず続ける。

「まだ、終わったわけではないだろう？」

お前はどの程度で狗に成り果てるほど弱くはないだろう？」

「……………」

エヴァは、答えない。

アーカードは、構わず続ける。

「細い首だ。小さな躰だ。だが、それは我々にとって何の意味もなさない」

グニヤリと。アーカードの躰が、輪郭が、不規則に歪む。大きくなって、小さくなって、太くなって、細くなって、最後には一つの形に落ち着いた。

其処には黒い長髪の少女がいた。

凜々しくも不適な笑みを刻み、厚手の白服が艶めかしい黒髪を際立てる。

少女　吸血鬼アーカードは、エヴァと同じ目線で言い聞かせる。

「この通り、私には姿形など、この私には意味など無い。

私は私であり、私以外には成りえないのだから。それは貴様も同じはずだぞ？」

「……………」

エヴァは、それでも答えない。

アーカードは、それでも構わずに続ける。

「何故、力を封じられたのかは訊かない。

何故、人間に溶け込んでいるのかも私は訊かない。

私はただ、私の鳴らした闘争の鉄火に応えたエヴァンジェリンという名の殺され、朽ち果てる者に。殺し、朽ち果てさせる者との闘争の契約を遂行しているだけに過ぎないのだから。それとも、エヴ

アンジェリン。貴様は、貴様自身で、私を殺す事を諦めてしまったの？」

「おい」

エヴァは、長い長い沈黙を破る。

その眼光は色褪せる事無く、ただ煩わしそうにアーカードを睨んでいた。

「少し、黙っていてくれないか？」

煩くて、貴様を殺す方策が思い浮かばないじゃないか」

ボロボロな躰。

白磁のように綺麗だった両腕は裂傷と凍傷で見る影もなく、肩は外れて動かない。

肉体自体も疲労して、マトモに動かすことすら困難。

だというのに、それでも。

それでもエヴァの瞳には意志の光が燈っている。

力強く。決して折れず。不屈の自尊心が絶対の敗北を跳ね除ける。

それは、まるで。アーカードを殺した、百年前の男達のように

「く…はっ」

喜びが、漏れる。

過去の场景と現在の场景がリンクする。

我慢が、できない。胸中で。脳髄で。心中で。爆発する喜びに歯止めが利かない。

「……貴様の一部と化すなど、冗談ではない。まして、塵になる気もない」

「そうか」

アーカードは無表情で454カスールを手放し、手刀をエヴァの胸元に向ける。

せめて最後は素晴らしき同胞に敬意を表し、自らの肉体を以って幕を下ろそうと。

「さらばだ、エヴァンジェリン。いずれ地獄で。いずれ会おう」

そう呪いの祝詞を告げて、アーカードは手刀を繰り出す。

それをエヴァは、ただ見下ろすだけ。

まるで時間が引き延ばされているかのような感覚の中でエヴァは手刀を見送る。

諦めてはいない。けれど、抵抗しようにも肝心の躰は動いてくれなかった。

(チツ……ナギに文句を言うまで、死ぬつもりは無かったのだがな)

ズブリと。手刀が腹に埋もれる感触が伝わる。

締め上げられた喉を這い上がって血塊が零れた。

霞む逝く意識の中で、虚ろな瞳は光を求めて街灯を見やる。

淡く輝く街灯。その光景を最後に、エヴァの視界から光が消えた。

覚悟

麻帆良学園某所。

夜の闇に塗れる教室に、カタカタとキーボードを叩く音が反響する。

並べられた二台のノートパソコンは複雑怪奇な数式や文字列を次々とディスプレイに浮かべては迅速に処理していく。しかし、それでも打ち手達には鈍重なのか、処理の僅かな合間に次の作業に取り掛かった。

まるで指の一本一本が別種の生き物であるかのように淀み無くキーボードの上を滑っていく。その光景は見る者に驚嘆と畏敬、そして畏怖を植え付けるには十分に過ぎるだろう。何故なら ノートパソコンの前に座る打ち手は、年端のいかない少女達なのだから。

「これで、終わりネ」

恐らく十四、五歳であろうか。

中華風の服を着込む少女は口元を猫のように緩ませつつ軽快にEnterキーを叩く。

するとディスプレイ一杯に奇妙な文字列や図形が浮かんでは消えていき、作動していたプログラムが全て消去された。それを満足げに見届けてから少女はノートパソコンを閉じる。

「探知は誤魔化せたヨ。そっちはどうネ？」

「こっちも終わりました。システム中枢へのハッキングは終了。途

中、急激に増加した防壁に手間取りましたけど、何とか目的の機能への割り込みには成功しました」

メガネの似合う科学者風の少女はディスプレイに映し出される膨大なデータと向き合いながら返答した。その間にも滝から流れ落ちる水のような速度で端から数式を確認しては、随時必要なプログラムを書き込んでいく。

中華風の少女はその返答に満足したのか、うんうんと楽しそうに頷いた。

「うむ。さすがネ」

「けど、本当に良いんですか？ 今は麻帆良祭……計画を控えた大事な時期なんですよ？ こんなに大きく動いてしまつたら今後の行動にも支障があると思いますけど」

「状況が状況ネ。このまま見過ごすわけにもいかんヨ。それに……」

「ふう……それに？」

全数式の確認を終えたメガネの少女は一息吐きつつ組み立てたばかりのプログラムを実行させた。それが無事に起動したのを見届けると、改めて中華風の少女に先を促す。中華風の少女は端正な眉を嘲笑に歪め、静かに、冷たく、言葉を紡いだ。

「異端殲滅、異教弾圧は私の目指す世界の対極にある思想ネ。特にHELLSING機関とイスカリオテ機関は今の内にある程度の戦力を削いでおきたいと前々から思っていたヨ」

理想の世界を実現する為に悪となる事を決意した少女は、ただ淡

々と答えていく。

黒曜の瞳に、轟々と燃え盛る怒りを込めて。

「イスカリオテ機関は、今回の襲撃の為だけに中東で大規模な紛争を起こしたネ。

タカミチ・Ｔ・高畑という戦力を麻帆良から遠ざける為だけに。自らの正義の赴くままに」

ギリツと。噛み締めた奥歯が軋む。

胸中に秘めていた憤怒の一端が、言葉と共に漏れ出した。

気を静める意味合いも兼ねて、中華風の少女は一度大きく深呼吸をする。

それで、何とか表面上だけは何時もの調子を取り戻せた。

「現状で、吸血鬼アーカードと神父アンデルセンを同時に相手取るのは難しいネ。

二人がバラけたまでは良かったが……決定打に欠ける。その為にも

「

そこでピイト。メガネの少女の眼前にあるノートパソコンから電子音が鳴る。

仕込みの成功を知らせる、始まりの福音が鳴り響いた。

「病院諸々の施設へのパイプライン確保、完了。緊急時の設定も完了しました。

これで、麻帆良全都市への電力供給をいつでもカットできます」

準備は整った。

さも愉快そうに中華風の少女は科学者風の少女の前に置かれたノートパソコンに手を伸ばす。

「麻帆良の最強戦力には、頑張ってもらおうかね」

少女 超鈴音はニヤリッと、悪役のように笑いながらEnte
「キーを叩いた。」

轟々と。八筋の銀閃が闇夜を奔った。

虚空を喰い荒らす雷の如く、慈悲無き白銀の雷は雷鳴に代わって
暴風を伴わせる。

一閃。二閃。三閃と。

絡まり合うようにして突き進む八つの銀閃は隔てる全てを等しく
薙ぎ払う。追隨する衝撃波は舗装された歩道をメチャクチャに掘り
起こしていた。ビュウビュウと鳴り響く風切り音は、蹂躪される大
気の悲鳴にも怨嗟のようにも聞き取れる。

不意に。銀閃の進路を遮るかのように黒色のクナイが放たれた。

投げ穿つ。ただそれだけを追求された流麗なフォームは無用な音
など引き連れず、無音の飛翔を可能にする。数瞬の間も無く、獰猛

極まらない銀閃と静かなる黒色は激突した。

キーンと。刹那の停滞も無く、ヤケに甲高い音を残してクナイは弾き飛ばされる。一方の白銀は止まるどころか進路を変える気配すら見せず、無心に虚空を駆け続けていた。

「むっ!？」

楓は渾身の投擲が容易く競り負けたのを見て取ると、即座に迎撃と防御を選択肢から除外する。後に残るのは一つの答え。即ち、回避。

楓は長身を猫のように撓らせると、側面に向かって形振り構わず大きく跳んだ。

傍目から見れば多少、大袈裟過ぎる躲し方ではあるが、それも楓の二の腕に浅く刻まれた裂傷を見れば押し黙ろう。楓は確かに銃剣を完璧に躲していた。なればこそ、これは追従する衝撃波による産物である。

(気も魔力も用いず、純粹な筋力と技巧のみでの投擲で、この威力！ 正に出鱈目でござるな！ これで良識を持ち合わす人物ならば素直に尊敬できるでござるが……)

楓は改めて敵対する存在の脅威を再認識する。

けれど。そんな余計な思索などを余所に、躰は次の行動へと移っていた。

流れ出る鮮血には一切頓着せず、楓が翻した掌には子供の背丈ほどもある大手裏剣が何時の間にか握られている。それを腕といわず躰全体を捻り上げ、全身の筋力を以って投げ放つ。鋭く澄んだ風切

り音が、武器も持たず、無防備に佇むアンデルセンへと一心不乱に飛翔した。

「はあああつー!!」

「失礼します」

それと同時に動と静の裂帛の鬨気が動いた。

大手裏剣を基点に刹那と茶々丸は左右に別れ、三方からの挟み撃ちを掛ける。

左右正面からの三方同時攻撃。

推し量ったかのようなタイミングには、些かのズレもない。

貰った。長年の愛刀である夕凧を振り上げながら刹那は思った。慢心ではなく、経験から。この攻撃を捌き切れるはずが無いと判断して。

腕をダランと無防備に下げていたアンデルセンは、彼我の距離が五メートルを切った辺りでようやく動きを見せた。腕を組むようにして両腕を交差させると、自らを抱き締めるかのように身を縮める。

あろう事か、眼前に迫り来る脅威を前にして貌すら深く懐に埋めていた。

刹那は僅かに訝しく思いながらも自身の遣るべき事に変わりは無いと無駄な思考を断絶させる。思考の片隅では、その程度で受け切れるはずが無いという答えも出ていた。一瞬の思案を経て、微かな疑念を抱きながらも刹那は夕凧を力強く振り下ろす。

そして ガキインと。鉄と鉄が打ち合う涼やかな音が夜道に響いた。

「な、に……!?!」

「……っ!?!」

その有り得ぬ結末に、刹那は思わず状況も忘れて呆然とした。

茶々丸も、声にこそ出さないが大きく目を見開いている。

二人はただただ啞然と、眼前の信じられぬ光景を凝視する。

アンデルセンは左右正面からの三方同時攻撃を完璧に防いで見せた。

茶々丸の正拳突きは左手で受け止め、正面の大手裏剣は右手の銃剣で弾き。

そして刹那の夕凧は 口に銜えた銃剣で。

「ほのせーどか《その程度か》? はへもの《化け物》」

不意に。アンデルセンは言った。

銃剣を銜えたまま、夕凧を鼻先に見据えたままで、頬を歪ませて然も愉快そうに。

ゾクリッと。刹那の内から怖気が走る。半身が、この場からの撤退を訴える。

桜咲刹那に内包された白翼の異端が、眼前の異端殲滅者に怯えていた。

その事実が、刹那から平静を奪い去る。

「こんなもので……っ!?!」

自らを奮い立たせるかのように激を飛ばして、刹那は強引に夕風を押し通そうと、いっその力を込めた。まるで、怯える子供が精一杯の虚勢を張るかのように。

「……………」

そんな刹那を見て、アンデルセンは一体何を思ったのか。不意に自ら、銜えた銃剣を吐き捨てた。

「え？」

呆然と刹那は声を漏らす。

均衡を失った夕風は、そのままアンデルセンの喉下へと一直線に吸い込まれ

「っ!？」

咄嗟に刹那は身を、腕を捻る。

強引な軌道修正のツケとして夕風は見当違いの虚空を風ぎ、無理が祟って腕を痛めた。アンデルセンは命の危機にあったというのに、まるで関心を持たずに冷めた瞳で無様な剣筋を描く夕風と、慌てふためく刹那の表情を眺める。

「ああ、そういうことかよ、クソツタレ」

ひどく無感情に、つまらなそうにアンデルセンは言い捨てた。

アンデルセンの右手が翻る。

逆手に持ち直した銃剣は刺突の型を以って刹那の喉を狙った。

ただ殺す為だけに繰り出された銃剣に刹那は息を呑み、反射的に

夕風で弾く。

いや、弾いたというよりも、弾かれた。

殆ど無意識で祿に力を込めていなかった為か、突き出された銃剣はピクリとも動かず、逆に刹那自身を僅かに動かす。通り過ぎる銃剣。首筋の薄皮一枚が斬られ、赤い線が一筋引かれる。それが、結果的に刹那の動揺を消し去った。

後手に回るのはここまで。

刹那は一瞬で意識を切り替えた。

先手を取らんと刹那は伸びきったアンデルセンの腕を押さえ即座に間接を決める。

見れば、片側の茶々丸も同様に腕を封じていた。

絶好の好機。すぐさま刹那は叫んだ。

「今です！ ネギ先生！ 明日菜さん！」

「まかせて！」

後方で待機していた明日菜は即座にアンデルセンの胸元まで疾走すると、最後の一步を力強く踏み込む。ビシリッと。舗装された地面に蜘蛛の巣状の亀裂が走った。

身を捻り、腕を捻り、限界まで勢いを乗せたまま、明日菜は右手に握るハリセン形態のハマノツルギを無防備なアンデルセンの顎先に叩き込む。

抗いようも無く、アンデルセンは天を仰いだ。

強化状態にある明日菜の一撃は常人にとって致命傷クラスの破壊力を秘めている。

だが、生憎と相手は常人ではない。故に手加減は必要なく、本命も別にある。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル！」

エウオカーティオ・ウアルキュリアルム
『風精召喚』

「コントウベルナリア・ゲラディアリア」
剣を執る戦友

迎え撃て『コントラー・プーグネント』『！！』

何十何百と繰り返してきたかのような滑らかさでネギは神秘を編む口上を口早に紡ぐ。現れた風の中位精霊八体はネギの容姿を模り、アンデルセンへと追撃を掛けた。

停滞無く突進する精霊達がアンデルセンに直撃する瞬間を見極め、刹那と茶々丸は同時に左右へと退避する。瞬間、弾けるような衝撃音が八度、並木道に木霊した。

全ての精霊の直撃をマトモに受けたアンデルセンの巨体が小石のように吹き飛ぶ。

一回、二回、三回。

水面に放られた小石のように地面を何度もバウンドして、最後には道の端の樹木に背中から激突する。余程の衝撃だったのだろう。細身の樹木は衝撃を受け止めきれずにミシミシと音を立てて折れ曲がり、根元から真っ二つに切り分かれた。

打って変わって、静寂が場を満たす。

五人は油断無く、倒れたアンデルセンを見据えていた。

「こ、これなら流石に決まったんじゃないの？」

「いえ、まだ油断は禁物です」

「同感でござるな。この程度で終わるとは思えないでござるよ」

明日菜の楽観的な見通しに茶々丸と楓が釘を刺すと、果たしてア
ンデルセンはゆっくりと身を起こした。コキコキと気だるそうに首
を左右に折る様からは、まるでダメージが見られない。

「恐ろしくタフ……というだけでは説明が付きませんね。これは、
やはり……」

「何らかの再生能力。あるいはマジック・アイテムを所持している
と考えられます」

「しかし、そうなると厄介でござるなあ」

冷静に対象を観察する三人は、一様に眼前の敵の対処に困った。
少なくとも、今の有様を見る限り、打撃は効果があるのかどうか
も疑わしい。かといって斬撃が有効なのかも首を捻らざるを得ない。
出会いた頭のクナイや手裏剣の傷を僅か数秒で完治して見せたのは記
憶に新しかった。

「でも、決して捕まえられない相手じゃありません」

沈鬱な空気が蔓延する中で、ネギは力強く告げる。

「確かに攻撃は効いてないかもしれませんが、僕たちの目的は倒

す事じゃなくて、あくまであの人を捕まえることです。さつきも動きは封じられましたし、この調子で頑張ればなんとかなるはずです」

『兄貴の言うとおりだぜ！　とりあえず縛り上げちまえこっちのもんだ！』

鼓舞するネギに習ってカモも息巻き、小さな前足を振り上げる。そんな小さな彼等を見て、少女達は穏やかに嘆息した。

「そうね。押ししてるのはこっちなんだし、全然焦る必要なんてないじゃない」

「今はペースを崩さず、堅実に攻めるのが上策ですね」

「そうと決まれば、陣形はこのままでいいでござるな？」

「はい。前衛は私と刹那さんが、中衛は楓さん、後衛は明日菜さんとネギ先生にお任せします」

四人は勇むネギに習い、各々の獲物を改めて構え直す。

しかし、その貌に浮かぶのは仲間への信頼に裏打ちされた不敵な笑み。

これもまた一つの才能なのだろう。

ネギの前向きな姿勢が、知らず知らずのうちに場を纏め上げていた。

戦闘の場ながら、どこか柔らかい空気が広がっていく。

協力して、眼前の敵を確保する。その志の下に統一されて。

そんな彼等の捕まえるべき対象は。

「 つまらん」

ただ一言で、この生温い空気を切り捨てた。

「つまんねーな、おい。貴様らは、つまらなすぎる。敵を眼前に温過ぎるんだよ」

いつにも増して粗暴な口調で、アンデルセンは五人の敵「モドキ」を睨み据える。

眼光に轟々と燃えていた狂気の色は既に無く、まるで道端の小石を見ているかのように冷め切っていた。真実、アンデルセンの瞳には人型の石が五つ無様に並んでいるようにしか見えていなかった。

「殺意も無く、狂気も無く、身を焼き尽くす敵意も無い。何もかもがお粗末過ぎる。幼稚園のお遊戯ですらない。赤ん坊の喚き声の方が心地良い。ぴーちくぱーちく鳴いて喚いて喧しい。全てが全て、気に障る」

ゾルウト。這い出るようにアンデルセンの胸元から銃剣が落ちた。一本ではない。一つの鎖に等間隔で繋がれた銃剣の束はジャラジャラと耳障りな音を鳴らしながら、其処彼処の地面に突き刺さる。

ネギ達は異質な凶器の登場に、そしてアンデルセンの変質に警戒を強めた。身を刺す威圧感は一瞬で消滅した。だというのに、背筋を這い回る悪寒は刻一刻と増すばかり。

「喜べ。この私が、13課が、貴様らに本当の闘争の何たるかを教

育してやるっ」

そして、アンデルセンは動いた。

鎖を握る右手が大きく撓る。それに連動して、鎖全体が蛇のような波を描き、繋がれた銃剣が土くれを巻き上げながら空を舞い踊る。

「来ます！」

刹那の警告を皮切りに、鞭のように鎖が軋みを上げて五人へと襲い掛かった。

追隨する銃剣は須らく獲物に刃を向け、柔らかい肉を喰い破り、骨を断ち切らんと鈍く妖しい輝きを放つ。

五人は散会し、狙いを逸した銃剣の束は歩道を滅茶苦茶に破壊する。あまりにも単純な仕組みの武器でありながら、その凶悪さは目を見張る。もしもマトモに受ければ肉は抉られ、骨は断ち切れ、肉体は原型を留めないだろう。しかし、いくら破壊力があるうとも所詮は線の攻撃。点を穿つ銃剣の投擲に比べれば、躲すなど動作もない。

一閃。夕風 of 煌めきが虚空に一筋の白線を刻んだ。

断ち切ったのは鎖そのもの。気を介す斬撃の前には単調な鎖など物の数ではない。

「先行します。援護を」

返答を待たず、刹那は瞬動を用いてアンデルセンに肉薄する。

切り分かれた鎖の先端が地に着くよりも疾く、峰を以って渾身の一撃を放つ。

神鳴流奥義 斬岩剣。

気によって強化された刀身は強固な岩すら容易く両断する。アンデルセンは空いている左手で二本の銃剣を夕凧に合わせるが、纏めて粉碎された。勢いをそのままに振り下ろされた夕凧はアンデルセンの肩先に飲み込まれる。

ベキリツと。骨を砕く嫌な感触が夕凧を通して刹那に伝わった。

しかし、刹那は頓着する事無く、第二撃を放とうと野太刀を引く寸前に、大きく無骨な左手が、刹那の手首を掴んだ。肩が粉碎されたにも関わらず、その力強さには些かの衰えも見えない。

「だからよお、違っただろおが」

丸い眼鏡の向こう。輝く双眼は苛立ちを交えて吐き捨てる。

「何を……っ！」

アンデルセンの意図が分からず、刹那は戸惑いの声を上げ掛けた。だが、側面から迫る茶々丸を視界の端に捉えて迂闊な愚考を切り捨てる。

湧き上がるのは己への叱責だ。

（何を考えているんだ、私は！ 今は一刻も早く距離を取るべきだろっ！）

手先だけで野太刀を放り、持ち手を入れ替えると再び峰で思い切りアンデルセンの左手を打ち付ける。このまま斬り捨てても良かったが、ネギと明日菜の手前もあり、なるべく凄惨な光景は見せたく

なかった。

如何にアンデルセンの腕力が強靱であるとも、人体である以上は避けられぬ急所というものが確実に存在する。刹那が打ち付けたのもその一箇所、僅かにアンデルセンの拘束が緩んだ。そこに茶々丸が上段蹴りをアンデルセンのテンプルに決める。

ダメージはさほど期待できないが、今は脳を揺らすだけで事足りた。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル！」

『風の精霊17人』セブテンデキム・スピリトウス・アエリアーレス』

縛鎖となりて『ウインクルム・ファクティ』

敵を捕まえる『イニミクム・カプテント』

魔法の射手 サキタ・マギカ 戒めの風矢 アエール・カフトウーラエ 『！』

離脱した刹那の耳に、後方からネギの詠唱が届く。

風の拘束魔法。それで、この場の戦いは終わる。

不意に、アンデルセンは半ばまで寸断された鎖を刹那と茶々丸の方へ投げつけた。

「悪足掻きを！」

気合一閃。刹那は刃先を向ける銃剣ごと鎖を斬り捨てる。滑らかな切断面を輝かせる銃剣の剣先は虚空に散乱し、鎖もまた結び目が解かれてバラバラに飛び散った。

その時だ。銃剣の柄の先端が、煙を吹いているのに気づいたのは。

「っ！ この反応は」

「楓！ ネギ先生と明日菜さんを！！」

咄嗟に後方の三人へと叫んだ刹那の声は、続く轟音に掻き消された。

爆風が周囲の木々を吹き飛ばし、辺りを滅茶苦茶に破壊する。モクモクと立ち込める粉塵の最中、佇む影が二つあった。

刹那とアンデルセンだ。

けれど、二人の様相は対照的であった。

刹那の着込む制服はボロボロな布切れに変わり、露出する肌は一樣に火傷や切り傷などで傷ついている。額から少くない血を流している様はひどく痛ましいものだった。対するアンデルセンはコートこそ破けて煤が付いているものの、怪我らしい怪我は見当たらない。先程、刹那が粉碎したはずの肩ですら、既に完治していた。

「くっ……！！」

粉塵が流れ、隠れていた刹那の右腕が明らかになる。

そこには、一本の銃剣が肩を深々と貫いていた。

爆発に紛れてアンデルセンが投げ付けたものだ。

ジクジクと躰が鋭く痛み、額からは脂汗が噴き出して頬から顎へと滴り落ちる。

（ネギ先生は……他の皆は無事なのか？）

刹那は自らの傷よりも仲間の安否が気に掛かり、痛みを堪えながら厳しく周囲を探った。

「茶々丸さん！？ 大丈夫ですか！？」

「刹那さん！ どう！？」

二人の声が聞こえてきた。

どうやら茶々丸も損傷したらしく、ネギの声は切実な憂いを帯びている。

「私は……大丈夫です！ 粉塵が晴れるまでは、下手に動かないでください！」

痛みで掠れそうになる声を必死で抑え、刹那は気丈に言い放つ。そして銃剣の柄に手を掛けると、躊躇無く一気に引き抜いた。

「ん、あつ！」

あまりの激痛で意識が飛びそうになる。

傷も然る事ながら、銃剣に施された祝福儀礼が刹那の内なる異端を蝕んでいた。

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

刹那は荒れる息を整えようとするが、まるで肺は受け付けない。どうやら肋を何本か痛めたらしく、鈍痛が全体に重く押し掛かっていた。

それでも、決して膝は折らない。

口内に溜まった血を吐き捨て、両手でしっかりと夕凧を構える。思考にノイズが混じるものの、それを制して刹那は冷静に現状を分析する。

(この男は、確かに回復能力と身体能力こそ厄介だが、それ以外は眼を見張るべき箇所は無い。戦力的には、まだ五分以上……だが、現実には押されているのはこちら)

その理由に、刹那は今になってようやく気づいた。眼を逸らしていたものに気づいてしまった。

(殺す覚悟の差、か)

アンデルセンの攻撃の全ては命を奪うべくして放たれている。対して刹那達は決意こそ乗せてはいるが、必殺には程遠い。それでは遠からず戦力の拮抗は崩れ去り、後は済し崩しに一人ずつアンデルセンの凶刃に斃れるだろう。

そう、このままでは、いけないのだ。

ネギを、明日菜を、楓を、茶々丸を殺させない為には。その思いが 刹那に、ある一つの決意をさせた。

(重荷は、私が背負う)

バサツと。鳥の羽音が刹那の背後 否、背中から響く。

刹那は自らの本当の姿を曝け出し、純白の翼を背負っていた。その姿を見て、ようやくアンデルセンは狂気の笑みを貼り直す。

「それが貴様の本性か、化物」

「……………」

刹那は、答えない。

油断無く夕凧を構える姿からは今までに無いもの　殺意が、溢れている。

「そうだ。それでいい。化物は化物らしく、俺を殺しに来るべきだ。化物は化物らしく、化物らしい姿でいる。なあ、化物。化物である貴様が化物らしく俺と殺し合う。それが人間と化物の真なる闘争だ。ここからが、ようやく本番だ」

「……………」

刹那に表情は無かった。

無心に、無表情に、感慨無く、どうすれば効率良く眼前の敵をせるのかだけを思案する。それ以外の感情を塞ぎ止めて、自らを一種の人形へと作り変えていった。

勝負は、一瞬でつく。

それだけの緊張感が、場をギスギスと軋ませる。

最早、二人には眼前の殺害対象以外何も見えていない。それ故に、世界樹広場から立ち上る膨大な魔力の衝突にも、二人は何の感慨も抱かなかった。

不死の血族

闇が生まれた。

水面に堕ちた滴のように、暗闇に出でた波紋は極小の波として広がっていく。

緩やかに。緩やかに。緩やかに。そして艶やかに。

溢れ出る闇の濁流は外へ零れる前に内へと凝縮され、空のタンクを満たしていく。

世界が、震える。

大気が、慄く。

一秒一秒が薄く引き伸ばされ、風音が音信おとずれを醸し出す。

ただの風音が重低音のそれへと変わり、まるで福音を打ち鳴らし
ているかのよう。

不意に風が止んだ。不自然なほどピタリと凧になる。

福音も、今は、もう聞こえてこない。

今、この場に鳴り響くのは 禍音が奏でる戦慄のみ。

異変は顕著に訪れた。

その時、黒髪の少女を模ったアーカードは指先に絡まる生暖かい鮮血をクチャクチャと弄んでいた。幼い外見に似合わぬ艶笑で白磁の頬を仄かに上気させながら、法悦に浸っている。ツンと鼻腔を擦る甘美な血の臭いに牙が疼いた。ポタポタと滴り落ちる鮮血がひどく勿体無くて、今すぐにも齧り付いて思うが俛に喉を潤したい。

けれど、それはダメだ。寸での処でアーカードは自身を戒める。

愛しく恋しい好敵手の要求をアーカードは護らなければならぬ。エヴァンジェリンは血液の譲渡を、魂の通貨の共有を頑なに拒んでいた。

なればこそ、アーカードは欲求を胸に秘めたまま、エヴァが事切れるのを静かに待っている。

気丈な輝きに満ち溢れていたエヴァの蒼い瞳は光を失い、まるで人形のガラス玉のようだ。余命は、後数秒といったところだろうか。それで悪しき大魔法使いの伝説は終わる。終幕を迎える。たった一匹の化け物に看取られ、後はただ塵へと返るのみ。

そのはず、だった。

フツと。何の前触れも無く街灯から明かりが消えた。

否。それだけではなく、世界樹の傍らから見渡せる麻帆良の街から光が一樣に引いていく。取り残されたかのようにポツンポツンと疎らに燈る光源は、アーカードは知る由も無いが、病院など一部の

非常施設だけ。本当に最低限、麻帆良を維持する為に必要な設備のみを残して、この街は完全に沈黙した。

急な趣に興味をそそられたのか、アーカードはキョロキョロと視線を巡らす。

深淵の眼には場の変質に対する懐疑の色は窺えない。
ただ、嬉々として好奇の闇に染まっていた。

可憐な少女の外見相応の仕草で辺りを探るアーカード。己の好奇心に夢中になるあまり、アーカードは迂闊にも眼を逸らした。逸らしてしまった。

この場に在る、もう一体の同胞から。

不意に。アーカードの腕に細い指が絡まった。

爪に塗られた赤黒いマニキュアが、乾いた血のような光沢を以て存在を強調している。

「

アーカードの瞳から、喜悦がスウと引いた。

能面のような無表情で自らの腕を、指の先を仰ぎ見る。

鮮血に染まり、臍に埋もれる腕。

細首に絡められ、締め上げる指。

その更に先にある幼き美貌の瞳は　しっかりと、輝きを持って見開かれていた。

鬼の如く縦に割れ、黒白が反転した眼球と視線が絡み合う。

「　いつまで、人の躰に風穴を開けているつもりだ？」

ゴキヤツと。肉が弾け、骨が粉碎される嫌な音が広場に満ちた。その音源は、二人の中間。エヴァの鮮血に濡れるアーカードの腕から。

いや、それは最早、腕ですらない。

細指に容易く握り潰され、圧壊されたソレはただの腕だった肉塊に過ぎなかった。

エヴァの姿が無数の蝙蝠へと変わり、闇に紛れる様にして形を無くしていく。

幾重にも残響する羽音は、次第にアーカードの後方で集り出した。

「……………」

最早、言葉は要らず。

上げた腕をそのままにアーカードは振り返る。

其処には 無然と腕を組む、エヴァの姿。

腹部に開いていた風穴は綺麗に塞がり、今は名残として衣服に丸い穴を残しているのみ。その姿を見据えて、アーカードは懐かしむように瞳を細めた。

「懐かしいな、その姿は。見せ掛けだけでなく、中身も昔に戻ったようね」

「どうやら、そのようだ。

大方、どこぞの誰かがいらぬ打算でも働かせたのだろうよ」

そう吐き捨てるエヴァは見るからに不機嫌そのものであった。
封印の枷から解放された爽快感よりも、その背後に在る思惑に苛
立ちを募らせる。

（じじい……ではないな。増援を警戒すべき状況でわざわざ学園結
界を解くなど、あのじじいに限ってはありえん。例え学園周辺の安
全を確認できたとしても、万が一の可能性を除外するほど迂闊じゃ
ない。だとすれば）

エヴァの脳裏を掠めるのは、一人のクラスメイト。

どこか怪しい雰囲気を携える麻帆良一の天才。

名を超鈴音。

（奴の差し金か。動くのは学園祭辺りと踏んでいたのだが……よほ
ど、この人でなし共が気に入らないらしいな。尤も、奴のことだ。
ここまで大胆に動く以上、魔法使いは元より、増援に対する警戒も
施しているのだろう）

どこから現状を予見していたのかは定かでないが、少なくともエ
ヴァの封印を解くのは予定の範疇であると見て間違いない。エヴァ
がその後取る行動もまた、超にとつての予定として組み込まれて
いるのだろう。思わず、エヴァは口元を歪めた。

「喰えない奴だ。まさか、この私を道化ヒエロに仕立てあげるとはな

後で盛大に礼をしてやろうと心に決めて、エヴァはあえて超のシ
ナリオに乗った。

どちらにしろ、殺る事に変わりはないのだから。

「さて、予想外もいいところだが、こうして嘗ての魔力を取り戻した。」

期せずして、さっきまでの小競り合いは前哨戦となったわけだ」

「ふふ、では早速、本番を始めるの？ 私はいつでも構わないぞ？」

「私も構わん。が、その前に いい加減、その温い姿を止めろ」

エヴァから溢れる桁違いの殺意がアーカードの身を焼き尽くす。それが心地好過ぎて、アーカードは興奮に躰が熱くなってきた。

「おや？ さっきも言ったと思うけど、コレも私でアレも私だ。どんな姿になろうとも、私が私であることに変わりはない。それともこの私では殺り難い？ 女子供は殺さないというポリシーを持っていると聞いたが、それを私に適用するのはいただけないね」

「ハッ！ 誰が貴様なんぞに遠慮などするものか。私が言っているのは見た目の話ではない。貴様の中身の話をしている」

「ほう？」

「生憎と、束縛の術には縁があるのでな。貴様を雁字搦めに縛り付けている術式には当に気づいていたさ。さっきまでは私も魔力を封じられていた状態で、条件は五分だった。だが、こうなった以上、貴様も全力で掛かって来い。何より、力の出し惜しみは私への侮辱以外の何物でもないぞ」

「ふむ。相も変わらず誇り高い。必要であれば用いるさ。望むのならば、それだけのものを私に見せるのだな」

肩を竦めて嘲るアーカードはエヴァの要求を一蹴する。

エヴァは改めて不快げに眉を寄せて、おもむろに不敵な哄笑を口元に刻んだ。

「随分とでかい口を叩くものだ。貴様とて、まさか忘れたわけではないだろう？」

キーンと。氷を軽く叩いた様な澄んだ音がエヴァの右手を中心に音色を響かせる。

エクスキューショナー・ソード。

気体を無理矢理に相轉移させることによって、極大の破壊を齎す『死刑を執り行う剣』だ。息を吸うかのように自然な動作で発現させた剣だが、その難易度は極めて高い。エヴァほどの術者でなければ扱う事も出来やしない。

これだけを見ても、如何にエヴァが魔法使いとして桁外れの実力を有しているのが推し量れた。エヴァが感触を確かめるかのように極低温の刃を虚空へ軽く振るう度に、軌跡には魔力の残滓が雪のように零れ落ちる。残滓が地に落ちて消える最中。

「三十年前、私に手も足も出ずにバラバラに引き裂かれ、氷漬けにされたのを」

エヴァは隠そうともしない嘲笑を口元に貼り付け　アーカードの拉げた腕を斬り飛ばした。

「っ!？」

接近の予兆すら掴むことのできなかつたアーカードは、極低温の刃が肩口を蒸発させる激痛でようやく何が起こったのかを理解したけれど。その間にも魔剣は三度翻り、瞬く間に残る四肢を破断する。

「……………っ!！」

呻き声を上げる暇すらない。

文字通り芋虫にされたアーカードは脚という支えを失って地面に墮ちる。

その寸前で、長く艶やかな黒髪を乱暴に掴まれた。

「これで分かつただろう？ 今の貴様では、今の私の相手にならない」

未だ大気を侵食する極低温の剣を現出させたまま、エヴァは無表情に言う。

「三十年前は私も僅かに遊びを挟んでいた。久々の同属との会合に興じてな。

まあ、貴様の言葉で心が揺さ振られたのは認めてやる。実際に糸使いの男を仕留められなかったのは私の失態だ。けどな……今の私には遊び心も迷いも無い」

冷血な眼差しは、何の感慨も抱かずに無様なアーカードを見据えている。

「確かに貴様の再生能力は私から見ても次元が違う。マトモに戦えば苦戦は必至だろう。だが、それだけだ。パワー、スピード、技巧、再生能力以外の全ての面で、私は貴様を遥かに上回っている。冷静

に戦えば、私の敗北など万に一つとてありえん」

だから、と。

「エヴァは優しく告げる。

「さつさと本気を出せ。でなければ 首だけにして、永久の凍土に幽閉するぞ?」

不意にエヴァはアークカードの黒髪を離す。重力に従って墮ち行くアークカードの体躯は、横合いから加えられたエヴァの蹴撃によってボールのように弾け飛んだ。

「……ッ!？」

苦悶と喜悦を織り交ぜた悲鳴を引き連れ、アークカードの体躯は空を翔る。

そうしてアークカードは、常人では一筋の閃光としか移らぬであろう猛烈な勢いで世界樹に激突した。

「ぶん……」

結果に興味を示さず、つまらなそうに鼻を鳴らしたエヴァは、不意に声を聞いた。

「拘束制御術式。第三号、第二号、第一号、開放」

闇の祝詞が響く。

甲高い少女の声で。逞しい青年の声で。しわがれる老人の声で。

世界に出てはいけないナニかが、意気揚々と謳っている。

ゾクリと。エヴァは這い寄る悪寒に、年相応の少女のように身を震わせた。

際限無く吹き出る瘴気に犯され喉が渇く。眼が、溢れ出かける闇に釘付けになる。

祝詞は、続く。

「状況A。『クロムウエル』発動による承認認識。

目標、敵の完全沈黙までの間、能力使用限定解除開始」

そして、ソレは膿まれた。

闇の濁流が世界樹を覆う。

生命の象徴とも言うべき偉大なる樹木を醜悪な闇色で染め上げていく。

樹木の表面は腐り落ち、青々しい葉々は色を失くして頂垂れる。

ザワザワと風に揺らされる枝々の掠れが、悲鳴のように広場を満たした。

声も無く、エヴァは夜空よりも暗い深淵の闇を見上げていた。

恐怖が、胸を蝕む。

畏怖が、躰を諫める。

そして幾許かの畏敬が、胸を熱く焦がした。

立ち上る闇を観よ。

あれこそが闇の眷属。夜に生きるモノ。陽に背を向けるモノ。悪食となりて全てを喰らい尽くす暴虐の死徒。

完全で、完璧で、完成された　　本当の、バンパイア。

「これが　人間を止めた、本当の吸血鬼、だと……？」

掠れ声で呟くエヴァの胸中には、既に鼻持ちならない同属に対する嘲りは消えていた。むしろ、吸血鬼としての自らの矮小さをはっきりと見咎められているかのようで、ひどい虚無感が胸を過ぎる。

闇に『眼』が現れた。

幾十、幾百、幾千、幾万　　数を増し続け、その全てが虚像のよ
うにエヴァを射抜く。

闇が、口のように震えた。

「では、大魔法使いよ。教育してやろう。本当の吸血鬼の闘争というものを」

闇の頂点に人型が現れ、拘束着に包まれた男性のアーカードを形作る。

その手に握られるのは、こんな暴虐そのものだというのに、黒と銀の二挺拳銃。

エヴァは震えていた。どうしようも無いぐらい震えていた。

ブルブルブルブルと産まれたての小鹿のように震えていた。

武者震いを、していた。

「……上等だ。私を誰だと思っている！」

我は『闇の福音』！ エヴァンジェリン！！ 闇の福音を奏でる者！

たかだか汚らしい闇の一つや二つ、造作も無く懐柔してくれるわ
！！」

咆哮は爆発的な魔力を呼び、闇から溢れ出る瘴気が魔風によって吹き飛ばされる。

矮小と侮る無かれ。その身は伝説。究極と呼ばれし闇の大魔法使い。
い。

確かに吸血鬼という在り方であれば『不死の王』に劣っていよう。

しかし、その身は吸血鬼であると同時に魔法使い。

理を以って呪を紡ぐ者。

闇を従え、闇を支配する王者。

「懐柔だと？ この私を？ お前が！？」

お前に出来るのか？ 我が主と同じ高みにまで登れるのか？
どうなんだ、エヴァンジェリン！？」

「はっ！ 貴様のような駄犬の世話は慣れてるのでな！

精々調教してやるさ！！」

牙を打ち鳴らし、吼える二匹は闇を轟めかせながら魔力を躍らせる。

不死王と魔王。

人間からそう形容される吸血鬼達は自らブレーキを壊して、停止する事を早々に放棄した。もう、生半可な介入では止まらない。どちらか一方が斃れるまで、血肉が舞い、嘲笑に塗れる殺陣は終わらない。

「エえええヴァああああンジエリiiiiiiiiンつつつつ!!!」

「アああああああ力ああああああドおおおおつつつ!!!」

二人は獰猛に喉を震わせ、頬を歪め、口先を吊り上げ 互いの名を鮮烈に叫び合いながら、最後の殺し合いに挑んだ。

世界樹の傍らで行われる激闘は、時を置かずして学園長にも知れる事となった。

「この魔力は……学園結界が解けた事で、エヴァンジェリンの束縛が解かれたか」

浅く溜め息を吐きつつ、学園長は事後処理の予定を早速組み立て始める。

本来ならば、図書館島に住まう大司書に正体を秘匿した上で助力を請うつもりであった。しかし、こうなった以上、既に勝敗は決したと見て間違いない。如何に『不死の王』と言えども、伝説に謳われる悪の大魔法使いに及ぶとは到底思えなかった。だが、次いで膨れ上がる悍ましい魔力に学園長は眉を顰め、眼光を鋭くする。

「なんじゃ……エヴァンジェリンのものではない。とすると、HE LLSING機関の……」

長い時を生きてきた学園長でさえ、ここまで禍々しい魔力など感じたことはない。

改めて、学園長は麻帆良に現れた者の規格外さを噛み締めた。ふと、再び通信端末が鳴っているのに気づいて回線を開く。

『学園長！』

聞こえてきた声は弑集院のものだった。

「今度は何じゃ。わしはもう何が起きても驚かんぞ」

先程からエヴァとアーカードが激突する魔力の奔流が学園全体を覆っている。

神話さながらの戦いを再現しているのだから、大抵の事では驚けない。

『そ、それが……』

式集院は僅かに言いよどみ、一息に言い放った。

『イスカリオテ機関長エンリコ・マクスウェル、それからヘルシング機関局長インテグラ・ヘルシングから連絡が！ 早急に学園長と話をしたいと、通話での会談を打診してきています！！』

思わず、学園長は机上に崩れ落ちた。

会談

月は高く、下界の喧騒など無関心に天空から銀の光を降らせ続ける。

古来より魔性と称される月光は、心成しか平素より冴え渡っているように見えた。

サワサワと。サワサワと。

月光は儂げに地上を照らす。

ヒトの慈しみの陰を暴くかのように。バケモノの真正を煽るかのように。

ただ、其処にあるだけの月が、こうまで狂おしく地上を乱す。それは此処も、この空の只中も一切合財変わらない。

「こッ、こんな所に居られましたか、少佐」

不意に一つの声が夜風に乗った。

ヒヨロリと伸びた長身が、月光を浴びて影を作る。

高度にして四千メートル。飛行船の鋼板に轟々と吹き荒ぶ旋風は身を切り裂くかのように厳しく、根っからのインドア派である男には些か以上に過酷な環境であった。

「月を見ていた。こんなにも綺麗な満月だ。きっと奴も口先を真つ二つにしてニヤけながら見上げているだろう。そう思つともつともつと間近で見たくなつてしまった」

答える男はクツクツと喉を鳴らす。脂肪に覆われた腹が服越しに揺れた。

矮小で小太り。一見して不格好な成り立ちの男は、しかし突風を意にも介さず直立姿勢を崩さない。まるで一本の鉄柱が頭上から足先まで貫いているかのような有り様は、この男が一介の軍人であるという想像し難い現実を様々と周囲に知らしめているかのようにだった。

「それで何のようだ、博士」

「え、ええ。粗方の準備が終わりましたので、その報告に。少々のトラブルはありましたが、まあ、然して問題も無く、計画は次の段階に移行しました」

「トラブル？」

背で問い返す上官にドクは覚束無い足取りのまま答える。

「ネズミが何匹か潜り込んでいたようでして……捕まえる最中に何人が負傷したと。」

交戦した者の報告だと、奇妙な魔法のようなものを使用していたらしいですが」

魔法。その単語に男はニタアと醜悪に頬肉を持ち上げる。

「魔法使い。ようやくか。これで役者は揃ったな」

「はい。後は少佐殿の号令さえあれば全てが動き出します。カチカチと歯車のように」

「よろしい。ならば大隊戦友諸君を司令所に集める。決起集会を行う」

「では、いよいよ！」

氣勢を上げるドクに、男はゆっくりと片手を掲げた。

「のろしを上げる。火元を焚け。業火のように」

「は、はいッ！ 直ちにリップバーン中尉に出撃命令を！」

ドクは喜色に歪んだ面持ちで踵を返すと、足元の頼り無さすら忘れて鋼板を飛び出そうと勇み込む。しかし、飛行船の内部に踏み入る直前、風の慄きに紛れるように男の声が耳朶を打った。

「ああ、それと捕らえた魔法使い諸君も連れて来い。みんなと一緒に戦争嫌いの魔法使いに、捕らえられた斥候の末路を教授してやるうじゃないか」

幾許かの時を経て、千人の戦友の前に立った男 大隊指揮官《少佐》は言う。

「諸君、私は戦争が好きだ」

凱歌は鳴った。

歌は夜風に乗って流れ逝く。

後はただ、小石が崖から転げるように何処までも何処までも墮ちるだけ。

それは麻帆良で起こる鬪争の、ほんの一日前の出来事だった。

麻帆良学園女子中部エリアに在る学園長室。

学園の各所で魔法関係者が忙殺される最中、此処だけは平素通りの静けさで満たされていた。

「
」

学園長は事務机に深く座したまま、身動き一つせずに延々と瞑想を続けている。

その特徴的な外見と相俟って、さながら石山で座禅を組む仙人のようだ。

（ 静かだ。不気味なほどに ）

唯一、同席を許された式集院光は室内を漂う異様な空気をそう評した。

麻帆良を騒がす両機関からの打診を受け、急遽行われることになった今回の会談。

その準備を一手に引き受け、的確に運営することが式集院に下された任務だ。

本来なら、式集院は麻帆良を停電に追い込んだハッカーの位置情

報を特定する陣頭指揮を執るべき立場にいる。相手の正体や意図が不明な最中で現場を放棄するのは手痛い、それ以上に現状を好転させる糸口を掴む方が先決であった。

（準備は万全だ。いつでも会談は始められる）

用意自体は実に簡単なもので、必要な機材の設置は十分と掛からずに終わった。

学園長の事務机には左右に二つの中型ディスプレイと学園長を映す為の一台のビデオカメラが並べられている。

これは先方 HELL SING 機関がテレビ会談を強く要望した結果だ。

学園長としても、此度のエヴァンジェリン討伐を命じた怨敵の顔を拝むのには是非もなかった。二つ返事で了承の意を示し、イスカリオテ機関もこれを受け入れた。

（声を聞いた限りでは、若い女性と男性のものだったが……）

何はともあれ、あと数分で相手の正体は明らかになる。

式集院の手元に置かれたノートパソコンはディスプレイと連動して映像を映し出せるように回線が繋がっていた。学園長を映すビデオカメラも同様に繋がっている。

映像に不備があった場合や、先程のハッカーが再度の攻撃を仕掛けてきた際に対処するためだ。

（無事に終わるといいが……今も行われている戦闘も含めて）

こうしている間にも危険に晒されている子供達を思っつか、式集

院は憂いに表情を曇らせた。祈ることしか出来ない己の身を齒痒く思つ反面、なればこそ課せられた職務を全うすることには些かの余念も無い。

そして 遂に時は来た。

不意に学園長は瞑想を解くと、壁際に掛けられた時計の針を確認する。

現時刻は、午後九時五十九分。
指定された日本時間での十時まで、残り一分を切った。

「そろそろじゃな……」

小さく呟き、学園長は向かいのソファに腰掛けている式集院へ軽く目配せする。

式集院は力強い相槌と共に機材の最終チェックを始めた。
秒針が、十を指し示す。それに呼応して、学園長はゆっくりと息を吐いた。

刻は進む。九…八…七…六…五…四…三…二…一…零。

『時間だな』『時間だね』

ディスプレイに光が灯ると同時に、まだ歳若い男女の声が異口同音に響いた。

『さて、改めて自己紹介させてもらおうかな？』

法皇庁特務第十三課イスカリオテ機関長エンリコ・マクスウェルです。

どうぞよろしく、麻帆良学園理事長兼関東魔法協会理事、近衛近右衛門殿』

『英国国教騎士団HELLSING局長サー・インテグラ・ファルブルケ・ウインゲート・ヘルシングだ。急な会談を受領して頂き、まずは感謝の念を贈らせて頂こう』

ディスプレイ越しの二人は、まるで学園長と自分の二人しか会談の場にはいないかのような振る舞いで言い切る。心底から、学園長以外はどうでもいいと言外に語っていた。学園長もそれを察知していたが、あえて触れるまでも無いと結論付けて、それよりも話を先に進める事を選択する。

「……要件は検討が付いておる。エヴァンジェリンについてじゃな？」

此処に来てまでエヴァが麻帆良に滞在している事実を隠蔽する無意味さを悟ってか、学園長は自ら核心へと踏み込んだ。

交渉とは、後手よりも先手を取り、話の流れをコントロールできる立場に身を置く事が肝心であると、学園長は長年の経験から知っていたのだ。

『エヴァンジェリン……？』

しかし、男性　マクスウェルは声の端に疑問を織り交ぜる。

それどころか顎先に手を添えて思案に沈みだした。

数秒ほどの沈黙を経ると、マクスウェルは唐突にパツと頬を綻ばせ、まるで難問を解いた数学者の如く朗らかに言う。

『ああ！　エヴァンジェリン、エヴァンジェリンね。いたな、そんなのも』

「なに……?」

不審がる学園長に対しても、あくまで愉悦を隠さずにマクスウェルは続ける。

『なるほど、なるほど。つまり、まだクソ吸血鬼は健在なわけか。ふん、アンデルセンともあろう者が、一匹程度に随分と梃子摺っているようじゃないか。それとも、足を引っ張る鈍重な狗にじゃれ付かれてもしたのかな?』

『アーカードのことだ。狂信者に目移りでもしたか、旧知の相手を前に遊んでいたのだらう。どちらにせよ、そんなどうでもいい話に時間を割いているほど私は暇ではない』

「……………」

あまりと言えば、あまりの言い草に、ようやく学園長は理解した。彼等は、既にエヴァが塵に返ったという前提で会談に応じているのだと。

今なお健在なエヴァに少しだけ驚いているだけで、それに関しては彼等の言葉通り本当にどうでもいい事なのだろうと。

理解した瞬間、学園長の心魂で血液が沸騰せんばかりの憤怒が激しく渦を巻いた。

この麻帆良の平穏を喰い破っておきながら、大切な生徒を傷つけておきながら、それを一切合財棚上げし、拳句の果てには『どうでもいい』と言い切るとは何事かと。

「では、一体なんのようがあって会談など要請した」

低く抑えた声は、獣の唸り声にも似ていた。
会談をそれとなく聞き届けていた弑集院も、あまりの変化に身を
竦ませる。

姿の有無など関係なく、ただ声だけで聴く者に畏怖と畏敬を刻み
込む風格は流石と言えよう。けれど、その程度では人外魔境を住居
とする二人にとって、今まで通りと変わりない。訊かれたから応え
るだけ。それだけの気楽さを以って、マクスウェルは返答した。

『なに、大した事では無いですよ。
ただ、アンデルセンに即時帰還命令を伝えて欲しい』

「なっ!？」

思わず、弑集院は声を上げた。

数多の要求をシミュレートしていたが、これは予想の埒外である。
学園長は弑集院を一瞥して黙らせると、低い声音で返した。

「……理由を、聞かせてもらえんかね？」

『理由？ これはまた、おかしな事を聞くものだな。我々が異端を
滅ぼす刃を鞘に戻す。ならば、その意味する事は一つしかないだ
ろう？ ああ、それとも何故わざわざ貴方をお願いするのかという
意味かな？ 実はアンデルセンの奴、通信機器を壊してしまったよ
うでね。連絡が取れないのですよ』

「……………」

言い分は、腹正しいが理解できた。

つまり、新たなターゲットを見つけたという事であろう。

そのため組織の切り札たるアンデルセンを呼び戻したいが、連絡が取れなくなってしまうた。要はメッセンジャーとして働くとマクスウェルは言っているのだ。

しかし、闇の魔王とまで謳われた真祖の吸血鬼を放置してまで、なお優先する相手など学園長にはトンと心当たりはない。そもそも想像すら難しいほどだ。学園長の困惑を余所に、インテグラは瑞々しい唇を滑らせた。

たった一言、マクスウェルに問う為に。

『どこまで知っている？』

なればこそ、マクスウェルも簡潔に応じた。

『どこまでも。それよりいいのか？ 我々以上に急がなくてはならない貴様等が悠々と会話に興じて。海上のコンサートは既に幕を開け、手招きしていると聞くが？』

『ふん』

インテグラは不愉快さを隠しもせず鼻を鳴らした。

他を圧する為だけに磨き上げられたナイフのような眼光を学園長へと飛ばす。

『HELLSING機関の要求は唯一つ。アーカードに即時帰還命令を伝えてもらいたい』

「……………」

明らかな異常事態であった。

世界に名を轟かす異端殲滅の二大機関が、異端の代表格とも言える真祖を放置してまで優先しなければならぬ十二か。老骨に沁み込むようにして、久しく忘れていた感情が芽を覗かせる。急激に冷え込む躰に反して、額からは汗が噴き出していた。

(何が、起ころうとしているんじゃない……)

それは予感であった。

膨大な経験に裏打ちされた、ただの予感。

恐らく、たぶん、きつと　世界を揺るがす何かが起きる、と。

(じゃが……)

けれど、今は。まずは麻帆良の責任者として、この地の安全を第一に考えなければならぬ。その為の手段として、この申し出を断る理由が無いのは確かであった。

「わかった。直ちに伝えよう」

そこで一端、言葉を区切る。

「ただし、条件がある」

『ほう？　この期に及んで要求を突き付ける気か？』

マクスウェルは面白そうに瞳を細めるが、学園長は厳として言い放つ。

「コチラにも面子がある。」

これだけの混乱を巻き散らかした輩を見逃すんじゃない。

それ相応の対価をもらわん事には納得できんよ」

『何を求める？』

インテグラの短い問いに、学園長は一瞬の停滞も無く答えた。

「何が起ころうとしておるかじゃ」

『
』

画面上の二人は、揃って沈黙した。

やがて、インテグラは何かへと想いを馳せるかのように瞼を閉じる。

数秒の沈黙を挟み、再び開かれた瞳は今までに無い決意の輝きで満ちていた。

『何も起こらない。何も起こらせない。これまでも、そしてこれからも』

対してマクスウェルは、さも愉快そうに唇の端を持ち上げながら答える。

『盛大なパーティーさ。我々の為のお披露目の場が、盛大に幕を開いて待っている』

インテグラとマクスウェルの相反する視線が、画面上で交錯する。そして、どちらともなく逸らした。

『話は終わりだ。麻帆良理事長の寛大な裁量に感謝する。』

アーカードへの言伝は

』

『では、私も多忙なのでね。失礼させてもらいますよ。』

ああ、伝言の内容ですが 』

忌々しそくに、愉快そくに、二人は口を動かす。

『『亡霊が動いた』』

会談の始まりと同様に二人は異口同音に告げると、ディスプレイから明かりが消えた。暫らく、学園長は俯いたまま動かなかった。

「学園長……」

式集院は恐る恐る事務机の前に腰を据える学園長を覗き見た。

普段は皺塗れの目尻に隠れる眼光が、理智の灯火で細く研ぎ澄まされている。

言い知れぬ凄みに晒され、式集院の心魂は竦み上がるが、それも学園長が徐に息を吐いた事で霧散した。

「……直ちにアーカード、アンデルセンの両名に使者を送るんじや。時間が経てば経つほどにネギ君達やエヴァの身が危ぶまれるからのう。」

使者は……そうじゃな。葛葉君と神多羅木君が適任じゃろう」

「は、はい……」

式集院は慌しく懐から携帯を取り出すと二人の魔法先生に順次指しを伝え始める。

学園長はその様子を遠巻きに見守りながら深く背凭れに身を埋めると、自前の携帯に指を這わせた。

「ワシじゃ。本国に最優先で知らせなければならぬ案件があるぞな」

「こうして世界は、動き出した。」

佳境

不思議だ　と。

刹那に凍て付いた意識の片隅で、厳かに響く胸中の呟きを聞いた。眼前に広がる世界はモノクロのように色褪せていて、何ら価値を見い出せない。

街灯に燈る電灯も。爆風に煽られて空を泳ぐ木の葉も。眼前で唾棄すべき狂笑を貼り付ける狂人も。果ては己自身すら、刹那の瞳に色彩を以って映す事は無かった。

唯一つ。色付いているのは、幾千幾万と剣閃を重ねた夕風のみ。

(本当に　不思議だ)

浅く握る夕風からは、熱い鼓動が確かに伝わってくる。

ドクンドクンと早鐘のように脈動する様は、まるで己の心臓が刀に移ったかのような錯覚を刹那に与えた。不快ではない。そもそも今の刹那にとって、感慨など抱く余地も無ければ必要も無かった。

ただ一心に秘めるは、文字通りの必殺のみ。

敵の首と胸を刹那にして別つ、感情を排した殺法だ。

(これなら　殺れる)

一瞬の停滞も無く、作業のように使命を果たせる。

刹那は何とも無しに確信すると、そんな己を省みて薄く自嘲した。

「こつも容易く人を殺す覚悟が出来た己が酷く滑稽で、醜悪なモノに思えて。」

「けど」

躊躇いを振り払うかのように短く呟き、刹那は大好きで、大切な友人達が褒めてくれた純白の羽を広げた。もう直ぐ煙は晴れる。それまでに、凄惨な闘争に幕を引こうと刹那は決意していた。アンデルセンも闘争の終焉を感じ取ったのか、今までの攻勢から一転して待ちの構えに転換している。けれど、その瞳はあくまでも歪な輝きを宿し続け、爛々と刹那に語り掛けていた。

来いよ。化け物。

声無き嘲りが刹那を誘う。

ギチギチと胸中で鳴り響くナニかの囁きは、刀に移った心臓の代わりか。

意識が遠のく。桜咲刹那という個性が消え失せていく。

なれば、其処に佇むのは一本の刀 人斬り包丁に相違無い。

「斬る」

口内で転がした呟きに従い刹那は動いた。

速くも無く、遅くも無い。まるで地を滑るかのような翼を用いた滑らかな拳動。

振り上げた夕凧と白翼が大気を浅く切り裂く様は、雲から地に到る雫の軌跡のように澄んでいた。

「っ!?!?」

迫り来る望んだ脅威を前に、アンデルセンは あえて一步、後退した。

愚直な進撃を繰り返してきた神の刃にとって、本来なら在り得てはならない選択。

刹那の殺意に気圧された 訳では断じてない。

ただ此処で後退しなければ、眼前の異端を殺せなくなる。アンデルセンは度重なる闘争で培った本能に拠り、それを察知していたのだ。

翻る銀閃は、虚空に垂らした銀系の如き軌跡を空間に刻む。裂かれた世界。其処から滲み出るようにして血飛沫が噴出した。

右肩から左胸までを一閃されたアンデルセンだが、辛うじて致命傷には至っていない。後退した一步の距離が明暗を分けた。仮に迎撃に出ていたとしたら、良くて相打ち、悪ければ一方的に両断されていただろう。アンデルセンは脳髓が激痛を感知するよりも早く、即座に両手の銃剣を振り上げた。

否。振り抜いたと形容すべきか。

下段から刹那の矮躯を目掛けて強襲する銃剣は、常人を置いてけぼりにした恐るべきアンデルセンの臂力によって音速を疾うに超えている。

しかし 刹那は、それを真正面から受け止めた。

鋼鉄が軋む耳障りな音響は、直後に発生した衝撃波によって塵のように霧散した。

力に勝るアンデルセンに対して、刹那は気を全身に巡らせると共に白翼を力強く羽ばたかせ、拮抗状態を作り上げる。

戦局は互いの命を対価にした鏖迫り合いに纏れ込んだ。

愚策。圧倒的に勝る機動力を殺しての現状は、その一言で刹那を罵れた。

吸血鬼とさえ正面切って殴り合えるアンデルセンの出鱈目な筋力と真正面から力比べを演じるなど、正気の沙汰ではない。

普段の刹那なら真っ先に切り捨てる選択肢だ。

だが、生憎と今の刹那は正気ではない。

正気で人は、殺せない。

故に刹那は鼻先に迫る死の恐怖にも何ら感慨を這わせることも無く、無常に『人殺し』という作業を続行する。

迅速に。迅速に。迅速に。さあ殺そう。

バチツと。夕風から一筋の紫電が弾けた。

この世に地獄が在るのなら、其処は正にソレだった。

オドロオドロしい闇の河川は緩やかに急速に大地を腐らせ大気を犯す。

神話に綴られる魔女の釜とて、こうまで醜悪では無いだろう。

際限無く溢れ出る闇は熟成した血のように薫り立ち、浮かび上がる無数の瞳は忙しく周囲を視姦している。魚類に代わって闇を蠢く百足と蜘蛛は、ひたすらに共食いを繰り返していた。

ジククジククジクジクク世界は壊れ、グチャグチャグチャグチャ咀嚼音が木霊する。地獄の闇に佇む魔王は、己の世界を睥睨すると、悦楽の吐息と共に宣言した。

「世界は斯くも緩やかに。私の領土を広げていく」

領土。哀れな伯爵の、一人ぼっちの吸血鬼の空白を埋める安息の地。

その為だけに犯し尽くされた大地は、生命の胎動の一切を停止させられていた。

伯爵の抱く闇は、やがて広場を踏み越えて麻帆良の街にまで至るだろう。

安楽の夢を見る生徒達を飲み込んで、吸血鬼の悦楽を満たす為だけの魂の奴隷と化してしまうだろう。

此処に、彼女がいなければ。

「退け、汚泥が」

涼やかな声音が穢れた世界を払拭する。
華奢な御手に渦巻くは、極寒の吹雪と宵闇に近い暗闇。

「『闇の吹雪』」
二ライズ・テンベスタース・オブスクランス

刹那。正しく闇の吹雪が顕現した。

街に食指を伸ばし掛けていた闇の河川を穿ち、真つ二つに引き裂いていく。

吹き荒ぶ吹雪に巻き上げられた地獄の闇は、高貴な暗闇によって駆逐される。

一直線に突き進む吹雪の先には、闇を待らせたアーカードが悠然と佇んでいた。

有象無象の全てを蹴散らして進撃する吹雪の暴威を欠片も恐れな

い。
寧ろアーカードは大らかに両手を広げ、暴虐を心待ちにしているようにも見える。

不意に。アーカードの口元が滑らかに動いた。

渦巻く吹雪に掻き消され、その言葉はエヴァの下に届く事無く霧散したが、それは確かに、こう言っていた。

ようこそ。闘争の夜へと。

直後、アーカードの姿は吹雪の彼方へと消え果てる。

標的を飲み込みながら尚も突き進む螺旋の吹雪は、やがて世界樹に激突した。

闇に侵食され、腐り掛けた世界樹は側面から加えられた圧力にギシギシと悲鳴を上げ、幾つかの枝葉が音も無く消し飛ぶ。それでもエヴァは魔法を解かない。その程度は小事だと、むしろ更に魔力を強めた。肥大化した吹雪は世界樹に巢食う闇を根こそぎ削ぎ落とさんと圧力を増して、微かに、闇が脈動した。

「なに？」

僅かな違和感。エヴァが眉根を顰めた瞬間、闇の残滓が津波の如く天に逆立ち、濁流となつて『闇の吹雪』に襲い掛かった。それは異様な光景だった。吹雪という名の天災が闇という名の物量に押し切られ、徐々に魔法を構成する氷と闇の精霊を貪っていく。意思なき精霊の断末魔を感受しながら、エヴァは短く舌打ちした。

「悪食め。犬畜生とて、もう少しマシな飯を食らうぞ」

これ以上は無意味と悟つたエヴァは即座に『闇の吹雪』を解呪する。

喰らう対象を失つた闇は徒党を組んでエヴァに向かうが、対するエヴァは軽やかに腕を振るうのみ。

瞬間、堆い氷壁がエヴァと闇を遮った。

行く手を塞がれた闇はバリバリと氷壁を噛み砕いていくが、既にエヴァの小さな口元は次の詠唱へと移っている。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！

来たれ氷精（ウエニアント・スピリトウス・グラキアーレス）、
大気に満ちよ（エクステンダントウル・アーエーリ）。

白夜の国の凍土と氷河を……（トウンドラーム・エト・グラキエ
ーム・ロキー・ノクティス・アルバエ……）」

一音節ごとに集う氷の精霊は各々で結び付き、急激に周囲の空間を凍て付いた冷気で満たしていく。瞬動を以って一息の間に空中へ身を移したエヴァは、眼下に蔓延る醜悪な闇の瞳に視姦されながらラストワードを宣言する。

クリュスタリザティオー・テルストリス
「こおる大地!!!」

集束した冷気は大地に宿り、氷柱となって顕現する。

花卉の如く咲き乱れた大小無数の凍て付く氷柱は闇の尽くを食い破り、凍土の中へと閉じ込めた。しかし

「ふん……やはり物理的な魔法は効果が薄い、か」

軽蔑する大地には依然として闇が好き勝手に蠢いている。

氷柱の直撃を受けて霧散したハズの巨大な百足や蜘蛛達は、無数に分裂を繰り返して、小虫となりながら活動を再開していた。

「圧倒的な再生能力　　だけでは片付けられんな。
なるほど。ようやく貴様という存在を理解したよ」

エヴァは肩越しに背後を見やる。

其処には『闇の吹雪』に吞まれた筈のアーカードが、何食わぬ顔で闇を足場に佇んでいた。その異常な事実をエヴァは露ほども気にせず、滑らかに小さな口を動かす。

「貴様は死なない訳じゃない。その逆だ。

貴様は、死に続けているだけなのだろう?」

「……………」

アーカードは答えない。
愉快そうに歪められた真紅の瞳だけが、エヴァに続きを促していた。

「思えば、貴様は私の知る吸血鬼の定義から外れ過ぎていた。身体能力は圧倒的な魔力による水増し。特殊能力は種族としての特性を魔法で補ったもの。再生能力は呪いに近い。それが私の知る吸血鬼だ。だが、貴様は違う。

魔力に拠らない純粹な身体能力。私ですら持ち得ない特殊能力。そして出鱈目としか言い様の無い不死性。そうだ。貴様はまるで物語の中から抜け出てきた、絵に描いたような吸血鬼じゃないか」

空中に舞い上がる氷の残滓を背景にエヴァは朗々と語る。
可笑しそうに。哀れそうに。眼前の吸血鬼を見据えながら。

「魔法によって真祖と化したものではない。眷属から昇華したモノでもない。

ならば、答えは一つ」

解答は単純。真実は奇抜。

「アーカード。貴様は　自然発生した吸血鬼だな？
御伽噺の世界で生きる、本物の吸血鬼なのだろう？」

パンつと。

不意にアーカードは両手を打ち合わせた。

パチパチと乾いた拍手が異常な空間に木霊する。

嬉しそうに口元を歪ませたアーカードは、演劇を観終えた観客の

ようにエヴァを賞賛した。

「素晴らしい。行き着いたか。たった一つの答えに」

「ふん。まだ私の話は終わっていないのだがな？」

「それはそれは失礼した。だが、其処まで行き着いたオマエだ。私の中身にも気付いているのだろうか？」

試すようなアーカードの物言いにエヴァは切れ長の瞳を細める。

「旧い文献で読んだことがある。当時はクダラナイ絵空事と気にも留めなかったが、実物を前にしては信じるしかあるまい」

一言一言を述べる度にエヴァの纏う覇気が、より剣呑なモノへと変質していく。

押し殺した声音は、否応にも昂る内心を鎮めているからだろうか。

「曰く、血液とは魂の通貨。啜った他者を取り込み自己を保存する生命の果汁」

吸血鬼とは血を啜る鬼。

その事実が変わりは無く、それ故のバンパイアだ。

仮に人間の尺度で観た場合、エヴァとアーカードに大した差異などありはしない。

けれど、両者を構成する根本。本質。在り方。

それは清々しい程に真逆であり、憎々しいぐらいに反り合わない。

「他者の血を啜れば啜るほど。他者を取り込めば取り込むほど。貴

様は新たな貴様を構築し、その数だけ何度でも生き返る。さながら魂の貯蔵　これほど相応しい言葉はあるまい」

酷薄な表情で語られたエヴァの言葉をアーカードは微笑を以って肯定した。

蠢く闇は、その悉くがアーカードであり、彼であり、彼女であり、貴方であり、誰かである。その事実は酷く酷く　エヴァの琴線に触れていた。

「　ああ、そうか。何故、こつも貴様が気に入らないのか分かったよ」

今更ながらエヴァは胸中に疼く靄が晴れていくのを感じた。気付いてしまえば単純なことだった。とてもとても単純なことだった。

「私は、貴様が大嫌いなんだ」

鷹揚に紡がれた堂々たる宣言は、氷塊に乗せて送られた。

数十、数百、数千。

前触れも無く広場を埋め尽くした氷の弾丸は、無様な隙を惜しげも無く晒すアーカードを瞬時に挽肉へと変える。それで終わりではない。肉片一つ。塵一つすら残す気が無いのだらう。エヴァは執拗に追撃を加え続ける。

「人間に縋っているなどと、よくも私に言えたものだ。人間に依存

しなければ自己を構築できもしない懦弱な化物が、よくも私を虚仮に出来たものだ」

だが、それでもアーカードは滅びない。

チーズのように穴だらけな骸のまま、弾幕の渦中へ嬉々として飛び込んだ。

「私は『独り』で生きてきた。たった『独り』で正義を振り翳す世界と戦ってきた」

飛び交う氷弾を意に介さず、愚直な前進を続けるアーカード。

体軀から溢れ出る汚泥の如き闇は穿たれた隙間を補い、ギチギチと空虚な歯軋りを繰り返した。

「周囲から投げ掛けられる糾弾を、怨嗟を、嘆願を。

聞き過ごし、踏み潰し、振り払いながら、たった独りで生き抜いてきた」

エヴァは指揮棒を振るうかのように腕を振り下ろす。頭上に形成された巨大な氷塊は、氷神の鉄槌の如き威容を以ってアーカードの矮軀へと迫った。

「だが、貴様は違う。貴様は『一人』だ。私のように『独り』じゃない。

貴様は真実本当に『一人』ぼっちなんだよ、アーカード」

吸血鬼としての腕力のみで強引に頭上の氷塊を砕いたアーカードの体軀は、既に負傷箇所修復を終えていた。その姿をエヴァは、ほんの僅かな憐れみを込めて見据えている。数十。数百。数千。あるいは数万の魂を内包したアーカードは決して独りではない。常に

誰かが傍にいて、常に誰かの鼓動を感じている。

だからこそ。だからこそ、アーカードは一人でしかいられない。

彼等は領民であり、配下であり、アーカードそのものだ。

一人。孤独になれない一人ぼっち。

「然り。だからこそ、私はお前に惹かれているのだろうよ」

一瞬。ほんの一瞬だけ、アーカードの表情から狂気が抜け落ち、羨望と慈愛に溢れた微笑をエヴァに向ける。それは己の一人ぼっちを誰よりも知るが故に、孤独でいられるエヴァを羨んでいるようにも見えた。

「ハッ」

それをエヴァは鼻で笑い飛ばす。
見当違いの勘違いを嘲笑する。

「弱虫が。だから貴様は吸血鬼では在れても誇りある悪には為れないんだよ」

独りと一人。

限りなく近く限りなく遠い地獄を歩んできた両者の終幕は、もう間も無く訪れる。

撤退

轟雷が地上を嘗め回した。

天から落ちるでもなく、突如として地上に華開いた雷の蕾は一切合財を閃光の腕で包み込む。それは決して安らぎの抱擁ではない。次に訪れる拒絶の衝撃が、それを如実に物語っていた。吹き荒れる暴風は周辺の木々を根こそぎ薙ぎ倒し、迸る紫電は次々に触れるモノを燃やしていく。荒れ狂った蹂躪の爪牙は暫らくの時を置いて、ようやく落ち着きを見せ始めた。

「あ、ぐ」

不意に。呻き声が、パチパチと焼け付く木々の残骸の合間から弱々しく漏れた。

ネギだ。意識が朦朧としているのか、伸ばされた手は何かを求めるかのように虚空を彷徨っていた。矮小な体躯に被さる細木が胸を圧迫しているせいか、何処か呼吸が心許無い。

「い、いつたい何が……」

半ば無意識に呟いたネギは、とりあえず息苦しさの原因の排除に掛かった。

生命の危機だからか。ネギは普段よりも格段に高い錬度で肉体強化を成功させる。

邪魔な細木を乱雑に押し退け、覚束無い足取りで立ち上がった。

「あ……」

けれど。ネギの意思とは裏腹に膝は折れ、剥き出しになった地面に倒れ込む。

三半規管を激しく揺さぶられた為だろうか。身体は言う事を聞かず、碌に動かす事すら出来ない。それでも現状に戸惑うだけではなく、必死に現状を把握しようと努める姿勢は、師の教えによるものだろう。

（確か楓さんに敵の爆撃から助けられて、茶々丸さんの怪我を心配していたら……）

ネギは慌てず、衝撃で散り散りになった記憶を一つずつ確実に縫合していく。

襲い来る爆撃から楓の多重影分身によって助けられたこと。

一先ず合流した茶々丸の両腕が酷く損傷していて心配したこと。

刹那の忠告に従って粉塵が晴れるまで警戒に徹するようにしたこと。

そこまで思い出した処で、ネギはハッと意識を完全に覚醒させた。

「そうだ！ みんなはっ!？」

ふらつく体に鞭を入れて何とか立ち上がり、周囲を見渡す。

ネギは息を呑んだ。視界に広がる景色は、従来の桜通りから様変わりしていた。

等間隔で植えられていた桜の木は粗方へし折れ、唯の火種へと変貌している。歩道に敷き詰められていた赤茶色の煉瓦は僅かに散点するだけで、どうやら粉々に砕けたか、遠くに吹き飛ばされてしまっただけらしい。

何より。肌を乱雑に撫で上げる、この帯電した大気は如何なる事か。

全身に静電気を纏っているかのような感覚にネギは肌が粟立つのを自覚するが、別段、不快だと思わなかった。先天的に風と雷の精霊との親和性が高いネギにとって、この程度は少々の違和感を覚える程度に過ぎない。

問題は、周辺一帯を意気揚々と駆け回る精霊の数。これだけの精霊が活性化する程の何かが起きた。唯でさえ血色の失せたネギの相貌は、見る見るうちに蒼白さを増していき 見慣れた少女が倒れている事に気付くと、それはより顕著になった。

「アスナさん!?!」

それまでの懸念など、一瞬で吹き飛んだ。

即座に駆け寄ったネギは細心の注意を払いながら明日菜を抱き起こす。

念の為に全身を観察するが、特に目立った外傷は見当たらない。どうやら気絶しているだけのようだ。その事実、ネギは心底から安堵の吐息を漏らした。

考えてみれば、障壁を展開しているネギですら意識が遠のき掛ける衝撃波だったのだ。常人より遥かに頑丈な明日菜と言えども耐え切れるものではなかったのだらう。

と。其処にネギにとっては聞き慣れた声が届く。

「どつやら無事のようにござるな」

「二人とも外的損傷は見られません。

明日菜さんは先程の衝撃波のショックで一時的に気絶しているだけのようにです」

声の方にネギが振り仰ぐと、何時の間にか楓と茶々丸が傍らに佇んでいた。茶々丸の手には力モが握られている。ピクピクと痙攣しているが、命に別状は無さそうだ。

楓は僅かに覗かせた瞳に安堵の色彩を宿した。茶々丸の無機質な瞳も何処か陰が解れたように見える。ネギも二人と一匹の無事を確認して気が削がれたのか、張り詰めていた表情が年相応に和らぐ。しかし、現状を思い返すと直ぐに引き締め直した。

「あの、いったい何が起こったんですか？」

訳も分からず吹き飛ばされたネギとしては、まず其処をハッキリさせておきたい。

けれど、問われた楓は口元を引き結び、何処か困惑を滲ませる。

「拙者にもわからんでござるよ。直前に巻き起こった膨大な気の奔流からして、恐らく刹那が何らかの技を使ったようござるが……」

「はい。データから判断しますと、気に雷の属性を付与して放つ大規模殲滅剣技のようです」

刹那の用いる剣術は古来より京を護り、妖魔を降す神鳴流だ。気の運用を前提とする秘剣ならば、上級魔法に劣らぬ破壊力を誇る奥義があっても何ら不思議ではない。

それより問題は別にある。

「あの……もし本当に刹那さんがやったとしたら、なんで僕達を巻き込みかねない技を使ったんでしょうか？」

ネギは戸惑いを隠し切れず、幾分か硬い声音を出す。楓と茶々丸は直ぐに答えを返せなかった。何せ事前の打ち合わせでは大規模な技を用いる案は無く、小技で持久戦に持ち込む方針であったのだ。人一倍真面目な刹那が、それを自ら破り、尚且つ仲間すら危険に晒すとは二人。特に付き合いの長い楓には考えられなかった。

(焦りからか、それとも……)

焦燥に駆られて軽率な行動に出たのなら、まだ良いと楓は人知れず思った。

それならば自分達が叱責して、フォローすれば持ち直せる。けれど、もし。もしも思い描く限り最悪の覚悟を刹那が決めて、行動したとすれば不味い。

そういう領域に引き摺り込まれたら、本業の化物に勝てる訳がないのだから。

楓は厳しく表情を引き締めて彼方へと向き直る。つられるようにネギと茶々丸も其方を見やった。其処は未だに濛々と砂煙が立ち込める、放たれた大技の起点。

「……あ」

ネギは、胸で心臓がドクンと大きく脈動するのを実感した。気付いたのだ。何時まで経っても刹那が現れないことに。

ネギは愕然とした。朦朧とした意識から立ち直ってなどいかなかった。こんな重要な事に気づけなかった自身を責めて、同時に刹那の事で意識が一杯になる。胸の鼓動は脈動を早め、早鐘のようにネギの気を急かした。

「茶々丸さん。アスナさんをお願いします」

「わかりました」

ネギは急かす心に抗いながら明日菜を茶々丸に託すと、一步、砂煙に向けて足を踏み出した。その瞬間。見計らったかのように一陣の風が吹いた。風は砂煙を薄め、その奥に佇む二人の人影を月明かりが投影する。

「刹那、さん？」

背中から生えた大きな翼のシルエットは、以前に修学旅行で見た刹那の姿と一致する。刀を振り切った状態で静止する刹那のシルエット。その足元に片膝をつく大柄な人影のシルエット。明確な決着の姿にネギの不安は払拭され、徐々に安堵と歓喜の渦が胸中を渦巻いていく。

良かった。ネギは心よりそう思った。刹那が無事で本当に良かったと。

そう、思っていた。

ズルリと。そのシルエットがズれるまでは。

「え？」

まるで古びたフィルム映画を観ているような感覚であった。
コマ送りのようにシルエットはズレ始め、ドチャツと。
水を含んだ布巾を落としたかのような音が周辺に拡散する。

呆然と。啞然と。愕然と。

ネギと。楓と。茶々丸は。

その現実を視認して、その音質を聞き届けた。

「あ」

ネギの喉が震えた。ブルブルと。フルフルと。声にならずに震えていた。

見たい。見たくない。見たい。見たくない。見たい。見たくない。
脳が警鐘を鳴らす。砂煙の向こう側を見なければ。砂煙の向こう側を見てはいけない。けれど世界はネギに躊躇の時間すら与えない。当たり前のように、より強い風が砂煙を完全に払った。其処に広がる光景は。

「あ、あ……」

ネギの心を打ち砕くには、十分に過ぎる有り様だった。

「せ、つな……?」

年齢には不釣合いな修羅場を潜り抜けた経験のある楓とて、一瞬、思考が滞った。

刀を振り下ろした刹那。その立ち姿は先刻と変わらない。
脚があつて、胴があつて、頭があつて、腕があつて、刀があつて。

けれど確かに欠けている。

桜咲刹那。異形の鳥を、その身に宿す少女。

その彼女を構成する根幹の部位が。
友達が綺麗だと褒めてくれたソレが。
純白の双翼が。

根元から、切り落とされていた。

ダクダクと背中から溢れる鮮血は、地に堕ちた翼を朱に染めていく。

赤々と。黒々と。刹那の生命の通貨で染められていた。

「つつつ!!」

瞬間。忍にあるまじき激情が楓を突き動かした。

神速の瞬動を以って蹲るアンデルセンを思い切り蹴り飛ばす。
焦げ付いた臭いを全身から発するアンデルセンは、何ら抵抗もせず
に瓦礫の山へと突っ込んだ。次いで、楓は立ち尽くす刹那を慎重
に抱き締める。既に意識は失われ、僅かに開かれた瞳には生命の色
彩が欠如していた。

だが、楓には分かった。鼓動が胸を通して伝わってくる。

刹那は、まだ生きている。

楓は即座に影分身を三体生み出すと一体に刹那を預け、残りの二
体に双翼を回収させる。此処から程近い場所。有事の際に設置した

拠点には、治癒役として木乃香が詰めている。木乃香の持つアーティフィクトなら刹那を助ける事もできるハズだ。

ならば、後は時間との勝負。最大の密度で生み出された影分身は、すぐさま夜の闇へと消えていった。

「……頼むでござるよ、木乃香殿」

親友の痛ましい姿に木乃香が動揺すれば刹那の処置が遅れてしまいかもしれない。

しかし、楓の知る木乃香は強い人間だ。決して感情に流され、最悪の事態を招くような人物ではない。楓は木乃香を信頼している。逆に言えば、信頼する事しかできない。その事実が、楓の心に暗い影を残した。

その時。瓦礫の山が崩れ、のっそりとした動作でアンデルセンが這い出てきた。

流石に神鳴流の奥義の直撃は堪えたのだろう。全身は酷い火傷によって焼け爛れ、顔立ちすら判然としない。再生の許容量を超えた為か治癒は遅く、完治には程遠い有り様だった。それでも口元に浮かぶのは、間違いなく嘲笑。

これが闘争の結果だ。そう訴えかける意思が、狂気と共に齎される。

再び激情に駆られ掛けた楓は、しかし直前で何とか怒りを呑み込む。今は怒りに任せて突き進む時ではなく、冷静に戦況を見極める事が肝要だと必死に己を戒めた。

（戦況は最悪でござるな。刹那は抜け、拙者は先程の影分身に気の半分以上を費やした。茶々丸殿も明日菜殿を安全な場所に連れて行かねば自由に動けないでござろう。ネギ坊主も……アレを見た後では厳しいか）

確かにアンデルセンにも大ダメージを与えたが、これまでの様子を見る限り楽観視はできない。根本的に何かが違う相手の事だ。また何か仕掛けてくる可能性は否定できず、嫌でも慎重になるしかなかった。何より現状、戦力に数えられるのは楓一人。

最悪。その結論に誤りは無かった。

（とにかく、明日菜殿を避難させなければ。いや、いつそネギ坊主に任せて一緒に）

ふと。アンデルセンから決して視線を逸らさず、思考を巡らせていた楓は気付く。

隣から、異様な気配が立ち上っていることに。

「ネギ坊主……？」

何時の間に近づいたのだろうか。俯いたネギは、無言で楓の側に佇んでいた。

「……っ……！」

ツウと。冷や汗が楓の頬を伝う。如何にアンデルセンに意識の大半を割いていたとはいえ、周囲の警戒を怠っていた訳ではない。にも関わらずネギの接近を許した。

その事実、ほんの少しだけ楓の心に波風を立てた。

「う、あ」

声が聞こえる。何かを耐え忍ぶかのような呻き声が、俯いたネギから漏れ出る。

ネギの放つ異様な雰囲気を、かつて楓は遠目からであるが、見た事があった。

そう。アレは麻帆良学園に紳士然とした侵入者が入り込んだ際に

記憶を反芻する楓。けれど事態は停滞なく進む。クルクルと回る時計のように。

「うわああああああああああああああっ！！！！」

ネギの発した悲痛な咆哮。それに呼応してネギの体内を膨大な魔力が巡回する。

魔力の暴走。オーバードライブ 体躯に眠る膨大な魔力を強引に開放する自爆技の一種だ。未だ扱い切れぬ魔力の奔流はネギから理性を削ぎ落とし、一心に一つの事柄だけを胸中で繰り返させる。

許さない。許さない。僕の生徒を傷つけた人を、絶対に許さない！！

ネギは殺意すら秘めた壮絶な瞳でアンデルセンを睨み付けた。

それに対して。アンデルセンは焼け焦げた喉で、けれど確かに笑って見せる。

「いかん！？ ネギ坊主！！」

咄嗟にネギを制止しようと楓は動くが、僅かに遅い。

ネギは溢れる魔力に身を任せて特攻すべく、膝を屈め　パチンと。

何処からか響いた軽い音が、衝撃波を伴ってネギの躰を吹き飛ばした。

出鼻を挫かれたネギだが、咄嗟に防御したのだろう。

意にも介さず、即座に体勢を持ち直して再び突撃の構えを見せるけれど、今度は楓の制止が間に合った。瞬動を以ってネギの背後を取った楓は首筋に手刀を落とす。

「あ……」

ネギは脅威の技巧で鮮やかに意識を刈り取られ、そのまま楓の胸元に崩れ落ちた。

ふうと一息を吐いた楓は大切そうにネギを抱き留め、告げる。

「些か乱暴でござるが、助かったでござるよ」

「気にする必要はない。無謀な同僚を諫めるのも仕事の内だ」

暗がりから堂々たる足取りで現れた男は、タバコの煙を燻らせながらそう嘯いた。

厳つい顔立ちにサングラス。隙無くスーツで身を包んだ風貌にダンドイな雰囲気。

何処と無く危険な臭いが薫る男の名は神多羅木。れっきとした麻帆良学園の魔法先生である。

「ところで、何故ここに？」

先生方は麻帆良周辺の警戒にあたっていると聞いていたのでござるが……」

「その必要も無くなった。私はメッセンジャーとして学園長に派遣されたに過ぎん」

「メッセンジャー？ それはどういう……」

「説明は後だ。ともかく、今は事態の収拾を優先させる」

神多羅木は楓の疑問を切り捨てるとアンデルセンに向き直り、厳然と告げる。

「『聖堂騎士』アンデルセン。戦闘は此処までだ。貴様には直ちに麻帆良から撤収してもらおう」

その言葉に楓と茶々丸は驚くが、当のアンデルセンは七割ほど再生した貌を不快そうに歪めた。未だ完治しきっていない喉からは酷く聞き取り難い声が吐き出される。

「このほれが、いはんをかるかみのせんへいたるこのほれが、しめひをははさずひくほのかよ。」

《この俺が、異端を狩る神の尖兵たるこの俺が、使命を果たさず退くものかよ》「」

「貴様の上司の命令だとしてもか？」

ピクリと。アンデルセンの眉尻が僅かに動いた。

神多羅木は肺一杯にタバコの煙を吸い込み、ゆっくりと吐き出しながら述べる。

「俺も詳細は知らされていないが、学園長にイスカリオテ機関とH

ELLISINGから連絡が入ったらしい。両機関は派遣した者の即時撤退を通告する為に麻帆良学園を経由する判断を下した。その伝言だが

『亡霊が動いた』それだけだ。

伝えるべき事は伝えたと神多羅木は黙り込む。

傍から聞いていた楓と茶々丸は意図の読めない伝言に考えを巡らせた。

けれどアンデルセンには万の言葉よりも精確に意味が伝わったのだろう。

瞳を限界まで見開き、体が不自然に大きく震えている。

「ふは」

不意にアンデルセンは呼気を荒く吐き出した。

「ふ、ふふふ、ふはははあはははははあはあはははああははあっ!!」

唐突に歪な笑い声を夜空に響かせるアンデルセンは実に楽しげだ。愉快で愉快で仕方が無い。そんな風に笑い続ける。

「ほうか、つひに、つひにはひまるのか！ われらのせひせんがはひまるのか!？」

《そうか！ ついに、ついに始まるのか！ 我らの聖戦が始まるのか!?!》

狂ったようにアンデルセンは天に向かって喝采を挙げる。

ただただ純粹な神の奴隷。その有り様を楓は、そして茶々丸ですら気持ち悪いと思った。神多羅木は何も言わない。そのサングラスに隠された瞳は、どのような感情をアンデルセンに向けているのだろうか。

一頻り笑った後、アンデルセンは三人に背を向けた。

既に戦意は感じられない。唯の大きくて広い背中だ。

「ほまえたひはあとまわひだ。やつらをはたづけたら、すふにもどつてふる

《お前達は後回しだ。奴らを片付けたら、直ぐに戻ってくる》」

アンデルセンは悠然と歩き出す。次の戦場へと。一心不乱に進撃する。

「ああ、それと」

不意に。アンデルセンは立ち止まると肩越しに楓を見やった。幾分か再生が進んだ風貌には穏やかな微笑みが浮かんでいる。慈愛に溢れる神父。今のアンデルセンを形容するなら、正にソレだった。

「あの双子の少女達に伝えてください。貴女方に主の祝福があらんことを、と」

その言葉を最後にアンデルセンは麻帆良から去る。去り際の宣言とは裏腹に。彼は今後二度と、この地を踏む事は無かった

闘争、閉幕（前書き）

今回が最終話になります。

闘争、閉幕

驚異的な質と圧倒的な量。

其処で行われている闘争の本質を簡潔に述べるとしたら、これ以上に対応しい表現は無かった。

「　っ！！」

精巧な風貌。華奢な四肢。白磁の肌。かつて貴族の子女として蝶よ華よと大切に育てられていた頃の片鱗が垣間見える美麗な体躯。本来なら争い事とは無縁で、心優しい家族や家臣に囲まれながら窓辺にて日々の争いを遠くに過ごす。

そんな生活を送っていたであろう少女　　そんな生活を奪われてしまった少女。

在りし日は遠く、残響は空しく胸を穿つ。何度となく過去に想いを馳せながらも立ち止まる事無く歩み続けた少女は、やがて真正正銘徹頭徹尾の化物へと成り果てた。

膨大な魔力。不老不死という種族特性。悠久の時を経て蓄えられた叡智。

何もかもが規格外で、人間の尺度では到底表し切れない至高にして孤高の存在。

真祖の吸血鬼エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。

醜悪な闇の濁流に身を晒されながらも仄暗い光華は衰えを見せず、高貴な闇を惹き連れる。

放たれる魔法は世界を塗り替え、強靱な体躯は万夫不当の剛を体現する。

正しく驚異的な質。生半可な者では足元にすら這い寄れぬ絶対強者の姿が其処には在った。

けれど。彼の者に対する存在もまた、埒外の怪物。

「　　っハ！！」

千変万化の肢体。蠢く闇の河川。進む狂気。

絶え間無い運命に翻弄された憐れなダレかにして、狂おしいまでに他者を求めずにはいられない寂しがり屋。何処までも何処までも何処までも独りぼっちでありながら、決して一人ではいられない有り様は、いつそ滑稽ですらある。

その身に巢食う業によつて国すら滅ぼした人間。それが変じて化物へと堕ちた人でなし。

呆れるほどに殺し殺されながら、終には人に飼われる事になった英国の番犬。

彼は束縛されてこそ安らぎを覚え、帰る場所が在るからこそ孤独を感じないでいられるのだ。

究極の不死性。伝承に残る多彩な能力。奈落の底に堕ちきつた精神。

飽くなき闘争に身を焦がす御伽噺の存在であり、同族に対する最大最強のジョーカー！。

不死の吸血鬼アーカード。

狂気と理知が混同する溝川の如き瞳は高貴な闇を捉えて放さず、醜悪な闇と化した体躯で歓迎する。

幾度と無く穿たれる身体は再生を繰り返し、次から次へと闇は無尽蔵に滲み出る。

これこそが圧倒的な量。個にして群。全にして一。その在り方で万物を飲み干す悪食の具現である。

エヴァンジェリンとアーカード。

対極の方向性ながら共に最強の名を冠するに相応しい吸血鬼達。そんな吸血鬼達の闘いが極東の果て、一人の観客すら無く行われている。

惜しい。あまりにも惜し過ぎる世界の損失だった。

もし然るべき者が余す事無くこの闘争を綴っていたなら、どれほど有益な記録となっていたか。

少なくとも後世に於いて、魔法使い達が『質』と『量』の優劣を論じる際、一つの指標として扱われたに違いない。それほどの闘いだった。それほどに莫迦げた闘いだったのだ。

エヴァンジェリンという個体が勝るか。アーカードという群隊が呑み干すか。

闘争の決着は、近い。

「チッ」

エヴァは端正な相貌を崩して短く舌打ちを漏らした。

戦況は膠着している。一進一退 などではない。まず互いに退の字が無かった。

共に防御は最低限に留め、攻撃に傾倒している。無論、交わされる攻め手は尋常ではない。

一撃一撃が凡百の使徒を殲滅せしめる威力を秘めている。特にエヴァの放つ魔法は強力だ。

麻帆良学園を壊滅させない様に注意こそしているが、局地的な戦術魔法を惜しみなく連発している。常人なら当の昔に魔力切れを起こして地に伏せるか、衰弱死していても何ら可笑しくはない程の魔力消費。エヴァの持つ生来の魔力と真祖というポテンシャルが異常なのだ。

魔法砲台。現在のエヴァは魔法使いとしての在り方を完全に体現していた。

けれど。それだけの魔法を一身に浴びてもアークカードは斃れない。不敵な狂笑を崩さず、闇の濁流を手足のように操りながらエヴァを捕食せんと躍り掛かる。

その度にエヴァは真っ向から迎え撃つが、何度と無く退けてもア

「カードは愚直な前進を止めようとはしない。少しずつ。ほんの少しずつ。エヴァの柔らかい肢体を目指して漸進し続けていた。」

「切りが無い、か」

エヴァは忌々しげに吐き捨てた。これまでの攻防で嫌というほど把握していたが、アーカードという存在はエヴァから見ても出鱈目だ。特に再生能力は世界最高峰だろう。これに比べれば真祖の再生能力すら霞み果てる。それを可能にしているのがアーカードを構成する無数の魂。魂の貯蔵。ストックされている魂が尽き果てるまでアーカードが減びることは無い。

(いや……そもそも本当に奴の魂の総数は減っているのか?)

一握りの疑念がエヴァの脳裏を掠めた。

これまでのエヴァの魔法ではアーカードに効果は見られない。

しかし、表面的には効果が無くとも着実に魂の総数は減らしている。

そうエヴァは考えていた。最終的にアーカードの貯蓄した魂を奪い尽くせば己の勝利は揺るがないと。

(本当にな?)

エヴァは魔法を放つ思考とは分離させた、別の思考を加速させる。何か前提を履き違えているような違和感が拭えない。何か。何か。何か。

高速で巡る思考。すると、不意にカチツと。頭の中で歯車が噛み合う音がした。

導き出された推測が、思わず小さな口から零れ落ちる。

「貴様……取り込んだ魂と同化しているのではないだろうな」

複数の魂が同化してるとしたら数という概念自体が崩壊している為、減少という結果には辿り着けない。即ち、そもそもアーカードという個体の存在強度が高過ぎるせいで、如何なる攻撃も致命傷には至らないのではないか。エヴァはそう懸念する。

「否」

けれど。アーカードは短く、簡潔に否定した。

「そうか」

それをエヴァは真に受ける。疑いすらしない。

騙し騙され合うなんて小賢しい段階は当の昔に過ぎている。故にエヴァは、その推測をスッパリと脳内から消去して、新たな可能性を検討し始めた。

「ハッ」

その様をアーカードは嘲笑う。

「まるで人間のように理屈で考えているな、エヴァンジェリン。私を『御伽噺』と言ったのはお前だろう？ 難しく考えるなよ。もっとシンプルに考える。ほんの少しばかり数が多いだけで、殺され続けなければ私とて何時かは死ぬ。実に簡単だろう？」

「ハッ。貴様の不細工な面を見続ける私の身にもなれ。今の私の心境はな、家畜を延々と屠殺しているようなものなんだよ。終わりの見えない作業に辟易として何が悪い。少しは横道に逸れたくもな

るさ」

散々な物言いに人型を模るアーカードは肩と思われる部分を殊更に竦めて見せた。

「嫌われたものだな、私も」

「好かれないのか？」

「まったく」

「だろうな」

応酬される軽口の合間にも殺し合いは継続している。とは言っても若干の変化は見られた。

単純に殺し続ければ良いと本人から御墨付きを得られたことでエヴァの戦法は威力重視から手数重視へと変じていた。真祖と言えど魔力は無限ではない。元々の量が規格外とはいえ、使えば使うだけ着実に減っていく。アーカードの魂の総数が定かでない以上、魔力はできるだけ節約しなければならぬ。

エヴァの魔力が尽きるのが先か。アーカードの魂のストックが尽きるのが先か。

詰まる所、諸々の要因を除いて闘争の結末を予見すると、このまま持久戦の泥仕合に突入するのは確実であった。年甲斐も無く派手好きなエヴァとしては、些か以上に不服な未来予想図である。思わず溜め息が漏れる程に。

「はあ……相性が悪いとは思っていたが、ココまでとはな。互いに

決定打を欠いた闘いほど退屈なものはないというのに、こうなると興醒めも良い所だ」

「化物同士の闘争など、そんなものだ。そんなものだからこそ、面白い」

「黙れ、ウォーモンガー戦争狂」

思わず特大の魔法を打ち込むが、当のアーカードは殺されても意に介していない。どうやら本当に泥仕合を心底から楽しんでいるらしく、その表情は狂いながらも何処か生き生きとしている。一方のエヴァは先程までの意欲を完全に失っていた。

何故ならエヴァはアーカードが大嫌いなのだ。

本来なら一瞬でも視界に入れたくない相手が喜々とした風貌で向かってくる。

それだけなら八つ裂きにすれば事足りるが、それを百数十と繰り返せば話は別だ。

段々とエヴァは闘えば闘うほどアーカードを喜ばせるだけではないかと気付き始めていた。

この手で憎らしい怨敵を殺し尽くしたいという想いは当然あるけれど。それ以上にエヴァの胸中ではアーカードを楽しませている事への苛立ちが募っていた。

一昔前のエヴァならば、こうした所懐を抱いた時点で素気無くアーカードを振っているだろう。

餌を盗られた犬のように喚いていと鼻で笑い飛ばしたハズだ。

だが、現在のエヴァには、それができない理由がある。

（仮に私が戦闘を放棄すれば、コイツは間違いなく麻帆良を襲う。そうして何もかもを食い尽くしてから悠々と私を探し回るのだろうか）

それは駄目だ。駄目といったら駄目なのだ。

少なくとも女子中学生としてのエヴァンジェリンは、その結末を認めない。

なればこそ胸中に蔓延るアーカードへの憤懣を押し殺して闘っているのだ。

（尤も 現実問題として、このままではマズイか）

エヴァとアーカード以外に闘争の結末を左右する諸々の要因。

その殆どはエヴァにとってマイナスになる。

まず停電の回復。

これが為されたらエヴァの魔力は再び最弱状態まで抑え込まれる。そうなれば均衡は容易く崩れ、瞬く間にエヴァは闇の濁流に飲み込まれるだろう。現状を把握している魔法先生が最強の駒を放棄する可能性は低いが、目の届かない第三者を信用するほどエヴァは耄碌していない。可能性として有り得る以上、考慮は必要だった。

次に、このまま夜が明けてしまった場合。

エヴァとアーカードは共に日の光に耐性があるハイデライトウォーカーである。故に日光を浴びようと戦闘に支障は無いが、問題は一般人が活動を始める事だ。これ程の闘いを麻帆良全規模で隠蔽するのは流石に不可能。一般人を巻き込む事無く事態を収めるには夜明けがタイムリミットになるのは確実であった。

（ 使うか？ ）

エヴァには切り札がある。

魔法を体内に取り込む事で戦闘能力を大幅に増幅させるエヴァ固有の魔法技が。

それを用いればアーカードを殺すペースも飛躍的に向上するだろう。

けれど。それは諸刃の剣だ。

強力な技は総じて消耗が激しい。

仮にアーカードを殺し尽くせなければ本当に打つ手が無くなる。

下手をすれば魔法技の解除の瞬間を狙われ、逆に殺されかねない。

それだけの危険を犯してまで魔法技を 『マギア・エレベア闇の魔法』を使うべ

きか。

「何を悩む必要がある」

不意に。アーカードは静かに告げた。

苛烈な進撃は止まり、静寂が広場を包み込む。

「あるのだろうか？ 切れるカードが。ならば逡巡など不要だ。

そんなものは犬にでも食わせてしまえ。そら、どうした？ 早く見せてみる。」

早く（ハリー）。早く（ハリー）！ 早く（ハリー）！！」

狂気に彩られたコールは続く。

まるで包み紙で覆われる玩具を前にした子供のように喚き立てる。くだらない挑発。切って捨てられて当然の語り口。

そんな安い挑発に。

「上等だ」

エヴァは、あえて乗った。

このまま時間を掛ければ何れにしろタイムリミットになる。だから。
切り札の存在を悟られているのなら隠している意味はない。だから。
か。

そんな、どうでもいい理由で飾り立てる必要なんて無い。
最終的にエヴァを突き動かすのは、たった一つの事柄なのだ。

舐められるのは気に入らない。

そんなチツポケな矜持を護る為ならば、何もかもをベットする事に此かの躊躇も無い。

昔も今もこれからも。エヴァはそうやって生きてきて、いつかそうやって死ぬのだから。

「それでこそだ。エヴァンジェリン」

これまでの狂気が嘘の様に、穏やかな表情でアーカードは称賛する。

それに応えるようにポウツと。エヴァの両腕に歪な文様が浮かび上がった。

其処から溢れ出る濃密な魔力は、通常のソレとは明らかに毛色が違う。

その魔力は闇の気配を漂わせながら、何色にも染まる無色をイメージさせた。

ゆっくりと、見せ付けるかのようにエヴァは魔力を全身に循環させる。

節約していた魔力を使い果たす気ているのか、練られる魔力は甚大だ。

エヴァの覚悟を嗅ぎ取ったアークカードは滲み出る闇を鎧のように纏っていく。

此処に決戦の準備は成った。後は、切っ掛けさえあれば再び開幕のベルは鳴るだろう。

当然の如くベルは、その間を置かずに鳴り響いた 尤も。

「間に合いましたか」

それは開幕では無く、閉幕を告げるベルだったが。

恐らく瞬動を用いたのだろう。無粋な闖入者は唐突に出現した。妙齡の女性だ。色素の薄い長髪を腰まで靡かせ、キリッと引き締

まった表情と物腰は『出来る女』をイメージさせる。その手に納刀された長刀を携えていなければ、アクセントの眼鏡と相俟って男子生徒から人気を博す女教師になっていた事だろう。尤も、実際に彼女は教師なのだが。

彼女の名は葛葉刀子。

麻帆良学園の魔法先生の一人にして、刹那と同じ神鳴流の剣士だ。

ちょうどエヴァとアーカードの中間に現れた刀子は安堵の息を吐いていた。

一方、予想だにしない顔見知りの登場にエヴァは盛大に眉を顰める。

「葛葉刀子？ 何故、貴様が此処にいる。魔法先生は麻帆良周辺の警戒に当たっているのではなかったのか？」

「状況が変わりました。私は学園長の指示で、それを伝えるに来たのです」

「なに……？」

エヴァは訝しげに刀子を見やった。瞬間。

「無視するなよ、女」

ゾルリと。アーカードを構成する闇が蠢動した。

闇の波は徐々に大きくなり、津波となって無防備に佇む刀子に襲い掛かる。

それを遠目に視認したエヴァは慌て ない。

むしろ、成り行きを見守るかのように沈黙していた。
頭上まで到達した闇は刀子の艶かしい肢体を月光から覆い隠す。
隣れ、エヴァから見捨てられた刀子が闇に飲み込まれる。寸前。

閃光が、奔った。

幾つもの光の軌跡が闇を斬り裂き、それに伴う衝撃波が闇を纏めて蹴散らす。

見れば、刀子の手に握られていた長刀の刃は外気に触れ、淡い気の波動を放っている。

疑いようも無い。先程の閃光の正体は、刀子の剣腕に拠るものだった。

「ほう」

極東の流麗な剣技にアーカードは思わず感嘆の声を漏らした。

少し前には刹那に腕を斬り飛ばされたが、あれは不意打ちの為に観察する事はできなかった。

こうして改めて見る機会ができたのは僥倖と言う他にない。

「……少しぐらい助ける素振りを見せてくれませんか？」

一方の刀子は自らの腕を誇るでもなく、傍観者に徹したエヴァに文句を言う。

それに対するエヴァの返答は何処までも辛辣だった。

「ガキ共なら兎も角、お前には助けなど必要ないと判断したまでだ。仮にも神鳴流剣士。私を含め、ああいった輩の相手はお手の物だろうっ？」

「だからって、多少は……」

「くだい。私に食って掛かる暇があるなら己の未熟を恥じる。詠春の奴ならついでにそいつの頸を飛ばしていたぞ」

「長と一緒にしないでください！」

流石に大戦期の英雄と比べられては刀子と言えど未熟の罵りは避けられない。

憤懣やる方ない刀子は鋭利な眼光でエヴァを射抜くが、当のエヴァは素知らぬ顔だ。

「それより、ジジイの指示とは何だ？ 私達の間割り込んだ以上、余程の用件なのだろうな？」

「……そうですね。まずは用事を終わらせましょう」

刀子は沸々と湧き上がる激情を何とか押し殺す。

元々、刹那から沈着冷静と称されるだけはある、一度落ち着きを取り戻せば問題ない。

教師然とした態度に戻った刀子はエヴァとアーカードを交互に見やっけて静かに語り出す。

「先程、学園長とHELLSING機関局長及びイスカリオテ機関局長の三人で会談が行われました」

「っ！？ どういうことだ！？ 何故、このタイミングで……！？」

「詳細は分かりませんが、会談は両機関から持ち掛けられた

ようです。彼等の要求は一つ。両機関が派遣した戦力に即時撤退命令を伝えることです」

「……なんだ、それは」

エヴァは両機関の意味不明な要求に困惑した。

討ち取るべき対象が未だに現存しているというのに撤退を命ずる意図が読めない。

それとも既に滅ぼしたとも思っているのか。それはそれで気に入らないが。

「く、ふ」

不意に。混乱するエヴァの耳朶に、耳障りな音が届いた。

刀子も聞いたのだろう。其方の方に視線を向けている。

「くは、ふふふ」

音の主は、アーカードだ。彼は両腕を腹部に回して身を屈めている。

吸血鬼の腕力で抱え込まれた腹はギリギリと軋みを上げていた。

溢れ出そうになる何かを必死に抑え付けている。そんな印象を二人に与えた。

「そ、それだけか？」

「え？」

「我が主からの言葉は、それだけかと聞いている」

怒気も露にエヴァは言い放つ。

するとピタリと。アーカードの笑い声は止んだ。

蠢動していた闇も落ち着きを取り戻して、気持ち悪く周辺に蔓延っている。

「すまないな、エヴァンジェリン。用事ができた。私は帰らなければならぬ」

「……理由を言え」

「『飼^{マスター}い主』が『帰還しろ（ハウス）』と命じた。それ以上の理由が必要か？」

「……………」

「そんな顔をするな。これは私の、私達の劇なのだ。お前のじゃない。私の劇なのだ。公演内容を漏らす役者はいない。だから私は何も言わない。だから、お前も何も聞くな」

言葉を綴るアーカードの下に闇が這うようにして地面を滑る。

ジユクジユクと闇はアーカードに取り込まれ、次第に姿を消した。そしてアーカードの姿もまた、闇夜に溶け込むようにして消えていく。

「さらばだ。エヴァンジェリン。私の愛しい好敵手。また会おう」

消える寸前。アーカードは親愛の情を籠めて告げた。

静寂に包まれる広場。エヴァはアーカードのいた場所を睨むと吐き捨てる。

「二度と会うか、莫迦者が」

斯くして。二匹の吸血鬼に拠る三十年前の約束は果たされた。

騒乱の舞台が幕を下ろした事で、演者は日常に戻ろうとする。

けれど。彼等は知らない。

次に演じられる演目の名を。自らが前座に過ぎなかった事を。

嗚呼。準備は着々と進んでいく。

そうして魔法使いを置き去りにして、舞台が整えられた。

演目を書き記した品書きが、ゆっくりと捲られていく。

殴り書きされた最後の劇が発表される。

その名は【戦争】

五十年前の約束が、幕を開ける。その結末は、誰が観る？

END

闘争、閉幕（後書き）

あとがき

本編のネタバレを含みます！

まだ未読の方は注意してください！

さて、ようやく『殲滅の時』を完結させる事ができました。

元々は単純にエヴァとアーカードを絡ませたいという欲求から書き出しましたが、徐々にモチベーションが下がり、ここまで長引いてしまいました。以前からお読み頂いている方は大変申し訳ないです。最終話が「打ち切りっぽくね？」と思われた方もいるでしょうが、あの終わり方は書き始めた当初から漠然と思いつかべていたものでした。なんとというか、綺麗に完結させるよりも汚く終わらせた方が良いかなと自分の中で結論が出ていたので。

『殲滅の時』は原作の時系列の合間に無理やり両作品を放り込んだ形の構成ですので、正直、原作そのものの時系列とは割り切って書いていました。綺麗な終わり方にする場合、こうした時系列のバランスを取る必要が出て来るのですが、どう考えても蛇足になります。それならいっそ、本作の根幹であるエヴァとアーカードの対決が終わった時点で無理矢理にでも完結にしようと思っていたわけです。

もちろん一応、後日談は考えていますが、仮に掲載するとしても本編とは別の番外編という形になります。

英国編に至ってはエヴァの参加が不可能なので悩み中。
ロンドン在住のアーニヤの命運は……神のみぞ知る？

何はともあれ、ここまでお読み頂き本当にありがとうございます。
まだ『小説家になろう』にはオリジナルの Comedy 小説『聖華高校
？ ああ、あの変人の巣窟ね』を連載中ですので、よければそちら
もご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5343t/>

殲滅の時

2011年6月14日07時13分発行